2026 九州高等学校地理教育研究会 第24回研究大会（鹿児島大会）

大会公式サイト

つなぎ合わせ、結びつけ、新しい未来を切り拓く。

九州高等学校地理教育研究会

第24回研究大会

鹿児島大会

期日：2026年8月5日（水）～8月7日（金）

会場：川内駅コンベンションセンター SSプラザせんだい

〒895-0012　鹿児島県薩摩川内市平佐1丁目18

主催：九州高等学校地理教育研究会

鹿児島県高等学校教育研究会地歴公民部会地理分科会　薩摩川内市

後援：鹿児島県教育委員会　薩摩川内市教育委員会

九地研第24回研究大会

つなぐ むすぶ

鹿児島大会2026

目次

1 ごあいさつ p.2～3

2 大会日程 p.4～7

3 講演 p.8～13

「これからの『地理』学習に期待されること」
～社会とつながる『地理』ならではの学び～
国立大学法人 兵庫教育大学先端教職課程
カリキュラム開発センター教授 濵野 清 先生

4 研究発表 p.14～68

(1) 鹿児島 **志學館中等部・高等部 中田 直孝**
極私的授業実践例2026

(2) 熊本 **熊本県立東稜高等学校 石田 啓三**
地理教育における問いの構造化と可視化
～地理的な「問い」と「考察プロセス」に着目して～

(3) 長崎 **長崎県立五島高等学校 相知 颯太**
授業におけるGISの活用について
～スポーツコース・衛生看護科での実践を中心に～

(4) 佐賀 **佐賀県立佐賀西高等学校 髙橋 武**
3年間を通した新課程地理教育（地理総合、地理探究）
～佐賀県立佐賀西高等学校における実践例～

(5) 沖縄 **沖縄県立首里高等学校 城間みなみ**
地理探究における探究活動の授業実践例
―環境保全と観光振興の両立について―

(6) 大分 **大分県立中津南高等学校 守山 達郎**
『指導と評価の一体化』を目指した授業改善の取り組み

(7) 宮崎 **宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 上田 聖矢**
「個別最適な学び」と「協働的な学び」と「指導と評価の一体化」をつなぐ・結ぶ地理の授業デザイン ～生成AI 活用を基盤とした「自走する学び」を目指して～

5 地域調査 p.70～85

(1) 巡検Aコース（甑島）1日目
～海岸地形が語る地球の記憶～
鹿児島県立加治木高等学校 徳留 裕明

(2) 巡検Aコース（甑島）2日目 ～地層で島の過去とつながる・橋で島を未来へとつなげる～
鹿児島修学館中・高等学校 今林 克也

(3) 巡検Bコース（北薩・伊佐）
～曽木の滝から菱刈鉱山へ～
鹿児島県立大口高等学校 嶽釜 将

(4) 巡検A代替コース（薩摩川内）
～地域調査Aコース甑島 代替コースの紹介～
鹿児島県立鶴翔高等学校 砂泊 豊

6 役員・大会実行委員一覧 p.86

ごあいさつ

九州高等学校地理教育研究会 会長 田口 浩太郎
（鹿児島県立武岡台高等学校 校長）

九州高等学校地理教育研究会第24回研究大会（鹿児島大会）の開催にあたり、皆様におかれましては、公務ご多端の折、九州・沖縄の各県からご参加いただきましたことに対し、大会実行委員会を代表して歓迎の意を表させていただくとともに、深く感謝申し上げます。

さて、本研究大会は、参加各県相互の友好と連携を密にしながら、研究発表・講演・地域調査を通して、高等学校における地理の具体的な指導方法について、より一層の研鑽に努め、地理教育のさらなる充実・発展を図っていくことを目的としております。

今回の大会テーマである「つなぐ・結ぶ…地理　～薩摩川内・甑島から～」は、現行の高等学校学習指導要領における地理教育の方向性と深くかかわるものです。「地理総合」においては、地理的事象を相互に関連づけて理解したり、地域や地球的課題と関連づけて考察したりすることが重視されています。すなわち、自然・歴史・産業・文化・人々の暮らし、また社会の在り方、そして自らの学びを多面的に「つなぐ」「結ぶ」という視点が極めて重要であると考えます。

開催地となる薩摩川内・甑島地域は、まさに本テーマを体現する場であります。九州新幹線の開業は、九州における人・もの・情報の流れを大きく変え、地域相互の結びつきを一層強めました。また、2020年に完成した甑大橋は甑三島を陸路で結び、地域の発展に新たな可能性をもたらしています。加えて甑島は特色ある自然地形と豊かな民俗文化を有し、近年は「アートの島」として地域内外を結ぶ交流の拠点としても注目されています。本大会が、地理教育における「つなぐ」「結ぶ」という視点をあらためて見つめ直す契機となることを願っております。

さて、本大会の１日目の講演会では、兵庫教育大学先端教職課程カリキュラム開発センター教授の濵野清氏をお迎えし、「これからの『地理』学習に期待されること～社会とつながる『地理』ならではの学び～」と題してご講演をいただきます。社会とつながる地理の学びについて、示唆に富む機会となることを期待しております。

また、２日目以降の地域調査については、甑島コースと川薩・伊佐コースを計画いたしました。甑島コースでは里・手打の麓集落、甑大橋、西岸断崖クルーズ等を通して島の自然・歴史・文化を体感していただき、川薩・伊佐コースでは菱刈鉱山、曽木の滝、曽木発電所遺構を巡り、地域の産業・地形・歴史を多角的に考察していただければ幸いです。

結びに、ご参加いただいた皆様にとって、本大会が今後の高等学校地理教育の活性化をさらに進める契機となりますことを心より祈念申し上げますとともに、本大会の開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました鹿児島県教育委員会、薩摩川内市、薩摩川内市教育委員会をはじめ、関係諸機関及び関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

薩摩川内市長 田中　良二

令和８年度九州高等学校地理教育研究会第24回研究大会鹿児島大会の開催にあたり、御挨拶を申し上げます。

本大会が本市において開催されますことを大変嬉しく思うとともに、日頃から地理教育の充実・発展に御尽力されている皆様を本市にお迎えできますことを、心より光栄に存じます。また、本大会の開催に向けて御尽力いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。本日は、九州・沖縄各県より本市へ多くの皆様方にお越しいただき、誠にありがとうございます。本大会が、参加者の皆様にとって、日頃の研究成果や実践を共有し、相互に研鑽を深める貴重な機会となるとともに、今後の地理教育のさらなる発展につながる実り多きものとなることを心より願っております。

本市は、平成16年に１市４町４村が合併して誕生しました。現在の本市の人口は約９万人で、豊かな自然環境と歴史に培われた文化が調和した、個性あふれるまちとして発展を続けております。

東シナ海に面した変化に富む海岸線や、市街地を悠々と流れる一級河川「川内川」、ラムサール条約登録湿地である「藺牟田池」など、多様な自然環境に恵まれております。また、甑島列島は断崖や陸繋砂州など地形の変化に富み、国定公園に指定されています。また、令和７年４月には甑島で発見された化石や岩石などが約1,000点展示されている「甑ミュージアム」がオープンしました。さらには、令和８年２月、「甑島片野浦のカノコユリ群落」（通称：みっちり草原）が国の天然記念物に指定されるなど、本市の自然的価値は一層高まり、全国的にも注目を集める地域となってきております。とりわけ川内川は、本市の地形や暮らしを理解するうえで欠かすことのできない存在です。川内川は熊本県・宮崎県・鹿児島県にまたがる広い流域をもちながら東シナ海へと注ぐ九州有数の一級河川で、市街地をゆったりと貫流するその姿は、本市の景観を象徴するものであると同時に、流域の自然・産業・文化を結びつける大きな軸となっております。

また、川内川は豊かな恵みをもたらす一方、流域においてはたびたび水害と向き合ってきた歴史も有しており、治水とまちづくり、防災教育を考えるうえでも極めて示唆に富む地域資源であります。近年は河川改修や流域治水の取組が進められ、川と共生するまちの在り方が改めて見つめ直されており、流域自治体連携の下、「河川空間」と「まち空間」が融合した良好な空間形成を目指すかわまちづくりが進められています。このように川内川は、地形や災害・防災、さらには人々の生活・文化との関わりを総合的に学ぶことができる題材で、地理教育の視点からも意義深い存在であると考えています。

さらに、本市は豊かな自然だけでなく、歴史・文化の面でも多くの魅力を有しております。国の重要無形民俗文化財に指定された420年以上の長い歴史のある「川内大綱引」をはじめ、同じく国の重要無形民俗文化財の「東郷文弥節人形浄瑠璃」、ユネスコ無形文化遺産の「甑島のトシドン」、国の重要伝統的建造物群保存地区の「入来麓武家屋敷群」など、先人が築き上げてきた貴重な伝統と文化が今なお大切に受け継がれております。

本市では、こうした恵まれた地域資源を活かしながら、安心して住み続けることができるように10年先を見据えて「第３次薩摩川内市総合計画」を策定し、本市が目指す「未来のまちの姿」を設定しています。教育においては、快適な教育環境を整え、子供たちが地域の歴史や文化を身近に感じながら、誇りと愛着をもち、次の世代につないでいけるように取り組んでいるところであります。

本大会におきましては、本市の地理的特性や地域資源に関心を深めていただき、今後の教育実践の一助としていただけましたら幸いに存じます。

結びに、本大会の開催に多大なる御尽力賜りました関係者の皆様に改めて感謝申し上げますとともに、御参集の皆様の今後益々の御健勝と御活躍、並びに地理教育のさらなる発展を心より祈念申し上げ、歓迎の御挨拶といたします。

大会日程

【1日目】8月5日(水)

会場:SSプラザせんだい

JR川内駅より徒歩1分、駐車場は北側に58台分あります。また、Dパーキング川内駅東口駐車場（348台）も提携駐車場です。



地理院地図（1/10000）

9:50～10:20　受付(ヴィーナ・エナジーホール入口)

（旧称：多目的ホール）

10:20～10:40　開会行事

①開会の言葉　**大会副実行委員長　新村耕一**
（鹿児島県立鶴翔高等学校校長）

②歓迎の挨拶　**大会実行委員長　田口浩太郎**
（鹿児島県立武岡台高等学校校長）

③主催者挨拶　**薩摩川内市長　田中良二**

④来賓紹介　**鹿児島県教育委員会・薩摩川内市教育委員会**

10:50～12:30　講演

《演題》

「これからの『地理』学習に期待されること」
～社会とつながる『地理』ならではの学び～

《講師》

国立大学法人 兵庫教育大学先端教職課程
カリキュラム開発センター教授　濵野　清　先生

12:30～13:30　昼食

13:30～14:45　研究発表Ⅰ

＜鹿児島＞

「極私的授業実践例2026」

中田　直孝(志學館中等部・高等部)

＜熊本＞

「地理教育における問いの構造化と可視化」

石田　啓三(熊本県立東稜高等学校)

＜長崎＞

「授業におけるGISの活用について」

相知　颯太(長崎県立五島高等学校)

14:45～15:05　休憩

15:05～16:55　研究発表Ⅱ

＜佐賀＞

「3年間を通した新課程地理教育（地理総合、地理探究）」

高橋　武(佐賀県立佐賀西高等学校)

＜沖縄＞

「地理探究における探究活動の授業実践例
―環境保全と観光振興の両立について―」

城間　みなみ(沖縄県立宮古高等学校)

＜大分＞

「『指導と評価の一体化』を目指した授業改善の取り組み」

守山　達郎(大分県立中津南高等学校)

＜宮崎＞

「「個別最適な学び」と「協働的な学び」と「指導と評価の一体化」をつなぐ・結ぶ地理の授業デザイン～生成AI活用を基盤とした「自走する学び」を目指して～」

上田　聖矢(宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校)

16:55～17:00　諸連絡

【2日目】8月6日(木) Aグループ【甑島】

※朝の集合時間は、川内駅東口と川内港の2通りあります。自家用車を使用する方は駐車場が無料の川内港集合をお勧めします。熱中症等予防のため、軽装でご参加下さい。

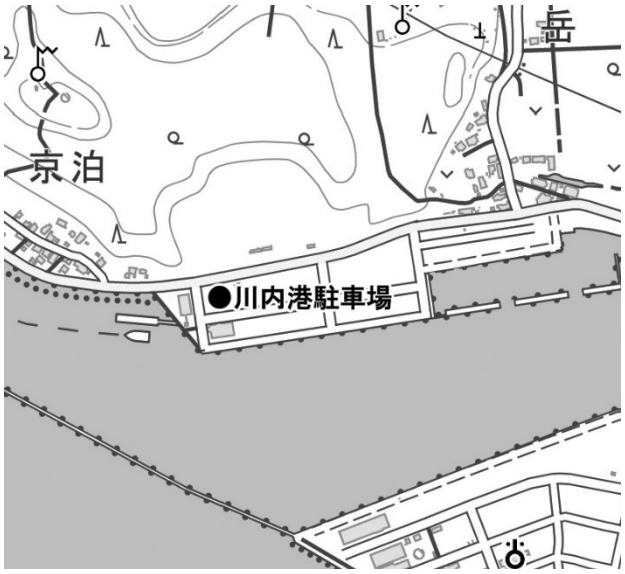
7:30～　川内駅東ロロータリー集合　集合時に受付



地理院地図（1/10000）

7:45～8:25　移動　バスで移動

8:20～　川内港集合（直接川内港に行く方）
集合時に受付



地理院地図（1/10000）

8:50～9:40　川内港 → 里港　高速船「甑島」で移動

9:40～10:00　移動

10:00～10:45　離島の麓集落
公認観光ガイドと歩く里麓集落

10:45～11:05　移動　バスで移動

11:05～12:10　海岸地形見学(長目の浜・貝池・海鼠池)
全体写真撮影（田之尻展望所）

12:10～12:30　移動

12:30～13:25　昼食　甑ミュージアム3階ホール

13:30～14:20　甑ミュージアム見学　学芸員による説明

14:25～14:45　移動　到着後乗船準備

15:30～17:00　西岸断崖クルーズ
「かのこ」28名+「Fしまかぜ」12名

17:00～17:30　移動

※断崖クルーズ不可の場合

15:00～16:30　手打集落散策、こしき海洋深層水工場見学

16:30～17:30　移動

17:30　ホテルエリアワン着

【2日目】8月6日(木) Bグループ【菱刈金山】

※大会2日目は、熱中症等予防のため、軽装でご参加ください。



地理院地図（1/10000）

7:30 **川内駅東口集合** 集合次第出発 集合時に受付

7:30～9:00 **移動** バスで移動

9:00～11:15 **曽木発電所遺構見学・曽木の滝見学**

11:15～12:10 **昼食** 野草庵

12:10～12:30 **移動** バスで移動

12:30～15:30 **住友金属鉱山株式会社菱刈鉱山見学**

15:30～16:50 **移動(移動中閉会行事)** バスで移動

16:50 **川内駅東口到着** 解散

【2日目】8月6日(木) Aグループ代替案

※台風等の荒天により甑島へ渡ることが不可能になった場合はこちらの代替案になります。大会2日目は、熱中症等予防のため、軽装でご参加ください。集合場所は左図のBグループと同様です。

～8:30 **川内駅東口集合** 集合時に受付

8:30～9:00 **移動** バスで移動

9:00～9:35 **藺牟田池**

9:45～10:10 **祁答院蒸留所**

10:20～10:40 **入来麓** 全体写真撮影

10:40～11:00 **移動** バスで移動

11:00～11:40 **寺山いこいの広場**

11:40～12:00 **移動** バスで移動

12:00～13:10 **昼食** 駅周辺でバス降車 各自昼食

13:30～15:10 **川内港周辺**

(13:30～14:00) **①川内原子力発電所展示館**

(14:15～15:10) **②甲冑工房丸武**

15:10～15:30 **移動** バスで移動

15:30 **川内駅東口到着・閉会行事** 解散

※当日の天候等により、訪問先・時間などが変更する場合もあります。

【3日目】8月7日(金) Aグループ【甑島】

※大会3日目は、熱中症等予防のため、軽装でご参加ください。

7:50～ 集合 ホテルエリアワン入口

8:00～8:30 移動 バスで移動

8:30～9:25 中甑・下甑景観展望

(8:30～8:50) ①夜萩円山公園

(8:55～9:25) ②鳥ノ巣山展望所

甑大橋（県内最長道路橋） カノコユリ群生地

全体写真撮影

9:25～9:45 移動

9:45 長浜港着

10:30～11:40 長浜港→川内港 高速船「甑島」で移動

11:50～ 閉会行事 バス利用の方は川内駅まで送迎

12:40 川内駅東口着

これからの『地理』学習に期待されること

～社会とつながる『地理』ならではの学び～

兵庫教育大学　濵野清

1. はじめに

本研究会大会に関わっては，2014年開催の第18回研究大会（熊本大会）において「中学校地理的分野を踏まえ，高等学校の地理授業に求められるもの」と題し，前年度から年次進行で実施する旧学習指導要領についてお話しする機会をいただいた。そこでは，中・高等学校地理学習における共通課題として，課題解決のための思考力等の育成，社会参画の視点，日常生活と関連付けた学習内容などについて触れ，その充実を図る必要性についてお話しした。ここでの諸点はいずれも不易の事項であり，その後，現行学習指導要領下において設置された地理総合，地理探究においても引き継がれ，表現の違いはあれど，充実すべき重要な課題として位置付けられている。

そしてこのたびは，さらに新たな学習指導要領策定に向けた議論が本格的に動き始めたこのタイミングを捉え，私見とはなろうが，以下の点について言及させていただくことを考えている。

すなわち，前段では，大会テーマとして示された「つなぐ，むすぶ」といった視点に注目して，現行から次期学習指導要領につながる議論の動向を確認し，後段において高等学校地理必履修に至った経緯を振り返りつつ，現行学習指導要領及びこれからの地理学習に期待することを述べてみたい。

2. 次期学習指導要領に向けた動向と「つなぐ，むすぶ」ことの議論

およそ10年に１度のペースで改訂が進む学習指導要領ではあるが，その不断の動きは，今まさに改訂の具体化に向けた議論へと移行しつつある。改訂議論の司令塔である中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（以下，「教育課程企画特別部会」という）からは，すでに昨年９月には，「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」が公表され，次期改訂に向けた大枠が示されている。

これは，以下に示された全８章からなるが，その第１章に示された「次期学習指導要領に向けた基本的な考え方」としては，①「主体的・対話的で深い学び」の実装（Excellence），②多様性の包摂（Equity），③実現可能性の確保（Feasibility）が掲げられている。このうち①については，「現行学習指導要領が目指している，『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善を通じた資質・能力の育成について，一層の具現化・深化を図るもの」と位置付けられている。このことから，改訂の方向性としては，現行の学習指導要領で示された授業改善の営みをより充実させつつ，多様な子供たちの実態に対応し，その実現のための環境整備に注力するものと捉えることができ，それが第２章以降の章立てに示された具体化の手順からも伺える。

第1章	次期学習指導要領に向けた基本的な考え方
第2章	質の高い，深い学びを実現し，分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方
第3章	多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方
第4章	情報活用能力の抜本的向上と質の高い探究的な学びの実現
第5章	「余白」の創出を通じた教育の質の向上の在り方
第6章	豊かな学びに繋がる学習評価の在り方
第7章	その他諮問で提起された事項の在り方
第8章	今後の検討スケジュールや検討の在り方等 (1)

現在は，この論点整理を踏まえ，各教科等に分かれて，その目標や内容等に関わる議論が進行中である。このうち社会・地理歴史・公民ワーキンググループ（以下，「社会科等WG」という）は，昨年９月に設置され，本予稿投稿の5月末時点において，都合８回の会議が開かれている。その初回会議においては，社会科等WGが果たすべき検討事項として，次頁に挙げる，２点，計９項目の事項が示された。

1. 教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

(1)社会科を通じて育成する資質・能力のあり方・示し方

(2)社会科の指導と評価の改善・充実のあり方

(3)誰一人取り残さず資質・能力を育成する柔軟な教育課程のあり方

2. 社会科等に関する課題を踏まえた固有の検討事項

(1)小・中・高等学校における目標・内容・方法の体系的な整理

(2)社会的諸情勢の変化に伴う新たな課題を踏まえた検討事項

(3)「民主的で持続可能な社会の創り手」の育成に関する課題を踏まえた検討事項

(4)AI などデジタル技術の発展に関する課題を踏まえた検討事項

(5)上記(1)～(4)を実現する上での環境整備

(6)その他 (2)

1点目の検討事項は，記載のとおり教育課程企画特別部会の議論を踏まえた各教科等共通の事項であり，引き続き「資質・能力」や「見方・考え方」の整理を行う中で，指導と評価の改善を図る教育課程改善を検討しようとするものである。そして2点目として示された項目が社会科系教科(社会科及び地理歴史科，公民科）固有の課題であり，そのうち冒頭の1項目目が，校種，科目間等を，2，3項目目が学校教育と実社会を，それぞれ「つなぐ，むすぶ」視点として求められる検討事項と解される。

3. 現行学習指導要領下において進められた「つなぐ，むすぶ」ことの議論

(1) 改訂全体における「つなぐ，むすぶ」ことの議論

次期学習指導要領において，教科として求められる「つなぐ，むすぶ」ことの充実については，実は，現行学習指導要領を検討する過程において，その端緒が示されてきた経緯がある。というのも，先の検討事項2(1)は，前掲の「カリキュラム・マネジメント」，同じく2(2)，(3)は，後掲の「社会に開かれた教育課程」という，現行学習指導要領改訂の根幹をなす基本的な考え方とも言えるからである。

カリキュラム・マネジメントの3つの側面

① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。

② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。

③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。 (3)

社会に開かれた教育課程

① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。 (4)

これらの大方針については，学習指導要領の「設計図」とも称される中央教育審議会答申 (2008) (以下，「2008 年答申」という。）に明記されており，さらにそこでは，「学習指導要領に向けた各教科等における議論においては，各教科等で学校や学年段階に応じて学ぶことを単に積み上げるのではなく，義務教育や高等学校教育を終える段階で身に付けておくべき力を踏まえつつ，各学校・学年段階で学ぶべき内容を見直すなど，発達の段階に応じた縦のつながりと，各教科等の横のつながりを行き来しながら検討が行われた」(5)ことなども示されている。

このように今回「学びの地図」と位置付けられた学習指導要領については，その「何を学ぶか」という枠組みを検討するに当たり，「教科等を学ぶ意義と，教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成」がその前提とされた。それでは，その現行学習指導要領に込められた教育課程上の「つなぐ，むすぶ」要請について，さらに社会科系教科についても確認していきたい。

(2) 教科における「つなぐ，むすぶ」ことの議論

さて，多くの人々にとって，社会科系教科は，小学校から

中学校に至る過程で三つの分野に分けられ，さらに高等学校では，教科・科目に細分されるなど，学びを重ねていく中で細かく専門化される教科だと思われるかもしれない。ある意味それは真実であり，その実態を否定するものではないが，現行の学習指導要領では，この社会科系教科を単に細分化，専門化されていくものとは捉えず，学校種という縦軸と分野や科目という横軸を，しっかり関連付けることを意図してきた。昨今よく耳にする「スパイラルな学び」という言葉があるが，これは社会科系教科においても当てはまる考え方となる。小・中学校ともに社会的事象を扱いながらも，小学校の「総合社会科」としての複合的な視座からの学びを経て，中学校では三つの分野からなる多面的・多角的な視座からの学びへと，学校種や学年，分野によって学びの断絶が生じない，視座を変えつつも重層的に繋がる学びが期待される。さらに，このスパイラルな学びが高等学校の地理歴史科・公民科に繋がることは，中学校社会科三分野の延長上に，三つの必履修科目（地理総合・歴史総合・公共）が新たに設置されたことからも明らかである。そこで，小学校で何をどのように学んできたのか，それが中学校にどうつながり，高等学校で何をどのように学ぶことになるのかを確認してみることが必須の要件となる。すなわち，小学校さらに中学校から受け取ったバトンをいかに高等学校に受け渡せばよいのか，また，受け取ればよいのか，小・中・高等学校と学校種を繋ぐ社会科系教科のカリキュラム・マネジメントを意識した，各学校種ならではのカリキュラム・デザインを描くことが求められている。

(3) 高校「地理」における「つなぐ，むすぶ」ことの議論

既述のとおり，この現行改訂においては，初等中等教育における社会科系教科の学習を通して育成すべき資質・能力が，学習内容の構成等とともに議論されたことで，高等学校地理歴史科・公民科においては，（結果として従前と同一名称となった倫理，政治経済を含む）全ての科目が，その必修・選択の位置付けも含めて刷新されることとなった。とりわけ地理領域科目としては，地理総合の設置によっておよそ半世紀ぶりに必履修体制となるに及び，図１に示されるように，「準義務教育化する高等学校進学率を考えるとき，高等学校地理必履修化は，『悉皆で地理を学ぶ最後の機会』の延長」という，従来とは異なった位置付けがもたらされた。

このことは，改めて「どこまでを中学校で学び，どこからを高等学校で学ぶか，発達段階，学習の習熟を踏まえた接続」の再検討を強いることとなり，他の学習領域以上に，小・中学校における学習内容の洗い出しに始まる，社会科系教科を貫く「つなぐ，むすぶ」作業が求められることとなった。

このことに関わる詳細は本小論においては割愛するが，大会においてはその現行学習指導要領策定に至る作業過程，あるいは策定後に全国指導主事会の説明会等で使用した資料を提示することで，コンテンツとコンピテンシーの両側面から整理し，お示しをしたい。

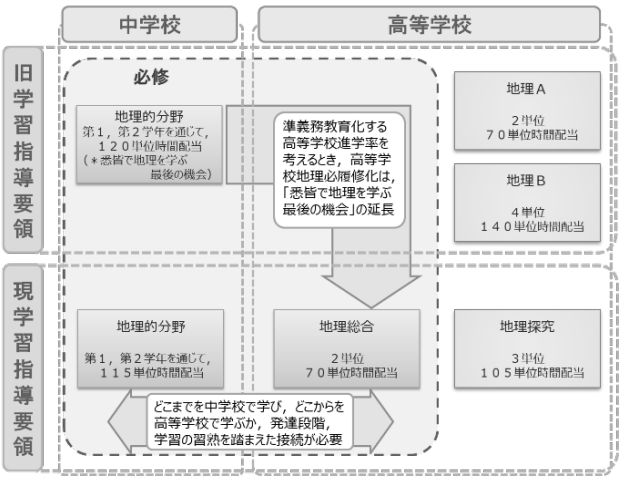


図１　中学校地理的分野と高等学校地理領域科目の位置付けの変容　　（筆者作成）

4. 高等学校地理領域科目に期待される学び

ここからは，現行学習指導要領において期待される地理の学びについて，そのポイントとされる事項を振り返ってみたい。ただし，ここで取り上げるポイントとは，学習指導要領解説さらには月刊中等教育資料に記載された項目ごとに整理されたものではなく，学習指導要領の策定過程において，高等学校における「地理」の学びに求められた主要な事柄を箇条書きにまとめたものであり，とりわけ必履修化する地理総合に対する要請が中心である。世界史必履修体制を改める中で，敢えて地理を必修化する必要性が問われる中で，ここに示された項目は，ある意味，必履修によってもたらされるであろう成果を，なかば公約のような形で表明させられてきた事項でもある。

このことについては，2021年3月に実施された日本学術会議・日本地理学会共催による公開シンポジウム「新しい地理教育のスタートに向けて」においても述べたこと(6)ではあるが，ここで改めて整理し，お伝えしたい。

(1)「地理」必履修化に至る議論と経緯

2006年に全国の高等学校で表面化した，いわゆる「世界史等未履修問題」が生起した。直後の2008年答申では「必履修教科・科目の未履修の問題と高等学校の必履修教科・科目の在り方とを直接的に結び付けて検討を行うのは適当ではない」(7)とし，2009年公示の高等学校学習指導要領地理歴史科では，従前の科目構成が維持された。しかし，その一方で，以下にも示すとおり，「地理歴史に関する総合的な科目の設置については，具体的な教育内容の在り方等について今後更に検討する必要があると考えられる」との課題も呈せられ，文部科学省内外で議論が進行することとなった。

2008 年答申 6(2)3 必履修教科・科目の在り方
（各教科ごとの改善の方向性）

○次に，地理歴史，公民，理科といった知識・技能の定着やそれらを活用する学習活動を重視する教科については，現行どおり，選択必履修とすることが適当である。その際，

・　現在，世界史から1科目，日本史，地理から1科目の計2科目が選択必履修科目となっている地理歴史については，小・中学校において，日本史や日本及び世界の地理の学習が行われているという現状を踏まえると，高等学校における現行の必履修科目の定めには一定の合理性があり，現実的な選択肢である。ただし，「世界史」の内容について，日本史や地理との関連を一層重視するなどの観点から見直す必要がある。

なお，地理歴史に関する総合的な科目の設置については，具体的な教育内容の在り方等について今後更に検討する必要があると考える。(8)

その後文部科学省では，省内での議論と並行して，学習指導要領の規定に拠らず地理歴史科の必履修体制についての研究を行う研究開発学校の指定を行い，実証研究を進めていった。また，日本学術会議でも早い段階から先の課題を受け止め，2011年には提言として，「新しい高校地理・歴史教育の創造－グローバル化に対応した時空間認識の育成－」が公表され，今日の地理総合，歴史総合の設置に繋がる，地理歴史科教育の在り方に関わる具体的な提案も行われた。

(2) 新たな「地理」教育，「地理」学習に求められたこと

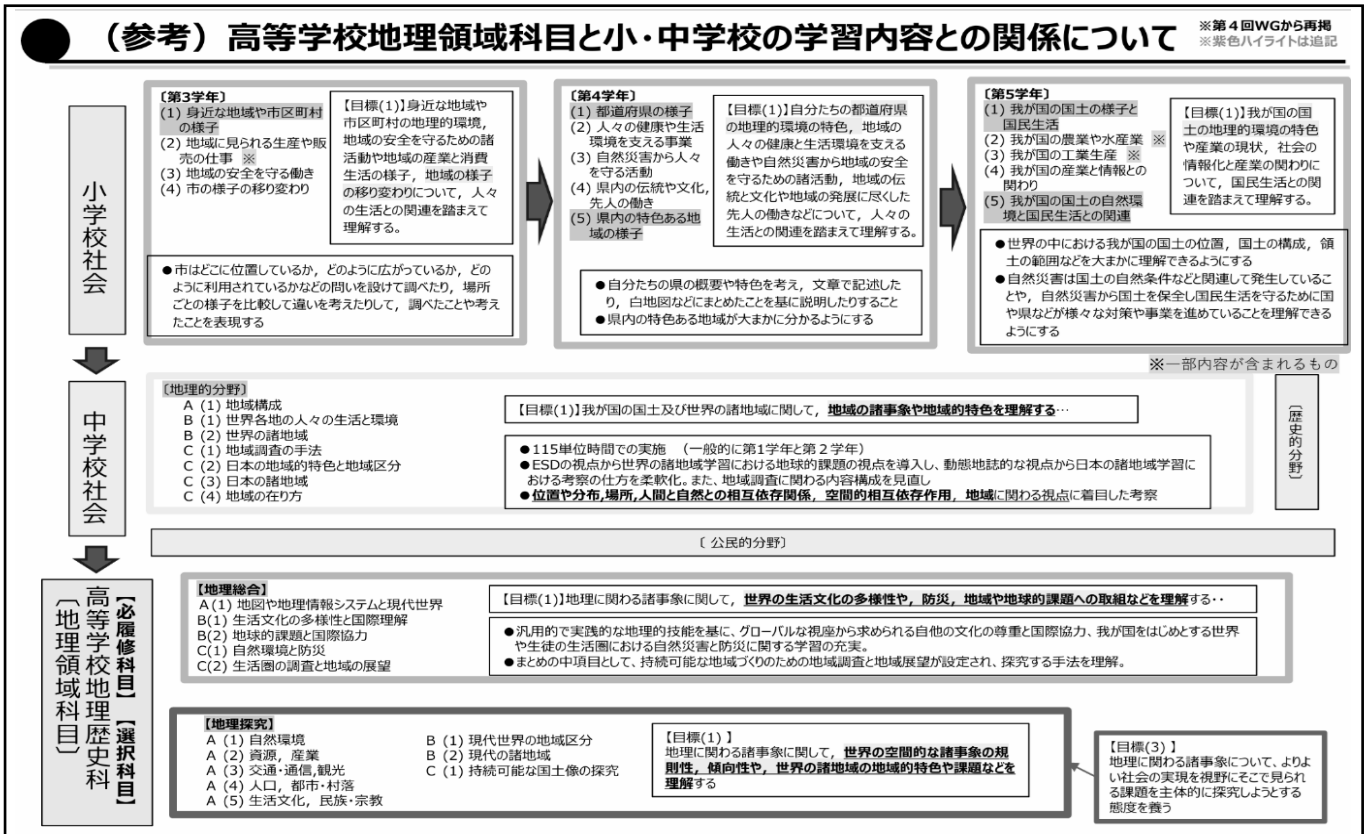
この時期，省内では，新しい時代に必要となる資質・能力の育成などといった大きな文脈からも学習指導要領の改善が図られていた。その過程では「なぜ地理を教えなければならないのか」，「地理の学びにおいて身に付けるべき資質・能力とは何か」などという問いが折に触れて下問され，「何を教えるか」という視点とともに，「どのように学ぶか」「どのような力が身に付いたのか」といった視点からも，地理が必履修するに足る科目であることの説明が求められた。そして，これらの指摘，要請に応える中で，以下の点を「約束」し，高等学校の新必履修科目地理総合，選択科目地理探究の骨組みが作り上げられていった。

改訂学習指導要領において地理に求められたこと

○地理教育国際憲章によってコンピテンシーが整理されるなど，国際標準に立脚した学問，教育分野であること
○それらのコンピテンシーに基づく「見方や考え方」を用いた，考察を中心とする学習を重視していること
○我が国が国際的に主導してきた，持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）を中核とする構造をとっていること
○教科化等の議論のあった防災に関わり，既に解説の一部改訂で対応し，防災教育の中核となる実績をもつこと
○ＩＣＴ教育の充実のため，他科目，他教科等でも活用可能な地理情報システム（ＧＩＳ）を導入としていること
○自然や社会を対象とした文理を融合する視座とともに，日本と世界をともに扱うグローバルな視座をもつこと (9)

5. 今後の地理学習内容に関わる議論の動向

未だ中央教育審議会において社会科等WGの議論が進行している現段階で，(同様に，次期学習指導要領改訂に関わる中央教育審議会の答申公表にまでは至ってないと想定される８月の大会段階で，) 今後の学習指導要領について何かを語ることは拙速の感は否めない。ただし，これまでの教育課程企画特別部会及び社会科等WGの議事から，今後の議論の方向性や検討課題については，その概要が伺えるものもあり，ここではそのうち社会科等WGにおいて提示された資料を取り上げ，大会当日でのコメントにつなげたい。



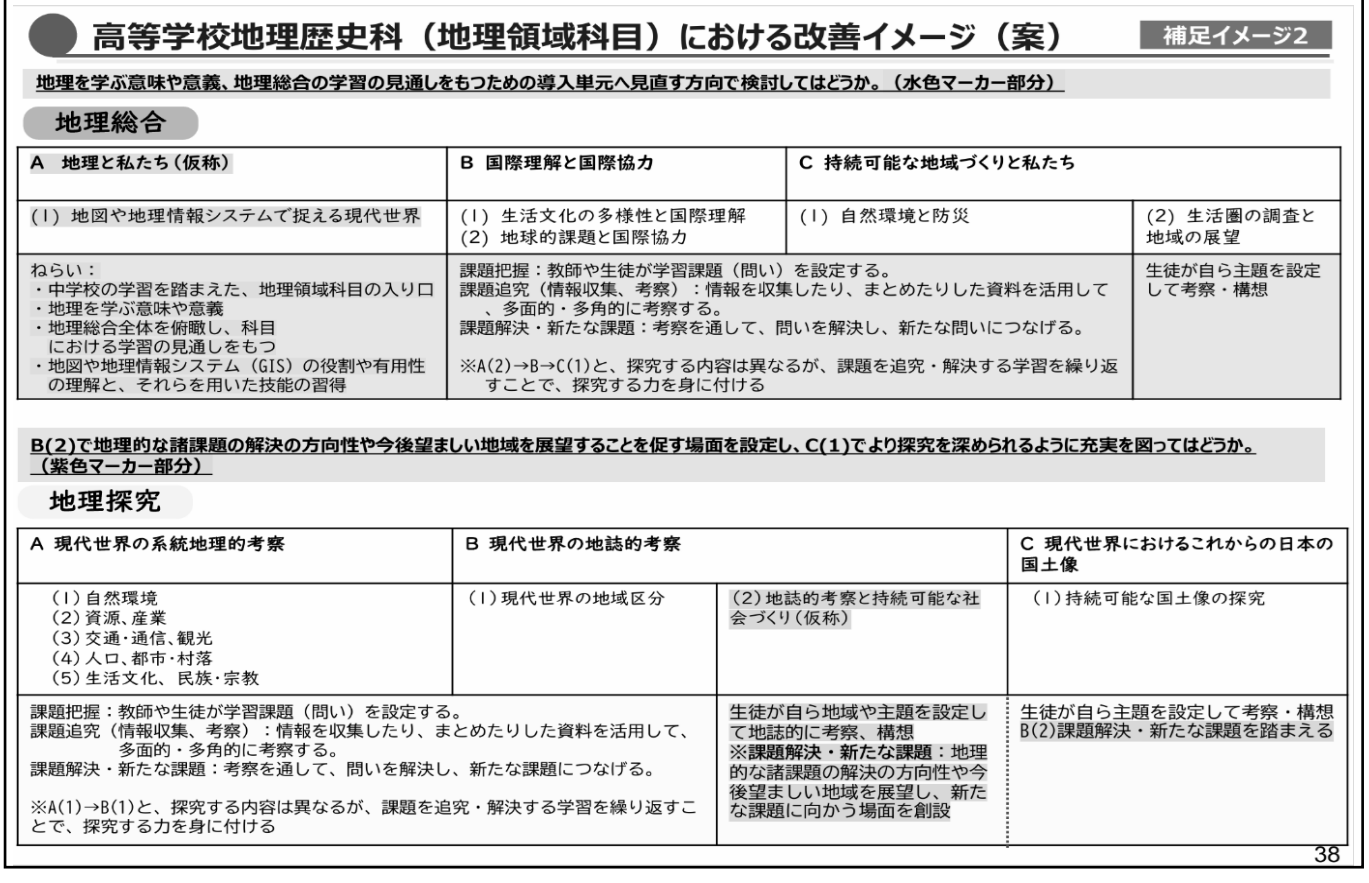


図2 今後の高等学校地理領域科目の改善案（上図）と小・中学校学習内容との結び付き案（下図）

(10)

本稿冒頭にも示したように，改訂議論の全体像としては，主体的・対話的で深い学びの実装，多様性の包摂，実現可能性の確保といった基本的な考え方の下で議論が進行中であるが，それらを社会科系教科としての高等学校「地理」の学習内容に反映させた資料としては，次頁に図２として掲載したものが，その具体的な姿として挙げられる。構想段階として示されたこの資料が，最終的にどのような形で結実するのかは，今後の議論の推移を見守るしかないが，会議当日の社会科等WG参加委員の発言を見る限り，概ねこの資料に示された方向性の下で，更なる検討が進められるものと思われる。

6. おわりに

今後の学校現場での実践に当たっては，既述した「改訂学習指導要領において地理に求められたこと」がしっかりと意識化された授業展開が必要であり，それらを支えるための様々な環境づくりが継続的に必要となる。本大会の場をお借りして，九州高等学校地理教育研究会を含む地理教育さらには社会科教育に関わる方々にそのことをお伝えするとともに，先に示した「約束」が空手形と捉えられることの無いよう，引き続きのご尽力並びにご支援をお願いしたい。

（大会当日使用する資料については，講演冒頭のスライド上にＱＲコードを示し，提示する予定です。）

注及び参考文献

以下に掲載する参照webサイトについては，いずれも2026年５月20日閲覧，確認による。

(1)中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会 (2025)「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」p.1から引用
〈URL〉https://www.mext.go.jp/content/20260129-mxt_kyoiku01-000045057_01.pdf
(2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループ「第１回会議(2025.9.26)資料６」p.4,5から引用
〈URL〉https://www.mext.go.jp/content/20260130-mxt_kyoiku01-000044902_9.pdf
(3) 中央教育審議会（2016)「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申)」pp.23-24から引用
(4) 上掲書pp.19-20から引用
(5) 上掲書p.46脚注から引用
(6) 『改訂学習指導要領において地理に求められたこと』(2021.3.28)日本学術会議地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会，日本地理学会共催 公開シンポジウム「新しい地理教育のスタートに向けて」における発表資料から。
(7) 中央教育審議会（2016）p.41から引用
(8) 中央教育審議会（2016）p.44から引用
(9) 『改訂学習指導要領において地理に求められたこと』(2021)日本地理学会発表要旨集p.108から。
(10) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループ「第６回会議(2026.3.23)資料１」p.45,38から引用
〈URL〉https://www.mext.go.jp/content/20260323-mxt_kyoiku01-000048294_03.pdf

極私的授業実践集2026

志學館中等部・高等部　中田 直孝

1. はじめに

このような研究発表では､多くの人が実践できることから、限られた人でないと実践できないことまで色々なものがあるが、私がやってきたことは、極めて限られた人にしか出来ないことらしい。

私自身はそこまで大変なことをやっているとは思っていないのであるが、教職に就く多くの人々が持っている場合が多い特性や強みとは違う部分を必要とすることだからなのかもしれない。学生時代にゼミの教官に言われた「これからは2つ以上の専門を結びつける人間が重要になる」という言葉の呪い（もしくは福音）のお陰で、教育現場においては非常に弱いと感じていた表現方法・技術に関して常に20年以上様々な実践を続けてこられたのであるが、現在に至るまで、ほぼ同じことができる地理教員に出会えてはいない。直接出会うだけでなく、どこかでそういう実践例や研究報告を見たこともない。

また、これまでにも同じ学校で教える地理教員を中心に、場合によっては他教科の教員にも方法や考え方を伝えたことは何度もある。しかし扇央やシラス台地上にある畑に水を撒くが如く、時間と労力をかけて伝えた言葉は虚しく消えていくのである。

もう私も若くはないため、これから全国に存在する（かもしれない）受け取る力のある非常に限られた人数の地理教師（1%もいないと思われる）に伝えていくことは容易ではない。もはやできることと言えば、その限られた人にいつかどこかで届いて、その人がもっと広めていけるように足跡を残しておくことぐらいしか出来ないのではないかと考えるようになった。

ある意味これは、教育現場に対する私の遺言である。

もしくは量産型教員に対する、アウトサイダーor群れの外に立つ人間からの宣戦布告とみなしてもらっても構わない。

今回、基本的には細かいHow toを紹介するわけではない。どちらかと言えば思想・哲学的な主張が主である。こちら側に渡って来たい方が現れれば、そこからのサポートは個別に十分に行うことは可能である。
紹介する実践例は具体的には以下の3つである。

①　各種データは基本的にAdobe Illusutrator およびPhotoshopで作成する。（1998-　本格的には2005-）
②　授業ではUSBメモリに入れたJPEGデータをプロジェクターで投影する。（2010-）
③　授業サイト（Webサイト）を作成してデータ閲覧・配布・提出・コミュニケーションを可能にしておく。（2020-）

その他にも私が他の教員に伝えられることはまだまだあるのだが、それらの話はこれからの状況次第である。具体的には、様々なカメラの活用方法や、映像編集、映像配信についての話などであり、教科指導で常に必要なことではなく、どちらかと言えば学年での活動や学校行事という教科指導以外の場面での活用が主になるため、今回は取り上げていない。

なお、この研究発表はもともと本大会用に用意し始めたものであるが、同時に昨年秋に県の研究大会でも発表を行った。そのため大部分は同じ内容であるが、一部を変更し、新たなものも追加している。

2. 具体的な実践内容

① データの作成について

良く考えてみて欲しい。すべての教科・科目の中で最も多種多様な「文字以外の表現」、表やグラフや地図や写真や各種図解を扱うのが地理なのである。地理教員なら、事務書類作成用ワープロソフトであるWordで何とかしようと思ったり、適当な画像処理ソフトで何とかしようとしないで欲しい。

Adobe IllustratorやPhotoshopを使用すれば、「簡単に」「早く」「欲しいものが」すぐ作れるのである。

もちろん、その簡単とか早くという部分はワンクリックでできるわけではない。それでは思考停止消費者過ぎて話にならない。これは仕事の話であり、余暇時間に遊んでいる訳ではない。コンシューマーではなくクリエイターの立場で「自分が欲しい」と思っているものを「簡単に」「早く」作れるということである。

この時点で、多くの教員は「別に完璧に自分が欲しいものが作れないといけないわけではない。」という、私と違う結論に至るわけである。

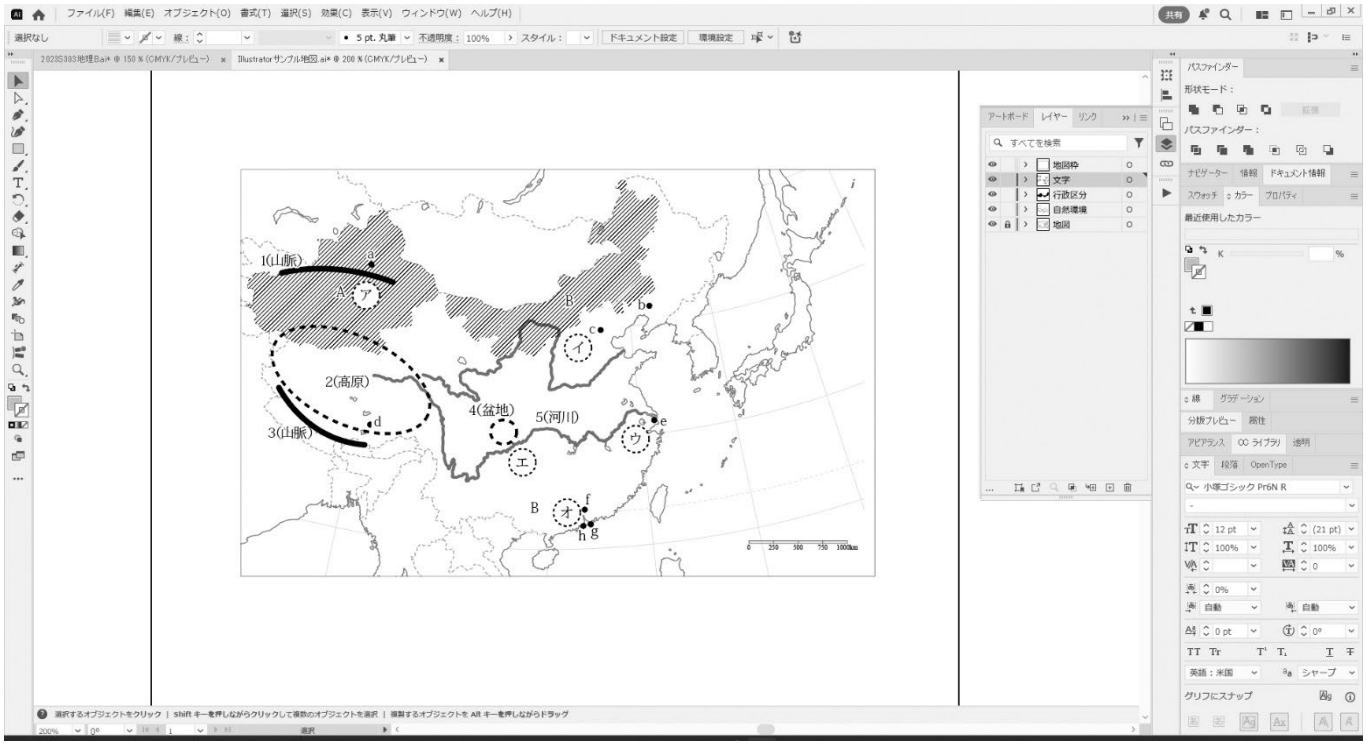
私の場合は「思ったように作れない中途半端なもの（例えばWord）に無駄な時間を費やすならば、ちゃんと作れるものを使うべきだ。」なのである。

このマインドチェンジは難しいのだろうか？

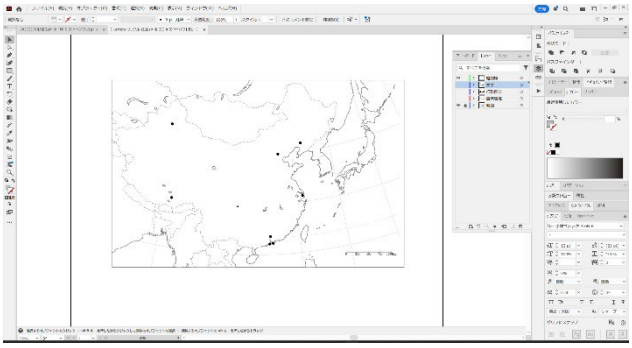
また、「Adobe Illustratorが使えるようになるにはどれくらい大変なんですか」という質問には「Wordと同じくらいじゃないんですかね？」と答える。

Illustratorのデータはイメージとしては、Wordを使うなら全てテキストボックスで文字を入れて、図形も加えていく様なデータである。普通は別にしなくて良いが、文字もアウトライン化すれば、データが全て線と塗りだけのベクタデータになる。

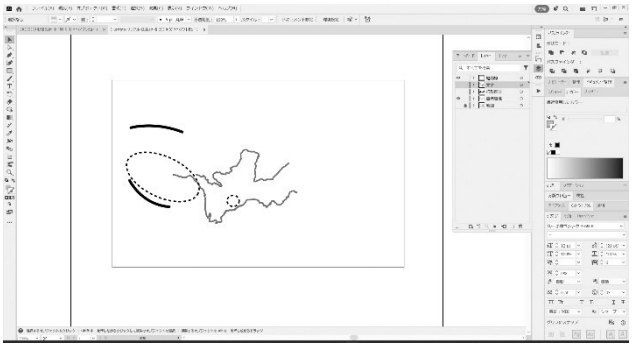
地理教員ならGISの話で生徒にも教えているはずの、JPEGデータのようなラスタデータではない、拡大しても汚くならないベクタデータである。



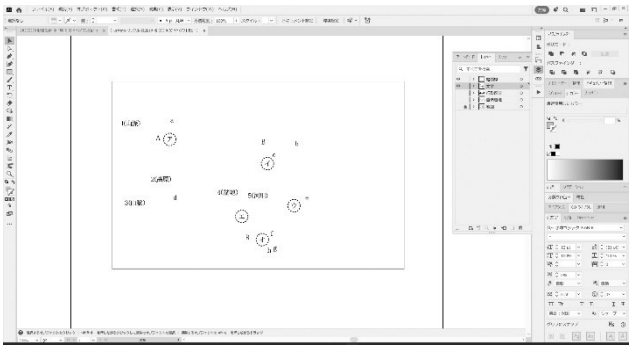
試験問題用地図例。レイヤー分割しているので作業しやすい。レイヤー毎に表示すればよく見るGISの図解と同じである。地図以外のレイヤーの内容を変更して毎年違う問題を出題することが可能。



地図レイヤー



自然環境レイヤー



文字レイヤー

また、自分がWordの機能を何%使っているか考えてみて欲しい。大して使っていない方が多いのではないだろうか。Illustratorだって同じである。教員には世界中の商用データ、現在では本や雑誌などの紙媒体だけではなく、映像やWeb用にも作られている様々な素晴らしいデータを作る必要性はない。地理授業に必要なものを作ることができれば良いのであり、使えないといけない機能は非常に限られている訳である。

ちなみに、Wordマスターが機能を極限に使いこなしても大したものは出来ないし、データの再利用（部分的な使いまわし）も容易ではない。あくまで事務書類作成ソフトなのである。

私にとってIllustratorの素晴らしい点は、①超正確にデータ作成・レイアウトができる。②いくらでもレイヤー分割して、それぞれの非表示やロックを自由にできる。もちろんオブジェクトごとのロックもできるしグループ化も何重にも可能。③世界中のプロフェッショナルクリエイターが使うものなので、慣れたら超高効率という感じである。

逆に、地域調査で生徒にWordでまとめデータを作らせる時に、どれだけ思った通りに作れないか実感する。配置した地形図データがロックできない。上に書いたルートや文字も含めてグループ化しようと思っても選択が非常に難しい。位置を固定しても勝手に動いてしまう。ミリ単位で移動を指定しても正確じゃない・・・etc。もちろんレイヤー分割がないのは致命的である。

多くの地理教員はよくこんなもので授業プリントや試験問題の地図が作れるものだと思う。ものすごく「不安定」で不正確で非効率である。

Photoshopに関しては、ラスタデータを扱うアプリケーションなので、日常的には画像補正（スキャンした画像の回転、レベル補正、切り抜き等）が主な用途である。できることに関しては、多くの方にも馴染み深いと思うので、これ以上の説明は不要だろう。

ここまで書いてもまだマインドチェンジは無理なのだろうか？少々乱暴な言い方をすれば、教員なんてこの程度の存在なのだろうか？

② プロジェクターの使用方法

この16年、授業時の説明は全て、プロジェクターで画像をスクリーンに映し出して行っている。

表もグラフも各種図解も地図も写真も何でもである。たまに補足説明でスクリーンの横にチョークかホワイトボードマーカーで何か書くこともあるが、基本的に板書はその授業のMQ（メインクエスチョン）を最後に書くだけである。

ではその画像データはどうしているのかということであるが、多くは教科書・資料集などのスキャンデータから作っている。地図帳やネット検索で見つけたものや、自分で作成した図解や地図（主にIllustratorで作成）や、自分で撮影した写真などもある。
それをPhotoshopで補正したり加工したりしてJPEGデータ（ラスタデータ）で保存する。近年は最大960px*540px（フルハイビジョンサイズの縦横1/2）にしているが、これ以上画像サイズを上げてもプロジェクターで投影した見た目は変わらない。

この画像データを授業ごとにフォルダに入れ、授業に持っていくUSBメモリ（私の場合は実際はMicroSDカードとUSBメモリに見える極小カードリーダー）に入れ、それをプロジェクターに挿して、リモコンで順番に投影する。
2010年に始めてから現在までEPSONのプロジェクター（7種類？）しか使っていないが、挿したUSBメモリの中身を、PC上のウインドウでフォルダを選ぶようにその時の授業のフォルダを選んで投影するだけである。画像のファイル名の頭に二桁の半角数字を入れているのであるが、リモコンの左右キーでこの順番に表示される。基本的にプロジェクターのリモコンの上下左右キーとOKボタンだけしか使用しない。
画像の切り替えはPowerPointの通常のスライド切り替えと同じく一瞬で切り替わるので、変化を図解で表現する場合には非常に都合が良い。逆にスマホやタブレットでよくあるスワイプの切り替わりは図の変化を認識しにくい。

こうやって準備した画像データは、上記の説明のように単体のJPEGデータである。実はこれはPowerPointのデータの一部差し替えなどと比較して、非常に使いまわししやすいのである。データを開かなくてもどこのフォルダ（授業）に何が入っているか探しやすいし、違う授業で使いたい場合は単にコピーするだけで良いのである。

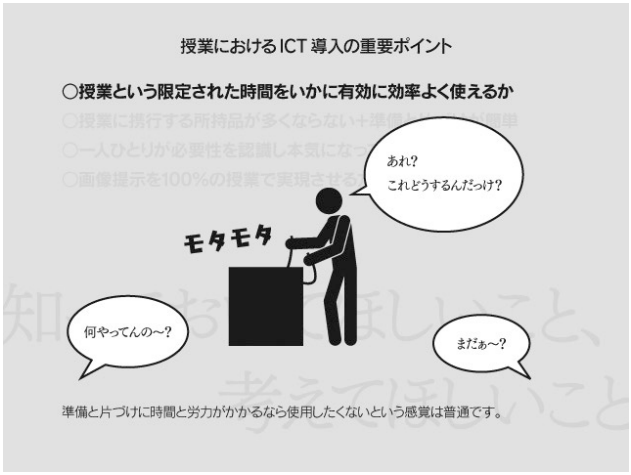
このような使い方は、プロジェクターとは別に起動させる必要があって不安定で作業用でもあるPCを使う必要はないし、iPadなどのタブレットの中にデータを準備して教室に持って行き繋ぐより余程スマートである。

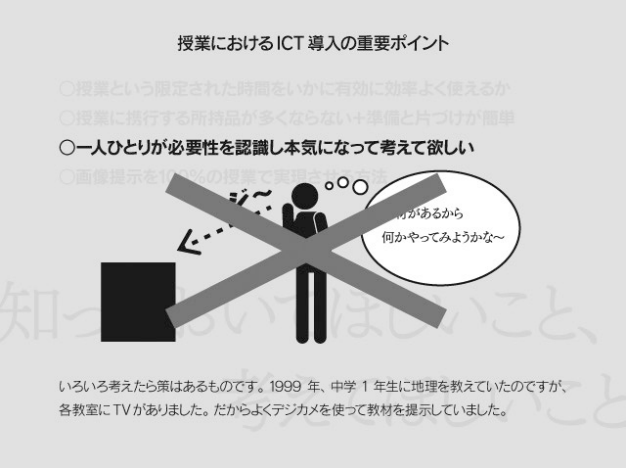
2010年にプロジェクターを授業で使い始めた時、当時は大分県の県立高校にいたが、教育委員会がプロジェクターの活用方法をまとめてマニュアルにしているものとは全く違う使い方を始めたわけであり、それは今も変わっていない。

世紀末に初めて教壇に立った頃、たまにプロジェクターを視聴覚教室で使った時に、「いつも教室で画像が見せられたらそれだけでいいのに」と思っていた願いそのままである。先に願いとプランありきで、時代（技術）が追いついてくれるのを待った結果である。PCを使用したりアクティブボード等の電子黒板を使ったり、あれも出来ますこれも出来ますという謳い文句につられて単なるコンシューマーとしてそのサービスを享受していることとは根本的に違うのである。

本当に必要なものは何なのか良く考えて欲しい。

以下に、その頃スクリーンに投影して説明するために使っていた画像の一部を掲載しておく。ここでは詳細説明は省略するが、書いてあることを見てもらうとある程度は理解できると思う。







確かにこの話に関しては、PCを使おうが、タブレットを使おうが、そこまで「大きくは」違わない気はするし、ある意味宗教戦争に近いかもしれない。とはいえ科学的にも理由があるということに気づいて欲しいし、マインドチェンジしてもらえれば光栄である。

繰り返しになるが、「あれも出来ますこれも出来ますという謳い文句につられて単なるコンシューマーとしてそのサービスを享受していること」で嬉しくなっているのはその教員だけである。

③ 授業サイト

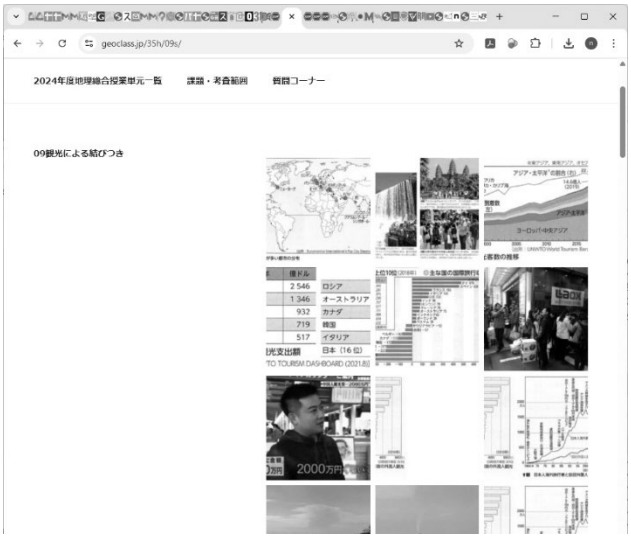
Webサイトに関しては、1990年代からhtmlについて随分勉強したし、2000年代はCSSについて（Flashもあったが）、そして2010年代はCMSについて色々調べ、いくつものサイトを構築・運営してきた経緯はある。但し、授業に関しては普段同じ学校にいる教員と生徒という関係上、必要性を感じないままで時代は流れていった。

しかし2020年、世界的な詐欺に社会が翻弄される中、できることはないかと考えた末、各学年の授業ごとにWebサイトを用意するとよいのではないかという結論に至った。

それぞれのサイトはその学年の生徒しか知らないパスワード制限をかけ、検索にもかからないようにしておく。授業ごとにページを設け、授業時に見せた画像は全て見ることができるようになっており、配布した授業プリントのPDFデータも置いておく。画像スライドはプロジェクターの話で書いた通り横スライドではなく瞬間で切り替わるようにしている。
たまに授業時にiPad（アプリはVLC使用）で映像を見せることもあるが、それらも動画データを置いたりYouTube埋め込みをして該当ページで見られるようにしておく。
生徒から文章（なにかの感想など）や添付ファイル（JPEGやWordなど）をフォームで送信できるようにしている授業もある。
また、授業ごとのページとは別に、長期休暇課題や定期考査範囲を知らせるページを設けたり、昨年度からは「質問コーナー」と称するチャットページも加えている。



各授業ページへのリンク



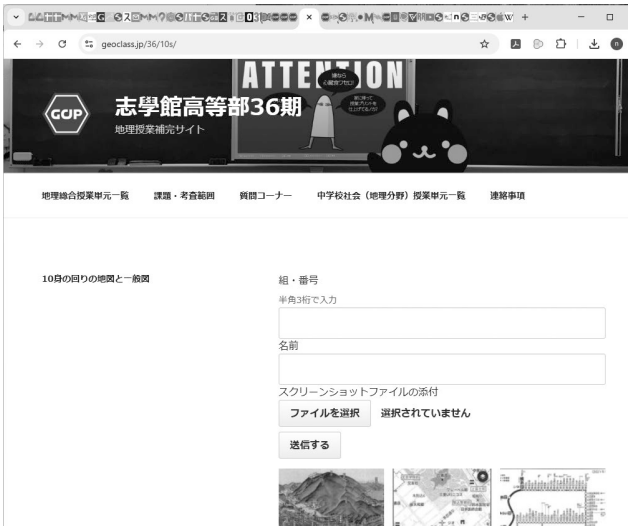
地理総合の観光のページは…



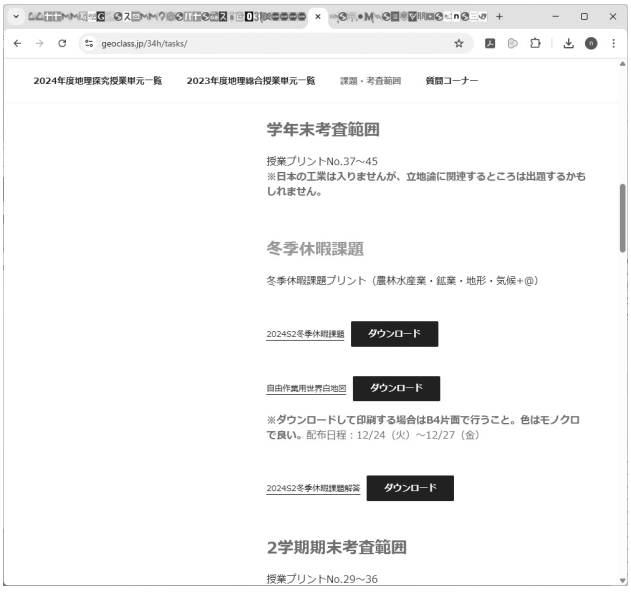
これは中等部生のページ



ラジオ番組のYouTube埋め込み



スマホ等から地理院地図のスクリーンショットを送信させるフォーム



伝達も漏れなく可能



Wordファイルを送信させるフォーム

こうやって各授業のサイトを用意しておけば、それ以上Web上の各種サービス（有料・無料）を使う必要性は、少なくとも私の場合は全く無い。
寧ろ現在では、プロジェクターを使用している以上、生徒が復習時に授業中に見た画像を見直したりするためにはWebサイトの準備は必須であると思うようになった状況である。もちろん、何人もの生徒から必要だという声は聞いている。
生徒は、授業プリントを無くしても、もう一枚欲しくても、自分で印刷すれば良いし（コンビニのネットプリントでB4裏表印刷すれば配布したものと同じ）、授業時に興味を引くために一部だけしか見せてもらえなかった映像も、授業サイト上で全て見ることが出来る。

上にも書いた通り、私自身は他のサービスを必要とはしていないが、仮に必要とするなら、授業サイトにそのリンクを貼っておけば、生徒は授業サイトにアクセスするだけでやるべきことを全て把握できる。地理授業に関してのポータルサイトとして位置付けるわけである。

ではなぜ多くの地理教員が授業サイトを制作・運営しないのか？どうしてマインドチェンジできないのか？

3. 現状分析および私見

こうやって実践例を3つ紹介したのであるが、なぜ多くの先生方がそれらを取り入れることが出来ないのか、その理由の分析も記しておく。もちろん、持って生まれた能力や資質、幼い頃からの行動の積み重ねなど、量産型教員から見ると明らかにアウトサイダーである私自身の特殊性はここでは触れない。あくまで、他の先生方が私と関わった後（この研究発表もその一つである）の動けない要因である。恐らくそれは、金銭面と規制面に集約されると考えられる。その点について私見を述べておく。

＜金銭面＞

近年のように職場でPCが貸与される前から、私の場合は自分に必要なものは自分のお金で用意することが当然だった。より良い仕事をするためには、ものを買うことも研修を行うことも、「自己投資」として当たり前に行っていた。
企業でより良い仕事をするために何億もする機材を導入したいという場合、何とかお金を出してもらえるよう絶対に努力しなければならない。しかし、教員の仕事において必要だと思うものを購入するのに年収以上のお金が必要なのだろうか？
仕事上やることに一々予算計上するという、そんな無駄なことに時間と労力をかけるくらいなら、さっさと自分のお金を使って色々買ったり試したりすれば良いのである。

＜規制面＞

職場のリスク管理の一環で自分のPCが使えないとかUSBメモリが使えないとかWebサイトで情報発信できないとか、あなたはバカにされていると思って欲しい。自分できちんとリスク管理できないほんの一部のダメな人間（教師である前に人間として）が問題を起こさないようにするためにあなたも自由を奪われているなら、それはあなたも同類(同レベルの能力）と見なされているのである。
リターンにはリスクが付き物なのは当然である。リスクを取っている覚悟があるからからこそリスク管理もきちんとできるわけであり、いい大人が他人に一々管理される必要はない。上記のダメな人間は大抵の場合リターンも求めて

いないからリスクの認識が甘いのである。

更に厳しいことを言わせてもらえば、上記2つのことを、自分の能力がなくて出来ないことの言い訳に使わないで欲しい。どんどん余計なことをさせられるようになり、自己研修の時間もエネルギーも奪われた？それでもできる人はできるはずである。昔より可処分所得が減って仕事に自分のお金なんて使えなくなった？そんな日本になった原因にあなたは全く関与していないと言い切れるのだろうか？

もう一つ、これは昨年秋に県の研究大会で発表した後に他の先生方との話の中で気づいたことなのだが、②・③の実践に関しては、①の前提があってこそ実践可能なのかもしれない。各種素材の作成が効率・クオリティ共に高められるからこそ、②･③を日常的に行うことができるのである。①なくして②・③のどちらかだけを取り入れようと思っても、結局他の方法と比較したアドバンテージが感じられないのではないだろうか？

随分大きな事を言うと笑われようが、全ての仕事、あらゆる場所で、小さな変化を大勢が起こすしかないと思うので、「高等学校地理授業」という社会の「ほんの一部領域」であろうが、これだけは言いたい。

30年の間凋落してきた日本の未来のためにマインドチェンジして立ち上がって欲しい。

ちなみに、上記「ほんの一部領域」に関しては、あくまで一般論であり、私は別の意見も持っている。
公立中学校で地理をきちんと教えられない「社会科教師」の授業を受けて、地理を何だかよくわからないままにして高校に入り、高校では地理を選択せずに大人になる、そんな人が溢れていた日本で、やっと4年前から高校で地理も必修になったという現在、高校の地理教員はある意味日本再生の切り札だと私は勝手に考えている。
他の地理教員にも、「勘違い」であろうがその重圧を感じて日々努力していただきたい。

補足

紙の印刷物だけでは十分に画像や映像を見せられないため、様々なことが伝わりづらい。内容に多少なりとも興味を持った方はWebサイトもご覧いただきたい。こちらがオリジナルであり、印刷物はWebサイトの内容をアレンジ（かなり省略）したものである。
https://www.geoclass.jp/kagoshima/202608kyuchiken/

主体的探究者を育成する地理授業

～地理的な「問い」と「考察プロセス」に着目して～

熊本県立東稜高等学校　石田　啓三

1. はじめに

2020年度から順次施行された学習指導要領の柱として「主体的・対話的で深い学び」が掲げられ、地理教育においても様々な工夫や趣向を凝らした授業実践がなされてきた。特に、教師が授業時に問いを示し、その問いを探究的に紐解いていくスタイルの授業実践は、近年、より注目されているように思い、私自身も「主体的・対話的で深い学び」とはどのような学びなのかを模索し、その実現に向けて、試行錯誤しながら実践を試みている。探究的な授業では、渡部竜也氏・井手口泰典氏の共著『社会科授業づくりの理論と方法』（明治図書,2020年）等を参考にしながら、根幹となる単元を貫く問いであるメインクエスチョン(MQ)を軸に、MQ解決のためのスモールステップとなる問いであるサブクエスチョン（SQ）を用いて、生徒が手順に則って思考していくように展開している。また、授業後には振り返りの時間を設け、「何ができるようになったか」を明らかにしながら次の学びや生活に活きるよう生徒を導いているつもりだ。このように授業を展開すると、一見、生徒は主体的・対話的に試行錯誤しながら思考を深めているように見える。しかし、実践を重ねる中で、「主体的」な学びは果たして達成しているのか、と疑問を持つようになった。

文部科学省によると「主体的」な学びの実現には「見通しを持って粘り強く取り組む力」が身につく授業や「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に活かす力」を育む授業等が必要であるという。しかし、冷静に目の前の生徒の現状を分析すると、教師が発する問いについて「受動的」に考えている、もしくは、教師の指示で「受動的」に振り返りを行っており、生徒自ら「見通し」を持って「自立的」に探究していることは稀である。また、ICTやAIの発達に伴い、本来のねらいである「試行錯誤するプロセス」を経ることなく、PCをクリックするだけで結論を出そうとする生徒も増えている。これは、本来実現したい「主体的・対話的で深い学び」とは異なり、本来育成したい先述のような資質・能力は育成できていないのではないか。このような問題意識を持ちながら日々を過ごしていた時、令和７年９月25日に、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方等をまとめた「論点整理」が文部科学省教育課程企画特別部会より示された。

急速に変化する社会と同じく、学校教育においても求められる授業や育成すべき生徒の資質・能力は絶えず変化していくのだろうか。過去の実践においても現代に通じる素晴らしい授業は多数行われてきた。これからの高校地理教育において、時代の流れによって変化する「流行」する授業だけではなく、普遍的に必要とされる「不易」の授業を模索していきたい。このような思いを少しでも授業に組み込み、自己研鑽しているところであり、本稿では、その内容を紹介したい。

2. 先行研究の整理

(1)社会科教育の軌跡

本項と次項の内容は、井田仁康氏の著書『社会科教育と地域-基礎・基本の理論と実践』（NSK出版,2005年）に依拠している。本書のⅠ章では、社会科教育の「基礎・基本」について、社会科教育史をふまえて考察されている。その内容のうち、社会科教育史についてまとめたものが表１である。

井田（2005）によると、表１のように、第二次世界大戦前の地理、大戦後の社会科の動向をみると、知識注入型の授業が批判され続け、それを克服しようとする学習方法が提唱されるが、そのうちまた知識の重要性が強調されるということを繰り返してきている。このような教育史の流れの中において、現代の社会科及び地理教育は、知識注入型の授業を克服し、生徒自身の学び方や学習の深まり、資質・能力の育成等が重視される時期にあることは明らかである。かつて「這い回る社会科」との批判があったように、表面的・形式的な実践にならぬよう、私たちが授業において重視すべき視点を、先行研究からも分析したい。そのため、次項

表１　社会科教育の軌跡

時代	地理教育の特徴	背景・備考
1872～ (明治5)	・教授は講義式で教科書記述の内容を問う教育法を多用 ・教科書は各地域の事実を淡々と記述 ・地理学習は暗記が主軸	学制の公布 学制の公布以前から国民の間に郷土愛や異国への好奇心があった 地理的知識が近代国家建設のために有用であると考えられた
1880年代 ～ (明治中期)	・ペスタロッチ主義の教育に基づいた子どもによる観察と体験を基調にした実物直観の教授法が提唱された ・知識を習得するだけでなく地理的な事象を分析しようとした授業がみられたが全国には普及しなかった	これまでの地理教育は地名や物産の機械的な詰め込み教育だとして批判された
1910年代 ～ (大正～ 昭和初期)	・郷土教育連盟(1932)による郷土教育(行政、アカデミズム、教育実践と多角的に支持され全国的に展開された教育運動)などの教育運動がおこった →郷土を育み、児童が主体的に行う総合的な調査活動を中心とした授業を推奨し、教師が一方的に教え込む授業を否定し、教師と児童が協力して郷土の生活を調査研究し、その将来を考えていこうとする教育目的を持っていた ・一部の学校では動的教育法*などの理論に基づいて児童の調べ学習を重視した地理の学習が展開された *動的教育法実践の特徴： ①教師が提示した問題を深め様々な資料で調べる態度を育成している ②調べ学習において位置、場所(地域の特徴を示すもの)、立地など、地方的特殊性を捉える追究がなされている ③調べ学習後に教師が新たな問題を提示し比較させながら一般的共通性を探らせている	明治中期から引き続き、教師主導型の知識注入の授業から児童主体の調べ・調査型の授業への転換が図られた 郷土教育は全国的に普及したが、軍国主義の強まる中、調べ学習は残るものの、教育目的は軍事色に特化され、価値観が注入される授業が促進された 全国的に普及しなかった →教師の負担が大きい、調べ学習のレベルが高く家庭で調べる時間が確保できない、授業時間の確保ができない、資料が学校で備えられているとは限らない、伝統的な講義式とは異なる革新的な授業方法であったことなどによる
1947～ 1955	・「終戦以前の超国家主義的・軍国主義にもとづく画一的な教育を深く反省して、民主的で平和な国家づくりを目指す教育の中核」として社会科が設立された ・初期社会科では生活学習（児童が社会生活上の問題（疑問）を主体的に調べる学習）や問題解決学習（児童が学習問題を明確に把握し、知識を活用しながら問題の答えを主体的に探求していく学習）が行われ、子どもの主体性が強調された	社会科の設立 社会科では学習方法として問題解決学習が導入され、この問題解決学習に基づいたカリキュラムを実施していた1955年までの社会科が初期社会科といわれる 設立当初の社会科は、カリキュラムや授業内容を現場の教師に委ねていた 地域の実態に応じ、子供の実情にあった、教師それぞれの独自性を持った授業が望まれたが、教育現場に混乱を招いた
1955～ 1960年代	・社会状況がめまぐるしく変化する中で社会科は「基礎学力の低下」「系統的学習や社会科学的思考を促す指導の軽視」などの批判から学習の順序性を明確にした系統学習が取り入れられた （知識注入型の授業）	教育の現代化と科学化が唱えられ、問題解決学習と系統学習を止揚するものとして「発見学習」「検証学習」「探究学習」が紹介されたが、普及しなかった
1970～ 1980年代	・小学校低学年では社会科に変わり体験を重視した生活科が新設、高等学校では専門性を強調するために社会科は地理歴史科と公民科に分化された ・再度、問題解決学習が注目されるようになった →その問題解決学習は初期社会科のそれとは異なり、教師が指導の主体として位置づき、児童・生徒が学習の主体として位置づくことを意味する	従来の知識注入の詰め込み教育から、教科の内容の精選を図り「ゆとり」を持たせようとした 初期社会科の問題点として指摘される「児童・生徒に任せ、教師の指導性を後退させ、児童・生徒の自主性と教師の指導性の関係を十分ふまえられなかった」 問題解決学習が「子どもが自分の問題意識に即して自由に学習問題をとらえ、それに主体的に取り組み、直感的あるいは分析的に思考を働かせて、教師とともに問題解決の方途を研究するという学習原理」をもつ問題解決学習として登場した
2000年代	基礎基本の重視が一層強められた	世界との比較において日本の教育が見直された

井田(2005)をもとに作成

では、社会科及び地理教育における基礎・基本を整理する。

(2)社会科教育の基礎・基本

表２　４つの基礎・基本

基礎・基本の項目	内容	備考
知識	教科におけるそれぞれの知識	基礎・基本の知識については必ずしもコンセンサスがとれているわけではない
スキル	教科に共通するコミュニケーション、問題解決などのスキルと教科が独自にもつ読図などのスキル	教科に共通するスキルが、教科間の関連性をもたせる
考察のプロセス	地理（的分野）を例にすると、分布の把握、その要因の考察、他地域との比較などが該当	位置関係、場所の特性、地人相関、空間的相互依存作用、自然的条件・社会的条件およびその変容といった地域の観点が含まれる
学習プロセス	図１に示されたプロセス	教科に共通

井田（2005）より引用

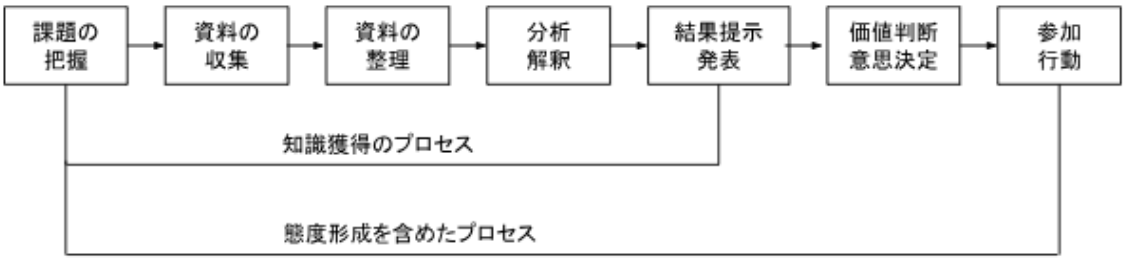


図１　学習プロセス　　井田（2005）より引用

社会科および地理歴史科における基礎・基本に関して、私たちはコンセンサスを得ているわけではない。井田(2005)は、このことは、人によって基礎・基本の捉え方が異なることに起因しており、また、地理の内容に限ってみても、多くの基礎・基本に関する考え方やカリキュラム等が提言されているが、それが地理教育全体に普及しているとはいえないとしている。一般的には、基礎・基本の充実は知識の獲得を強固にすることを意味することが多いと考えられるが、生徒の学び方や資質・能力の育成等を踏まえると、知識の獲得にとどまらない基礎・基本の捉え方が必要である。そこで、本項では、井田(2005)が提示した４つの基礎・基本を地理学習における基礎・基本とする（表２）。

本稿では、４つの基礎・基本、すなわち知識、スキル、考察のプロセス、学習プロセスの重要性を前提としたうえで、特に、考察のプロセスについて検討し、知識・スキル・学習プロセスは割愛する。考察のプロセスとは、図１の学習プロセスにおける分析・解釈である。地理学習の場合は、位置や分布、場所の特徴、人間と自然環境との相互関係（地人相関）、他の地域との移動関係（空間的相互依存関係）、一般的共通性・地方的特殊性、変化し続ける地域、といった観点からの分析・解釈がなされる。さらに分布から、なぜそのような分布になるのかといった要因を、他地域との比較や地域の規模という視点を持ちながら考察し、分析・解釈する。

見方・考え方をはじめ地理学の概念に関わる考察のプロセスの基礎・基本を取り上げるのは、地図を読む、野外調査などのスキルの基礎・基本と同じく、地理教育ならではの他教科にはみられない基礎・基本であることはコンセンサスを得やすいと考えられることに加え、考察のプロセスを教師が主導するのか、生徒が主体的に取り組むのか、そのバランスが教師の裁量によるところが大きいと考えたからである。実際には、考察のプロセスは地理的な専門性が問われるため、子どもによる分析・解釈というよりは、教師もしくは研究者による分析・解釈が講義されるなど、教師主導で授業を進行することが多く、生徒の主体性を発揮させる実践事例は少ない。しかし、考察のプロセスにおいて、生徒が主体的に学習を進めることが可能になれば、地理教育において新たな指針を示すことができると考えた。

さらに、地理学習に期待される地理的な見方・考え方の育成と、生徒の主体的な学びの実現を両立することで、地理学習ならではの「見通しを持って粘り強く取り組む力」や「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に活かす力」等を育成し、その効果を示したい。このことが可能になれば、前述の社会科教育の軌跡のように、幾度となく繰り返してきた知識注入型授業への振り戻しという歴史に終止符を打つこともできるのではないだろうか。

3. 次期学習指導要領等との関連

令和７年９月２５日に文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会より次期学習指導要領に向けた基本的な考え方等を示す「論点整理」が示された。また、令和８年２月２日には「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関する検討状況」等が公表された。今回は、ここで示された方向性を念頭に置きながら、「主体的・対話的で深い学び」の中でも特に、「主体的」な学びの実現に必要な要素について検討する。

(1)「論点整理」より

「論点整理」は、次期学習指導要領の改訂に向けた主要な論点や方向性をまとめたものである。主な目的は、主体的・対話的で深い学びを現場に定着させ、多様な子供たちがそれぞれの可能性を開花させられる包摂的な教育を実現することにある。具体的には、デジタル基盤の活用や情報活用能力の向上、教育の質を高めるための「余白」の創出など、多角的な視点から検討が行われている。また、教師が学びをデザインする高度専門職として機能できるよう、柔軟な教育課程や勤務環境の整備についても言及されている。最終的には、自らの人生を切り開き、持続可能な社会を築く担い手の育成を目指す包括的な指針となっている。

表３　次期学習指導要領に向けた基本的な考え方

全体の方向性	各教科等の方向性
①「主体的・対話的で深い学び」の実装 →育成する資質・能力の具現化・深化 ②多様性の包摂 →学習意欲を高め個性が輝く教育を実現 ③実現可能性の確保 →「余白」の創出による豊かな学び	①教材・学習方法の選択を促進 ②自分の意見を表現する活動の充実 ③探究的な要素を持つ学習活動の充実 ④家庭学習の内容を自律的に決められるような段階的指導

教育課程企画特別部会「論点整理」より作成

表４　教科等と総合的な探究の時間との関わり

〔学習の基盤となる資質・能力の共有〕
各教科等と総合的な探究の時間は、いずれも言語能力と情報活用能力を学習の基盤として共有している。これらの能力は、教科等の内容を通じて育成されるとともに、それらが相補的に働くことで、日々の学習や生涯にわたる学びを支える基盤となり、特に情報活用能力は、教科・科目を横断した探究的な学びを支え、駆動させる基盤として位置付けられている。
〔探究プロセスの目的の違い〕
教科教育と総合的な探究の時間では、探究プロセスの位置付けが異なる。 各教科等では学習の過程として探究が重視され、それぞれの学問体系に基づいた知識を体系的に習得し、資質・能力を深めるための手段として探究的な活動が行われるが、総合的な探究の時間では 探究そのものが目標において重視され、生徒が自己の在り方生き方と一体不可分な課題に取り組み、主体的に問題を解決していく活動そのものが中心となる。
〔相互補完的な関係〕
各教科で学んだことは、総合的な探究の時間における活動の土台となる。各教科等で育成された知識・技能や思考力・判断力・表現力等を土台として、初発的な思考や行動（好奇心）を起こし、それを探究の時間での実践につなげていく。各教科での探究的な要素を持つ学習活動を充実させることで、資質・能力を一層具体的に育成し、それがよりよい社会や幸福な人生（総合的な探究の時間の目的）へとつながる仕組みになっている。

教育課程企画特別部会「論点整理」より作成

本稿では、特に地理教育における授業の方向性について検討したいため、表３に、次期学習指導要領に向けた基本的な考え方のうち､地理授業に関わる箇所について抜粋した。

各教科等の方向性については、表４に示したように、総合的な探究の時間との関わりにおいて、主に「学習の基盤となる資質・能力の共有」、「探究プロセスの目的の違い」、および「相互補完的な関係」の3つの観点から整理されている。

このように、教科で専門的な知を育み、総合的な探究の時間でそれらを現実の課題に活用・統合するという、往還的な関係が想定されている。つまり､地理教育においても、資質・能力を深めるための手段として、探究プロセスが位置づけられているため、前節の考察のプロセス（分析・解釈の場面）の段階においても、生徒自身が考察のプロセスを理解し、仲間と協力しながら自身の力で課題を分析・解釈する力を身につけ､「見通しを持って粘り強く取り組む力」や「自分の学びを振り返り、次の学びや生活に活かす力」等の育成を目指すことは、次期学習指導要領においても目指すべき１つの姿として捉えて良いと考える。

(2)「各教科等WGにおける資質･能力の構造化等に関する検討状況」より

各教科の資質・能力の構造化に関する検討状況をまとめたものである。主な目的は､「知識・技能の統合的な理解」や「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」といった高次の資質･能力を明確に定義し､現場の教師が「深い学び」を具体的にイメージしやすくすることにある。各教科独自の検討ポイントが示される一方で、指導内容の精選や用語の簡素化といった共通の課題についても整理されている。さらに、デジタル化された指導要領の活用や、具体的な単元計画の作成イメージを通じて、新たな教育の軸を実際の授業改善へとつなげるプロセスが提示されている。最終的には､子どもたちの実態に応じた柔軟な教育課程の編成と、質の高い学習過程の実現を目指している。本稿では、 このうち、社会科・地歴・公民科に関する主な内容 について整理する。社会科・地歴・公民科においては、社会的事象に関する概念の理解、確かな情報に基づき適切かつ効果的に調べまとめる技能や、資料や概念に基づき自らの考えを批判的に捉え直す力を養うことなどを重視する方向で、目標の改善を検討している（表5)。

また、見方・考え方、資質・能力の素案に関しては、表６のとおりである。ここでは、資質・能力の構造化の状況を踏まえた更なる検討の方向性として、１つ目に「.資質・

表5　目標の改善のポイント

知識及び技能	社会的事象に関する概念の理解を重視 真偽が定かでない情報が行き交う中、情報の信ぴょう性の確認を重視
思考力、判断力、表現力	より深い学びを具現化するため、自らの考えを批判的に捉え直す力の育成を追記
学びに向かう力、人間性等	自らの学びを振り返りながら、主体的かつ協働的に問題解決しようとする態度を明記

教育課程企画特別部会「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関する検討状況」より作成

表６　見方・考え方、資質・能力の素案

【見方・考え方（高等学校地理歴史科の素案）〔抜粋〕】 ・社会的事象やその言説を,時系列,推移,類似や差異,因果関係や現在とのつながりなどに着目して捉え,よりよい社会の形成に向けて課題を多面的・多角的に考え、根拠に基づき公正に判断することとしている。
【高次の資質・能力（素案）〔抜粋〕】 ・各単元において、知識及び技能にあたる箇所を「総合的な理解」、思考力・判断力・表現力にあたる箇所を「総合的な発揮」として、高次の資質・能力を整理している。

教育課程企画特別部会「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関する検討状況」より作成

「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関する検討状況」等の資料は､次期学習指導要領の改訂に向けた、

能力の深まりの可視化」が示されている。これは、今般の構造化を通じ､「深い学び」が実現したイメージを教師が具

体的に持つことができるようにすることが重要としている。個々の知識・技能が単に網羅されているかではなく、「指導を通じて学びが深まったときの児童生徒の姿を的確に示せているか」といった観点から、個別の知識や技能が相互に関連付けられて一般化され、「統合的な理解」となった姿を描き出せるよう更に検討すべきとしている。また、検討の方向性の２つ目に今般の構造化を単元・授業づくりに活かす「プロセスの可視化」が示されている。これは、「高次の資質・能力」を基にした今般の構造化・表形式化は、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」について学びの深まりを可視化するとともに、それらを一体的に育成する学習の在り方を示し、教師一人一人が「深い学び」を具現化しやすくすることを目指すものである。

以上を育成するにあたり、各教科等は、総合的な探究の時間との連携の中で、教材・学習方法の選択を促進することや、自分の意見を表現する活動を充実させること、探究的な要素を持つ学習活動を充実させること等が求められている。このことから、本稿では、生徒自身が考察のプロセス（分析・解釈）の段階で、①「見通し」を持って「自立的に」探究し、②生徒が自らの考えを批判的に捉え直しながら、③協働的に問題解決しようとする地理学習を提案したい。そのため、生徒自身が地理的な見方・考え方をはたらかせることができるような「考察のプロセスの可視化」とともに、生徒の「.資質・能力の深まりの可視化」を通して、教師が深い学びを具現化し、評価もしやすくなる実践を紹介する。

4.　実践事例

生徒が考察のプロセスの段階で、見通しを持って自立的に探究するためには、地理的な見方・考え方に則った考察方法について、生徒自身が理解している必要がある。そのため、授業時の発問に対して、地理的な見方・考え方をはたらかせながら考察するプロセスを可視化した「探究の未知しるべ」（図２）を作成し、生徒に示した。「探究の未知しるべ」を効果的に活用させるには、教師は、基本的に図２一番上のMQ「なぜ○○なのだろう？」や「今後どのように○○だろう？」といった簡単には答えにたどりつかないような大きな問いを授業の中心発問（MQ）として設定

「探究の未知しるべ」

MQ「なぜ○○なのだろう？」「今後どのように○○だろう？」				
方向	プロセス	生徒が考えるべき問い（ＳＱ）	技能	評価
↑	情報の組織化 価値判断（分析）	【地理的な見方・考え方に関する問い】 自然環境は？（地形・気候・土壌など） 社会環境は？（歴史・文化・経済など） 他地域との違いや共通点は？（比較） 他地域との関係性は？（交流・移動など）	作図	思・判・表
	情報の収集 情報の理解（観察）	【地理的技能に関する問い】 どこに？（絶対位置・相対位置など） なにが？（建造物・自然・農地など） どのように？（散らばり方・広がり方など） いつから？（時代背景など）	読図	知・技

図2　探究の未知しるべ　　地理的な見方･考え方をもとに作成

のない問いに対して生徒に価値判断や意思決定を求めるため、地理探究的な問いと言える。生徒は、教師の中心発問（MQ）を受けて、「探究の未知しるべ」を活用しながら、MQに対する考察を進めていくことになる。その際、生徒がタブレット等を活用して、MQに対する答えを検索することは禁止する必要がある。インターネットやAIは、生徒が経るべきプロセスが省略されており、授業本来の目的が達成できなくなってしまうのは言うまでもない。

生徒の「探究の未知しるべ」活用の手順は、MQに対して、「どこに？」「なにが？」「どのように？」「いつから？」等の問い（SQ）について、地図等を使ってMQと関わりのある地域や地理的事象について観察することが第一段階となる。その際に必要となる様々な地図や歴史資料等の探し方を生徒に教授しておくと、より主体的に生徒自身が自分で情報を収集することができるようになる。「どこに？」を観察する際には、観察するために適した地図等を選択する力が必要である。様々な縮尺や種類の地図を活用するだけでなく、教師が絶対位置や相対位置の概念の違いに留意させながら展開することで、多角的な視点から地域を観察することができるようになる。「なにが？」を観察する際には、地形図等を活用し、住宅地や寺社、工場等の建造物、山地や河川等の自然、水田や果樹園等の農地等について、詳細に観察させることに留意する。また、生徒にとって身近な地域に関するMQを問う場合は、生徒自身の生活経験から「なにが？」について考えさせることも大切である。「どのように？」を観察する際には、生徒にとっては抽象的な問いとなるため、MQに関わりのある地理的事象や「なにが？」で観察した地理的事象について、分布の規則性や傾向性、面的な広がりを言語化させながら抽出していくことで、生

徒自身が観察の視点を持ちやすくなるよう展開する必要がある。「いつから？」を考える際には、歴史の授業から学んだ知識や資料、旧版地形図等の考える材料について、生徒に探させたり、生徒が準備することが難しいものについては教師が準備したりしておくと良い。教科書等の図や各地域の市史等は大いに活用できるものである。以上の第一段階の観察（情報の収集・情報の理解）のプロセスを経た後、第二段階として分析（情報の組織化・価値判断）のプロセスに移行していく。第二段階では、「自然環境は？」「社会環境は？」「他地域との違いや共通点は？」「他地域との関係性は？」等の問い（SQ）について、第一段階で観察した地理的事象について地図化、言語化等を通して整理していくプロセスとなる。「自然環境は？」「社会環境は？」のSQについて分析する際には、第一段階で観察した地理的事象のうち、自然環境や社会環境に関するものについて分類し、その中でも特にMQとの関わりの中で因果関係を説明できると考えられるものについて、どのように整理すると良いか試行錯誤しながら考察を深めさせたい。また、因果関係を考察させる際には、第一段階で収集した情報について、GISを利用し地図化したり、オーバーレイにより説明したりする等、地理的なスキルを活用させることにも留意したい。また、「他地域との違いや共通点は？」というSQは、MQに関する地域とそうでない地域との比較の視点を持たせるためにある。他地域と比較することによって、第一段階で観察した地理的事象が、その地域にしか見られない地域特有のもの（地方的特殊性）なのか、他地域にも見られるもの（一般的共通性）なのか、を分析することができ、他地域との比較においてMQを考えることで、回答（仮説）の精度を上げることができるだろう。さらに、「他地域との関係性は？」というSQは、人的交流や物流といった他地域との相互依存関係にも着目する視点を持たせるためにある。このSQについて考察する際には、第一段階で観察した地図情報等だけでなく、統計データや流通に関する新たな情報も根拠として必要になる場合がある。そのような場合には、再度情報収集したり、教師が根拠資料を示したりしながら考察を深めると良い。

以上のように、生徒は「探究の未知しるべ」を活用することで、地理的な見方・考え方をはたらかせながら、段階的に考察のプロセスを経ることができる。そして、最終的に観察・分析した内容をもとに、MQに対する回答を考えていくことができるようになる。生徒には、自身で導き出した回答を文章で書き起こし、発表して他者と考えを共有させることで、自身の考えを振り返ったり、自身には無かった視点に気付かせたりすることにも留意したい。また、評価においては、第一段階は「知識・技能」の側面が大きく、第二段階は「思考・判断・表現」の側面が大きくなるだろう。「主体性」については、生徒が他者の意見を取り入れ、新たな視点からMQやSQについて観察したり分析したりしているかどうかを評価できる。

次に、実際の授業の一部を紹介する。本授業は、私が勤務していた熊本県山鹿市鹿本町所在の鹿本商工高校における実践事例である。本校は、山鹿市または山鹿市周辺の地域から登校する生徒が多いため、授業のMQを「山鹿市の中心街が現在の位置にできたのはなぜだろう？」という都市の成立に関する問いとした。なお、本実践にあたり、『山鹿市史』『鹿本町史』等を中心に参考文献として活用し、山鹿市の地理や歴史を整理したうえで、山鹿市山鹿地区周辺および鹿本町来民地区周辺のフィールドワーク、聞き取り調査等を事前に実施した。また、生徒には、インターネット等を活用し「探究の未知しるべ」に関わるSQについて情報収集することは認めているが、MQの解答をそのまま検索することは認めていない。

次の図３は、生徒が「どこに？」について観察する際に、生徒自身が選択し利用した山鹿市に関する地図である。インターネット上にある一般的な地図のうち熊本県の地図を活用した生徒は山鹿市を「熊本県の北部」と捉えているのに対し、熊本市との位置関係が分かる地図を活用した生徒は「熊本市より北部」と捉え、九州の地図を活用した生徒は「福岡県との県境」と捉えた。また、グーグルアースの航空写真により、地形を視覚的に観察した生徒は、「阿蘇山の西部」「平野の西部」「内陸部」「菊池川の北部」等、地形との関係性において位置を捉えた。これらは相対位置の概念として、位置を捉える際の重要な見方であることを伝えた。さらに、地理院地図の地形図を活用した生徒は、平野の中でもとくに標高が高い位置に市街地があると捉えた。今回は、緯度や経度を観察した生徒はいなかったが、標高

とともに絶対位置の概念もまた重要な見方であることを伝えた。生徒はこのように他者の観察結果も共有し、視点を増やしながら地域の捉え方を深めることができた。

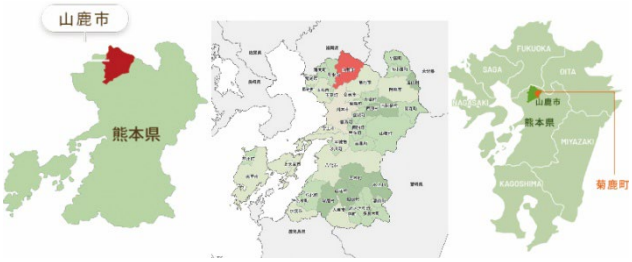






図4　山鹿市を通過する豊前街道

次の「なにが？」のSQについても、生徒の観察方法や着目する事象は多岐にわたった。地理院地図の地形図を用いて山鹿市内の建造物や自然、農地等について、「どこに？」の視点と関わらせながら観察していた。また、山鹿市の生徒にとって身近な地域でもあるため、日常の経験から山鹿市の中心街に古くからある歴史的な建造物等について取り上げている生徒も多くみられた。例えば、江戸時代からの御茶屋である「さくら湯」や明治からの酒蔵である「千代の園酒造」、明治からの芝居小屋である「八千代座」等である。さらには、小学生時代の社会科を思い出し、山鹿市の中心街には「豊前街道」が通過していることを指摘し、改めて豊前街道が「どこに？」あるのか確認する生徒もみられた（図4）。

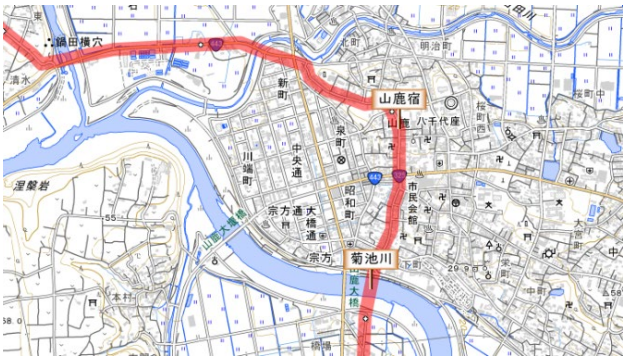


図3　生徒が選択し活用した地図　地理院地図他

次の「どのように？」「いつから？」のＳＱについては、「どこに？」「なにが？」のＳＱと同時に調べたり観察したりした生徒が多かった。山鹿市内に存在する「さくら湯」や「豊前街道」が江戸時代以前から存在していたことを確認する生徒や、山鹿市の市街地は菊池川の北部に東西に広く分布しているのに対し、水田を中心とする農地は菊池川の南部に広く分布していることに気づき、菊池川の北部と南部の違いに着目する生徒もみられた。以上のように、第一段階において、詳細な観察と情報共有ができたと判断したため、第二段階の分析に移行した。

ここで、改めてMQ「山鹿市の中心街が現在の位置にできたのはなぜだろう？」を確認し、MQに対する解答について「自然環境」の視点から情報を整理させた。第一段階でグーグルアースを利用した生徒は、「山鹿市の中心は山地に囲まれた盆地上の地形にあり、阿蘇から流れる菊池川中流域の沖積平野にある。つまり、地下水の得やすい限られた平野部分に古くから集落が作られてきた」といった具合に、既習事項と関連づけてまとめていた。また、地理院地図の地形図を活用した生徒は、「菊池川の北部は南部に比べて標高が高いため、水害を避けるために市街地は北部に形成され、標高が低い南部は農地に利用されてきた」というように、さらに詳細に整理していた。

次に、MQに対する解答を「社会環境」の視点から情報を整理していく。第一段階においては、歴史的な建造物等の観察が多かったことから、歴史的な視点から考察する生

徒が多かった。江戸時代に参勤交代で利用された豊前街道とさくら湯を関連づけ、「参勤交代でこの地域を通過する人々がさくら湯等を利用することで、人が集まり商業等の産業が発達していった」と整理する生徒が多くみられた。



写真1　人馬継所跡の様子　筆者撮影

また、生徒がこのような情報整理をした時点で、写真１を見せ、補足説明を行った。写真１は、豊前街道沿いにある人馬継所跡の様子である。人馬継所とは、参勤交代における付き人や馬を交換する場所のことであり、当時は周辺に馬小屋が建ち並んでいたようである。

さらに、他地域との比較において分析を進めた生徒は、図５の東海道における大井川の川渡りの様子を見つけ出し、「当時、大井川は、防衛上の観点から川に橋が架かっていなかったが、もし、菊池川も大井川と同様だったとしたら川渡りは相当大変だったのではないか？だから川渡りのすぐ後にさくら湯のような休憩所ができたのではないか？よって、山鹿市の中心街は、菊池川と豊前街道が交差する周辺に発達したのではないか？」と分析した。



図5　歌川広重「東海道川尽　大井川の図」
島田市博物館HPより引用

また、「菊池川」をキーワードに分析を試みた生徒は、山鹿市と隣接する菊池市のホームページに掲載されている「広報きくち」から図６を見つけ出し、「菊池川は米を流通させるための水運としての役割があったため、川の周辺は人が集まり賑わっていた」というように、他地域との関係性を考察した生徒もみられた。



図6　大浜町外嶋宮蔵絵馬（復元）菊池川河口に入る廻船を描いた絵馬（奥:大浜町、手前:晒）「広報きくち」より引用

以上のように複数の視点からの分析を生徒間で共有した後、まとめとして、MQに対する解答を記述させた。その際、自身の分析内容だけでなく、別視点からの他者の分析内容も含めて、複数の視点から解答を作り上げることに留意した。

5.　まとめ

本研究の成果の１つ目は、「探究の未知しるべ」を活用することにより、生徒は地理的な見方・考え方をもとに地理的な問いを立てることができるようになったことである。「探究の未知しるべ」を１回限りの授業で活用するのではなく、毎時間のように活用していると、生徒は「探究の未知しるべ」が無くとも、自然とＳＱを立てながら考察を深めることができるようになっていった。このことは、地理的な見方・考え方に基づいて地理的事象や社会課題について考察する力を養うという、地理教育における重要な成果の一つであろう。また、成果の２つ目は、「探究の未知しるべ」を利用し、考察のプロセスが可視化されたことにより、生徒自身が考察のプロセスを理解しやすく、生徒自ら見通しを持って粘り強く取り組んだり、自分の学びを振り返り、次の学びや生活に活かしたりできるようになったことである。このことにより、教師が全ての問いを発し、生徒が分からなければまた教師が解説するというような、教師主導

型の授業展開から、生徒が自立して考察を深めていく生徒主体型の展開を増やすことができた。成果の３つ目は、教師が、生徒の.資質・能力の深まりが見えやすくなったことにある。「探究の未知しるべ」のうち、どの段階までできているのか、または、いくつ視点を持って観察・分析・考察できているのか、生徒と一緒に振り返ることで、それぞれの生徒に適した支援や授業展開の工夫に繋げやすくなった。成果の４つ目は、情報収集や考察の自由度が比較的高くなるため、教師が準備した枠を飛び越え、教師の想定を超える探究者が出現する可能性を秘めていることである。例えば、本実践においては、「なにが？」を観察するプロセスにおいて、山鹿市や鹿本町には、以前「鹿本鉄道」という鉄道が通っていたことを発見し、「なぜ、鹿本鉄道はなくなったのか」という新たな問いを発する生徒がみられた。このような新たな疑問については、次の授業のMQとして探究していくこととした。

このような成果がある一方で、課題もある。一つ目は、生徒がある程度自由度を持って探究を進めていくと、結論に至るまでの時間がかかることである。そのため、教師は、年間計画の中で、生徒に探究を深めさせる単元をどこに置くのか、内容を精選した上で展開を試みる必要がある。2つ目に、生徒の議論が発散していく場合もあることである。実際に、本実践においても、MQを念頭に置かずに地図の観察等を進めてしまったために、最終的に帰着すべき考察の方向性が分からなくなっている生徒も散見された。そのような場合は、教師が授業の本題であるMQを再確認させたり、何のために地図等の観察や分析を行っているのか等、プロセスの意味について正しく認識できる手助けをしたりする必要がある。

しかしながら授業内で、生徒が主体性を持って深く探究し、生き生きと学ぶ姿は非常に誇らしいものである。今回紹介した実践は一例であり、全てがうまくいくわけではないし、必ずこのように展開すると良いわけでもない。私たち授業者が、日々の授業を振り返り、授業で活用できる情報は可能な限り収集し、生徒以上の探究者であってこそ、生徒と地理の楽しさを共有できるのではと思う。本研究のどこか一部でも、先生方の今後の地理授業のヒントになれば幸いである。

参考文献等

・井田仁康（2005）『社会科教育と地域-基礎・基本の理論と実践』NSK出版
・渡部竜也・井手口泰典（2020）『社会科授業づくりの理論と方法』明治図書
・文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会（2025）「論点整理」
・文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会（2026）「各教科等WGにおける資質・能力の構造化等に関連する検討のポイント」「見方・考え方一覧（素案）」「高次の資質・能力一覧（素案）」「各教科等WGにおける議論の補足イメージ及び教科の目標、見方・考え方、資質・能力の全体構造（素案）」
・山鹿市史編纂室編（1985）『山鹿市史』山鹿市
・平川厚編（1976）『鹿本町史』鹿本町
・山鹿市HP
https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/
・島田市博物館HP
https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku
・菊池市HP
https://www.city.kikuchi.lg.jp/category/list/1355.html

授業におけるGISの活用について

～スポーツコース・衛生看護科での実践を中心に～

長崎県立五島高等学校　相知　颯太

1. はじめに

令和４年４月に「地理総合」が必修科目となってから４年が経過した。高等学校学習指導要領解説　地理歴史編（文部科学省　平成30年７月）によると「地理総合」の内容は、

A　地図や地理情報システムで捉える現代世界

（1）地図や地理情報システムと現代世界

B　国際理解と国際協力

（1）生活文化の多様性と国際理解

（2）地球的課題と国際協力

C　持続可能な地域づくりと私たち

（1）自然環境と防災

（2）生活圏の調査と地域の展望

で構成されている。特に、大項目Ａでは現代世界を捉えるための地理的技能の習得を主な学習内容としている。学習指導要領には、地図や地理情報システムの有用性という言葉が複数回登場しており、「地図やGISで表された資料は、位置や空間的な広がりを捉えるのに適しており、文字のみの情報では表現し得ないその役割や有用性を作業的で具体的な体験を伴う学習を通じて理解することが期待できる。」と表現されている。

また、大学入学共通テストにおいても、GISに関連する問題が出題されている。令和７年度「地理総合、地理探究」においては、第３問の問６で津波への備えについてGISを用いて検討し、その分析結果から推計できる値に関する問題が出題された。このように大学入学共通テストにおいてもGISの重要度は増してきている。

筆者は大学時代、故・谷謙二教授のもとでGISに関する知識と技術を学んだ。谷教授は「MANDARA」や「今昔マップ」を開発したGISにおける第一人者である。また、学習指導要領に示された「地理情報システムの有用性」を分かりやすく学生に伝えていた人物であったと当時を振り返る。微力ではあるが、筆者も谷教授のように地理情報システムの有用性を高校生と共有したいという思いで、GISを活用した授業を展開するよう心がけている。

2. 勤務校の紹介

筆者は現在、長崎県五島市に位置する長崎県立五島高等学校で勤務している。五島市は、九州の最西端、長崎県の西方海上約100キロメートルに位置する。大小152の島々からなる五島列島の南西部にあって、総面積は420.1平方キロメートル、10の有人島と53の無人島で構成されている。五島市には４つの公立高校があり、福江島に３校（五島高校・五島海陽高校・五島南高校）、奈留島に１校（奈留高校）が所在する。五島高校は全日制と定時制２つの課程からなる。筆者の勤務する五島高校全日制は３つの学科・コースで構成されており、普通科普通コースに243名、普通科スポーツコース（以下、スポーツコースと記す）に40名、衛生看護科に41名、計324名が在籍している。（令和８年４月８日現在。）

五島高校全日制における地理総合及び地理探究の実施状況は次ページ表１の通りである。必修科目である地理総合の履修年次は、各学科・コースによって異なっている。今回は、筆者が令和７年度に担当した授業のうち、２学年スポーツコースと３学年衛生看護科（表1において網掛けで表現した箇所）での授業実践を中心に紹介したい。

	普通科普通コース	普通科スポーツコース	衛生看護科
1 年	地理総合（2 単位）		
2 年	地理探究（2 単位）	**地理総合(2単位)**	
3 年	地理探究　文系（4 単位） 理系（3 単位）	地理探究（3 単位）	**地理総合(2単位)**

表1　五島高校全日制における地理総合および地理探究の実施状況(校内資料をもとに筆者作成。)

3.　地理院地図を活用した実践紹介

GISの手法の１つにジオコーディングがある。ジオコーディングとは、インターネット上で住所情報を緯度・経度情報へ変換する技術のことであり、変換済みのデータを地図上に表示することができる。筆者は大学時代、谷教授が作成された「各種ジオコーダーAPIを使ったジオコーディングと地図化」というソフトを用いて、住所情報を地図化するという手法を学んだ。大学を卒業し、教員として勤務する中で、地理院地図を活用することでより簡単に住所情報を地



図1　これまでの勤務校を地図化(地理院地図より筆者作成。)

図化できることを知り、様々な地図の作成に取り組んできた。例えば、左図１のように、自己紹介の際にこれまで勤務した学校を地図化して表現することで、離島を有する長崎県の広さを視覚的に表現する効果が期待できる。この手法は非常にシンプルであり、下図２のようなExcelシートを作成するだけで、即座に地図化することができる。この手法であれば、高校生でも簡単に「地理情報システムの有用性」を体験することができるのではないかと考え、令和７年度授業を担当していた２学年スポーツコースと３学年衛生看護科の授業で実践してみることとした。

	A	B
1	対馬市豊玉町仁位1331-2	豊玉
2	平戸市草積町261	平戸
3	南島原市西有家町須川810	島原翔南
4	佐世保市田原町130-1	佐世保西
5	五島市池田町1-1	五島

図2　筆者が作成したExcelシート

4.　実践紹介①スポーツコース(2年)

スポーツコースは、陸上・柔道・剣道のいずれかに強い興味・関心がある人を対象とした専門的なコースである。スポーツ理論などの独自の科目も設定されており、競技力向上や上位大会出場を目標に、日々努力している。令和７年度２学年スポーツコースは14名が在籍していた。スポーツコースにおいては、「陸上・柔道・剣道の強豪校を地図化し、それぞれの競技の地域性について分析する。」をテーマに、授業を実施した。生徒が作成したExcelシートを地図化したのが下図３である。それぞれの項目の説明は以下の通りである。

【赤】陸上（短距離）：令和７年度男子100メートルランキ

ング上位者の所属校を地図化。

【橙】陸上（長距離）：令和６年全国高等学校駅伝競走大会（男子）の上位校を地図化。

【青】剣道：令和７年玉竜旗高校剣道大会（男子）の上位校を地図化。

【緑】柔道：令和７年金鷲旗高校柔道大会（男子）の上位校を地図化。

作業後の生徒の気づきは以下の通りである。

・短距離は東北地方にはない。

・駅伝は日本全体に広がっている。

・剣道は九州地方に固まっている。

・柔道は九州地方や関東地方に多い。

・全体的に九州地方と関東地方に多く、東北地方や中国地方は少ない。日本海側も少ない。

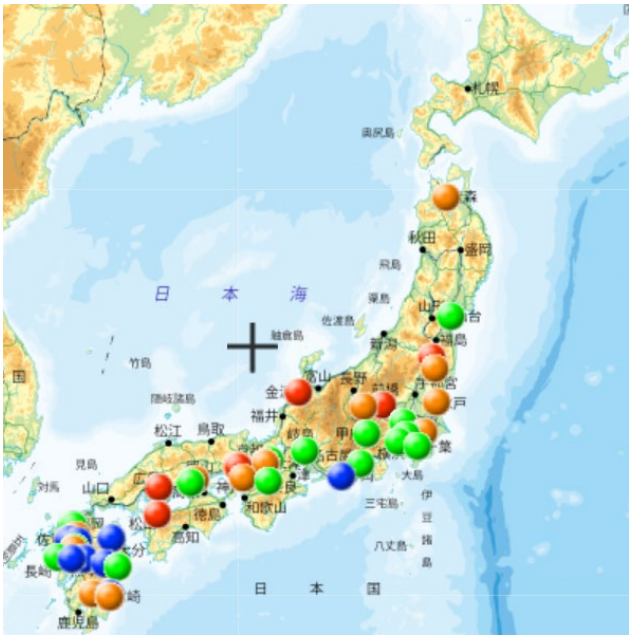


図3　陸上・柔道・剣道の強豪校の地図化

（各大会のホームページや日本陸上競技連盟公式サイトなどを参考に生徒が作成したExcelシートをもとに筆者作成。）

スポーツコースの生徒は、強豪校に対する知識はあっても、今回のように地図化し、俯瞰して考察したことはなかったのではないかと推察する。

5.　実践紹介②衛生看護科（3年）

衛生看護科は、長崎県内では唯一、全国でも２校のみの公立高校に開設された看護専門学科である。基礎看護や看護臨地実習などの専門教科を学び、２年次からは五島中央病院での病院実習を通じて、専門的な技術を学ぶことができる。また、卒業時には准看護師資格試験の受験資格が得られることが大きな特徴である。令和７年度は３学年衛生看護科に27名が在籍していた。衛生看護科においては、「五島市の医療機関（病院・診療所・歯医者）を地図化し、五島市における地域医療の現状と課題を分析する。」をテーマに、授業を実施した。生徒が作成したExcelシートを地図化したのが下図４及び次ページ図５である。それぞれの項目の説明は以下の通りである。

【赤】病院

【青】診療所

【緑】歯科診療所

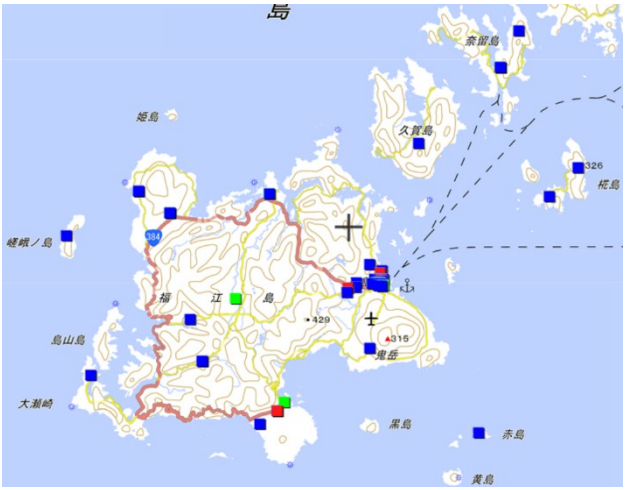


図4　病院・診療所・歯科診療所の地図化

（長崎県庁ホームページ　五島市内の医療施設一覧（R6.8.1現在）五島市内の医療施設一覧（歯科）（R3.10.1現在）を参考に、生徒が作成したExcelシートをもとに筆者作成。）



図5　図4のうち中心市街地の詳細図

作業後の生徒の気づきを以下の図６にまとめた。

生徒の気づき① 見やすい 点々とした島にも診療所がある 人口密度が多いところに病院・診療所多い 川沿いに多い　診療所が多い 歯医者は福江に集結している 病院の周りに診療所がある
生徒の気づき② [歯医者]　福江地区に多い　五島市には歯医者が少ない [病院]　富江には１つしかない　玉之浦、三井楽、岐宿にはない 五島に病院は4つしかない [診療所]　診療所が一番多い　玉之浦に一つしかない どこにでも基本的にある　嵯峨の島に一つある 福江に集まっているが富江や玉之浦などに点々とある
生徒の気づき③ 歯医者は福江に多い　病院は少ない　岐宿に１つ診療所がある 診療所は散らばっている　島や地域に１つは診療所がある 福江地区に密集している　玉之浦には少ない　大浜にはない 歯医者は９つもある　島の中央部にはほぼない 富江には病院も診療所も歯医者もある 大きな病院が近くになくても診療所があるから安心

図6　生徒の気づき

このように地図化することでたくさんの意見が出て、その日の授業は大いに盛り上がったことを記憶している。今回のテーマが地元・五島を扱った内容だったこともあり、多くの意見が出たのではないかと推察する。病院と診療所の違いを自発的に説明した生徒もおり、普段看護の専門授業で学んでいる内容との接続も感じることができた授業であった。

これら２つの実践を通じて、「地理情報システムの有用性」についてスポーツコース・衛生看護科の生徒と共有できたのではないかと考える。

今回は大きく扱わないが、普通コースの授業においては、地理探究の授業の中で、「既存のコンビニエンスストアを地図化し、次のコンビニエンスストアを建設するとしたら、どこに立地させるか。」というテーマで授業を行った。このように、それぞれの学科・コースの特性に応じて、様々なテーマで授業を展開できることが本実践の大きな特徴であると考える。

6.　まとめ

本実践を行うことで期待されることを以下の表２にまとめた。

普通科 スポーツコース	習得した地図化の技術を卒業研究等で活用する。
衛生看護科	二次離島を含む五島の医療の現状と課題を理解したうえで、病院実習に臨む。 →患者の理解に繋がる。
普通科 普通コース	バラモンプラン（総合的な探究の時間）との接続。 大学入学共通テストなど問題を解く際に知識や技能を活用する。

表2　本実践を行うことで期待されること

スポーツコースでは、３年次に卒業発表会があり、各班でテーマを設定し、探究活動を行っている。資料作成の際に、今回の地図化の技術を活かすことができれば、視覚的に分かりやすい資料を提示できるのではないかと考える。

衛生看護科では、本実践を病院実習に活かすことができないかと考える。病院実習は福江島の中心部に近い五島中央病院で行うが、患者は周辺地域だけでなく、山間部や二次離島からも通院していることが予想される。患者から話を聞く際に、今回の授業をもとに患者の居住地について想像を膨らませることができれば、患者の理解がより深まるのではないかと考える。

今回は、詳しく扱うことができなかった普通コースにおい

ても、バラモンプラン（総合的な探究の時間）との接続や、大学入学共通テストなど問題を解く際に知識や技能を活かすことができるのではないかと考える。令和８年度は普通コースで「地理総合」の授業を担当しているため、今回と同様の取組を行いたいと考えている。

7. おわりに

令和６年９月30日（月）に地歴・公民科ICT活用研修会（長崎県庁）、令和７年12月５日（金）に長崎県高等学校・特別支援学校教育研究会地歴・公民部会地理分科会（東彼杵町総合会館）において発表をさせていただく機会があった。その際に、今回の地理院地図を活用したジオコーディングだけでなく、谷教授が開発されたMANDARAや今昔マップを取り上げ、出席していただいた長崎県内の先生方に体験していただく参加型の事例紹介に挑戦した。うまくいかなかったことも多く反省は尽きないが、ハードルが高いように感じるGISを少しでも身近に感じていただければという思いで２回の発表に臨んだ。筆者自身、学部生としての４年間学んだのみで、かつGISソフトの開発など専門的な研究を行ったわけではないが、谷教授から教えていただいた、知識と技術、それを活用して学ぶことの楽しさを生徒や先生方と共有できればという思いで日々の授業や研修会に参加している。今回の実践も高度な研究ではなく、内容としては未熟であることを自覚している。ただし、作業的で具体的な体験を伴う学習を通じて、「地理情報システムの有用性」を感じるという点においては、少しは意義のある実践ではないかと考える。今後もGISのみならず、地理の授業のあり方に関する研究を重ね、長崎県の地理教育の発展に貢献したいと考える。

結びになりますが、今回このような機会をいただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

8. 参考文献

・文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』

・独立行政法人　大学入試センターHP
https://www.dnc.ac.jp/

・五島市まるごとう公式サイト
https://www.city.goto.nagasaki.jp/

・国土地理院　地理院地図
https://maps.gsi.go.jp/

・埼玉大学教育学部谷謙二（人文地理学）研究室（2000～2020年）
https://ktgis.net/lab/

3年間を通した新課程地理教育（地理総合、地理探究）

～佐賀県立佐賀西高等学校における実践例～

佐賀県立佐賀西高等学校教諭　　髙橋　武

1. はじめに

2022年に高等学校学習指導要領が改訂され、地理教育においても科目名が「地理A」「地理B」から「地理総合」「地理探究」へとかわった。生徒用のシラバスを不安の中で作成したのを昨日のことのように覚えているが、多くの皆様が同じ心境のスタートだったのではないだろうか。

「地理総合」、「地理探究」それぞれの本校での旧課程との学習の違い、ICTを利活用した本校独自の実践例なども交え、入試結果に基づく検証結果を示しながら、３年間を通した新課程地理教育について、今現在の結論を導き出していきたい。これが、新課程地理教育で試行錯誤されている皆様の参考になれば幸いである。

2. 本校の教育課程と使用教材

佐賀県立佐賀西高等学校は、佐賀市城内に位置し、2026年には創立150周年の記念式典が行われる伝統ある進学校である。ほとんどの生徒が四年制大学へ進学し、東京大学や京都大学、九州大学、熊本大学、そして地元の佐賀大学などに進学する。１年次の入学定員は280名であり、２年次から文系・理系に分かれる。文系は、３年次に、東京大学を含む難関国立大学を目指す文Ⅰコース20～40名の１クラスとその他の文Ⅱコース２～３クラスに分かれる。次の資料１のように、文Ⅰコースでは地歴の探究科目を２つ選択し、文Ⅱコースでは地歴１つと公民１つを選択する。また、資料２には旧課程と新課程の本校の使用教材を示した。新課程において、１年次から、より主体的な学びを生徒がしやすいように、副教材を変更、追加したのが特徴である。

【旧課程】　数字は単位数。

１年　現代社会２

文系

２年　世界史Ｂ４＋(地理Ｂor 日本史Ｂ)４

３年　世界史Ｂ４＋(地理Ｂor 日本史Ｂ)４
＋(学校設定科目地歴)１
または
(世界史Ｂor 地理Ｂor 日本史Ｂ)４
＋倫理２＋政治・経済３

理系

２年　(世界史Ｂor 地理Ｂor 日本史Ｂ)２
＋(世界史Ａor 地理Ａor 日本史Ａ)２

３年　(世界史Ｂor 地理Ｂor 日本史Ｂ)４

【新課程】　数字は単位数。

１年　地理総合２＋歴史総合２

文系

２年　世界史探究２＋(地理探究 or 日本史探究)２
＋公共２

３年　世界史特講４＋(地理特講 or 日本史特講)４
…文Ⅰコース
(世界史特講 or 地理特講 or 日本史特講)４
＋政治・経済４　…文Ⅱコース
※○○特講は探究を発展させた学校設定科目。

理系

２年　(世界史探究 or 地理探究 or 日本史探究)２
＋公共２

３年　(世界史探究 or 地理探究 or 日本史探究)３

資料１　旧課程と新課程の本校教育課程

【旧課程】　地理Ｂ　２年～
教科書　『新詳地理Ｂ』帝国書院
地図帳　『新詳高等地図』帝国書院
資料集　『地理資料』とうほう
統計集　『データブック　オブ・ザ・ワールド』
　　二宮書店
その他　『新地理要点ノート』啓隆社
　　『新地理の研究』啓隆社
３年　～　『ウィニングコンパス－地理の整理と演
　　習－』とうほう
　　共通テスト直前演習問題集
　　ベネッセ、河合出版

【新課程】　地理総合、地理探究
教科書　『高等学校新地理総合』帝国書院　１年～
　　『新詳地理探究』帝国書院　２年～
地図帳　『新詳高等地図』帝国書院　１年～
資料集　『新詳地理資料 COMPLETE』
　　帝国書院　１年～
統計集　『データブック　オブ・ザ・ワールド』
　　二宮書店(山川出版社)　２年～
　　『地理統計 Plus』帝国書院　３年～
その他　『新地理総合ノート』帝国書院　１年～
　　『地理総合の研究』啓隆社　１年～
　　『新詳地理探究演習ノート』帝国書院
　　２年～
　　『新地理の研究』啓隆社　２年～
３年～　『ウィニングコンパス－地理の整理と演習－』
　　とうほう
　　共通テスト直前演習問題集
　　ベネッセ、河合出版

資料２　旧課程と新課程の本校使用教材

3. 旧課程におけるICT利活用実践例

佐賀県においては、2011年度からの先進的ICT利活用教育推進事業により、2013年度までにはすべての県立学校の各学級に電子黒板が設置され、2014年度からはすべての県立学校１年生が学習用PCを購入した(現在は３年間の貸与となっている)。そのため、これから紹介する授業実践の中にはICT利活用の場面が多く登場する。電子黒板や学習者用PCを活用することで、授業の可能性は無限に広がる反面、生徒の興味・関心を高め、基礎・基本的な知識の習得につながるような、教師の工夫が試されてきた。

○SKYMENU Class

佐賀県教育委員会では、電子黒板と学習用PCの導入当初から約10年にわたって、Sky株式会社のSKYMENU Classを使用してきた。ペン機能などさまざまな支援機能があるが、最も使用するものは、教師用の学習用PCの画像を電子黒板や生徒用の学習用PCに投影する機能である。現在でも授業では、教師用の学習用PCに保存している地図や資料などの画像、または地理院地図などインターネット上の画面をそのまま投影し、画像を拡大させたり、ペン機能も活用したりしながら、説明を行う。共通テストの問題演習の解説時にはなくてはならない機能である。

また、投票機能があり、教師用の学習用PCから生徒用の学習用PCにクイズ番組のように選択を投げかけ、設定された時間が経過すると、教師用の学習用PCにはグラフで生徒が選択した選択肢の割合が示される。それを電子黒板に示しながら、解説などを展開することも可能であり、これも便利機能の一つである。

○MANDARAなどその他

MANDARA10は無料GISソフトであり、本校ではWEBブラウザで動作するMANDARA JSを使用した。亡くなられた埼玉大学谷謙二先生が著した『フリーGISソフトMANDARA10入門』(古今書院)を参考に、生徒に配付する説明書を作成し、旧課程では単位数的に余裕がある文系の生徒に対して、図形表現図と階級区分図の作成方法を指導

するようにしてきた。『データブック　オブ・ザ・ワールド』(二宮書店(山川出版社))に掲載されている主要な農産物や鉱産物の生産量や輸出量、輸入量の統計データの図形表現図を作成させ、グループで簡単な作問をさせていく。その後、グループで自らの学習用PCを見せあいながら、解答し、知識を深めていくグループワークを行う。グループワークの方法はさまざまであり、先述したSKYMENU ClassやMicrosoft OneNote ClassNotebookなどを活用すれば、それぞれの学習用PCや電子黒板に表示させながら、興味・関心を持たせて解答しあうことも可能である。本校は生徒・教師ともにMicrosoft Office365を使用しているため、Microsoft OneNote ClassNotebookを授業で活用した。グループ内など同じ画面で作業をすることができたり、教師から資料や問題などを生徒それぞれに提示できるため、少人数で授業を行う文系地理Bの授業では、小テストにも活用したりした。

4.　新課程における実践例～「地理総合」と「現代の国語」とのコラボ授業～

新課程となり、共通テスト国語では資料読み取りの第3問が設定された。その対策として国語科と地理科で話し合いの上、「現代の国語」と「地理総合」とのコラボ授業を始めることとなった。2023年度に始まり、「防災」と「日本の人口移動」をテーマに毎年実施している。ここからは地理総合と現代の国語それぞれの実践例を紹介したい。

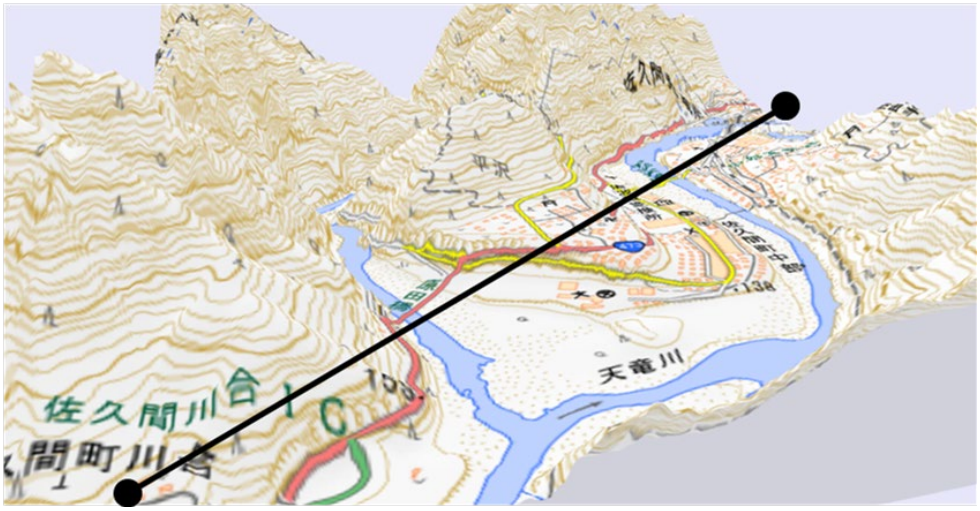
○コラボ授業「防災」前半の地理総合の授業

2023年度静岡大学情報学部情報社会学科前期小論文の問題を参考にした、防災に関するコラボ授業である。地理科担当者が「防災」についての授業を行い、その後国語科担当者が「情報を読み取り、論理的に書く」の授業を行う。導入として、熊本県球磨村の河川合流部付近の老人ホームなどが浸水被害を受けた球磨川流域、倉敷市の河川合流部付近の後背地が浸水被害を受けた高梁川流域、そして

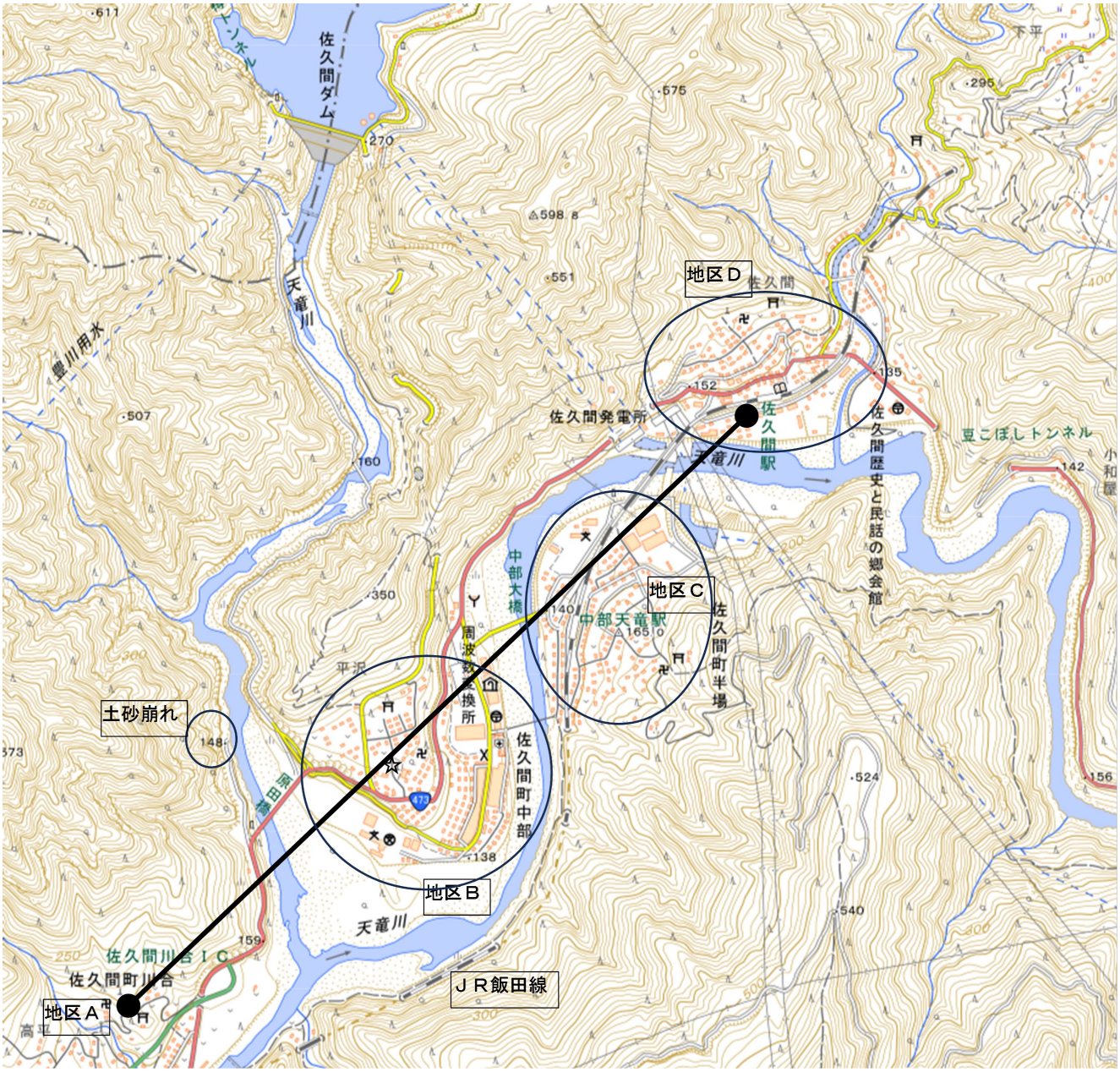
「Train the Intellect」コラボ授業　**「防災」**　問題　　(問題文前半省略)

浜松市は 2005 年に 12 市町村が合併し、市域が約 1,558 ㎢キロメートルの広域な自治体となった。南部に市役所があり、中心市街地が広がっている。北部は中山間地域が占めており、天竜区の人口は図表 1 のように推移している(図表 1 は都合により省略)。中山間地域では土砂災害警戒区域が多く設定されており、大雨による通行止めなども頻発している。天竜区佐久間町では、2015 年 1 月に生じた土砂崩れによって原田橋が崩落し、新たな橋は 200m 下流に建設された（2020 年 2 月に完成)。佐久間町の地理空間情報を図表 2 （ａ：地形図　ｂ：断面図　ｃ：3D 地図　ｄ：写真(写真は都合により省略)）に示す。

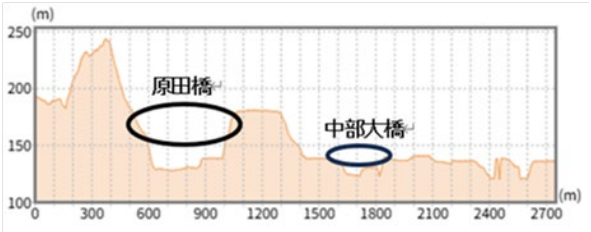
問　佐久間町の地理的特性(地形、集落や道路の分布など地域の様相)を図表 2 から読み取った上で、災害による影響や課題について記しなさい。(300 字以内)



図表 2 ｃ　3D 表示された地図　　静岡大学入試問題を参考に地理院地図により筆者作成



図表２ａ　天竜区佐久間町の地形図　　静岡大学入試問題を参考に地理院地図により筆者



図表２ｂ　地区Ａ－Ｄ間における地形の断面図　　静岡大学入試問題を参考に地理院地図により筆者作成

図表２ｄ　建設中の原田橋(図表２ａ中の地区Ｂ☆付近の上空からのドローン画像)（図表２ｄは省略）

出典：中日新聞しずおかＷｅｂ「集落の命綱、架かる期待　原田橋崩落あす４年」(2019年01月30日)

※紙面の都合上、今回は図表２中のａ、ｂ、ｃ、ｄの順番を入れかえた。

広島市安芸南区で土石流被害を受けた八木地区の地理院地図を提示しながら、教科書で学んだ災害に関する復習を行う。それは浜松市天竜区佐久間地区の問いにおいて、図表２の読み取りの助けとなる知識の整理でもあった。

次に、問題文中に登場する「原田橋」や図表２について、電子黒板で一つずつ提示しながら、生徒と一緒に確認する。最後に、地理総合の授業で以前紹介した「重ねるハザードマップ」も実際に利活用すべく、浜松市天竜区佐久間地区の「地理院地図」と「重ねるハザードマップ」のショートカットを生徒に提示する。生徒は学習用PCでそのショートカットから実際に両サイトを開き、予測される災害について調べ、グループで対話する時間も設けた。教師の意図の通り、球磨川や高梁川での水害と同様に、図表２ａ中の南西部に位置する天竜川との河川合流部からその下流部は氾濫しやすいのではないかと着目した生徒、広島市での土砂災害と同様に、急傾斜地が連続するこの地区の道路や集落では土砂崩れが発生しやすいのではないかと着目した生徒など、さまざまな意見をだしてくれた。ＪＲ飯田線については佐賀県の生徒にとっては認知度が低いが、天竜川に沿って国道と鉄道がおおむね南北に走っているということは、どの地域とどの地域を結んでいる交通路なのだろうかという点も考えるように問うた。このように、300字論述は高校１年生にはハードルが高いのではないかということで、地理総合の授業ではある程度まで、論述ができる知識を整理するにところまでは導いた。

○コラボ授業「日本の人口移動」後半の現代の国語の授業
高度経済成長期から近年に至る東京圏、大阪圏、名古屋圏、地方圏の人口の流出と流入に関するグラフを活用した小論文である。帝国書院の地理探究の教科書には掲載があり、かつ東京大学前期試験地理の問題で出題されるなど、取り扱いやすいものをコラボ授業で使用した。ここではICTを活用したコラボ授業後半の現代の国語の授業を少し紹介したい。国語科教師による文章の書き方に関する簡単な指導の後、生徒は一つのパワーポイントファイルを開き、同ファイル内の自分の出席番号のスライドに100字程度の論述を入力していく（授業前にMicrosoft Teamsのチーム内の共有フォルダにクラスの人数分40枚のスライドを準備したパワーポイントファイルを入れておく）。そこでは、40枚のスライドがリアルタイムで更新されていくため、教師は教師用の学習用PCで生徒の入力状況を確認することができる。一定の時間が経過した後、国語科の教師は40枚のスライドの中から、生徒数人のスライドを順番に電子黒板に投影し、生徒達と評価し合っていった。ちなみに、私が１年次に担任をしていたクラスでのコラボ授業において、国語科教師がよく書けていると絶賛しながらクラス全体に提示していた生徒二人は、結果的に東京大学と神戸大学に現役合格した。振り返ってみると、他教科の私が、生徒が持つ論述する力を知るのに、コラボ授業は有益であり、たいへん貴重な経験であった。

5. 旧課程と新課程の学習指導と結果検証

○旧課程での地理Ｂ
本校の旧課程地理Ｂは２年生からの選択履修であった。理系は２年２単位、３年４単位ということで、理系はおおむね進研模試の範囲と同程度のスピードで進んでいっていた。教科書の順番に進み、地図、地形や気候の自然環境、地球環境問題、農林水産業がちょうど２年12月から年始に終わる進度である。２年終了時には工業立地まで。３年次は４月に工業、５月に第３次産業、交通・通信・貿易・観光、人口、６月に都市、７月国家や民族など。夏休みにも課業日を設定しているため、盆前に系統地理が終了し、盆明けから９月、10月、11月上旬に地誌が終了。11月末から共通テスト演習が開始といった流れであった。

文系は２年４単位、３年４単位で進行する。先述したMANDARA JSを活用した統計データの学習や問題演習、Microsoft Teamsを活用した学習などを入れながら、２年終了時は人口まで。３年次は７月から９月にかけて地誌を行い、10月中旬からは共通テスト演習を行う。
本校は県高校総体後の３年６月から放課後補習を実施しており、文系地理は週１回あるため、国公立大学の入試論述問題や私立大学の問題の解答解説を行った。

○新課程初年度の地理総合(2022年度)

新課程となるにあたって、地理総合の必履修化が決定した。初年度の地理総合を前に、本校のもう一人の地理専門の教諭Aさんとどう進めていくかを検討した。地理探究の詳細がまだわからない状況であったが、地理総合の主となる「GIS」「ESD」「防災」については取り扱うこと、地理探究で取り扱い重なるだろう地形や気候に関しては地理総合では取り扱わないことで決し、シラバスを作成した。50分授業の中で、見開きの教科書２ページ分の説明、そして後半は生徒たちの作業を増やすために、教科書準拠のノートを準備し、活用していった。私は新課程初年度であったが３年地理Ｂと２年地理Ｂの一部クラスを受け持っており、新課程の授業をもつことはなかった。地理総合は教諭Aさんのみで７クラスすべてを担当できなかったため、定年退職された先生を非常勤講師で招いた。

○研究設定

新課程２年目となる2023年度では、私は１年地理総合５クラスと２年文系地理探究、３年文系地理Ｂ担当となった。この年は年齢が若い地理専門とする常勤講師を招き、私が指導を行いながら地理総合２クラスを担当してもらうことができた。

私は第１学年担任・学年副主任となり、３か年持ち上がることが予想されたため、地理総合の教科書を２単位１年間でおおむね終わらせることによって、３年後の共通テストの得点を上げ、さらには東京大学をはじめとする超難関大学への進学数を増やすことにつながるのではないだろうかという仮説をたて、計画を実行に移していった。

○地理総合(2023年度)

新課程２年目の地理総合で新たに始めたことは次の通りである。

・予習

50分で教科書はおおむね４ページずつ進むため、前もって教科書本文を読み、教科書準拠の新地理総合ノートを予習で穴埋めされている状況にしてきてもらった。生徒が費やす時間は４ページ10分程度。授業前の10分休み時間にしている生徒がほとんどであった。

・授業

授業では教科書の各資料について、教師が説明したり、生徒グループで対話させたりしながら、授業を進めた。帝国書院の指導者Webサポートからダウンロードした授業プリントを配布し、教師が口頭で説明を行ったものをメモさせていった。帝国書院の教科書には「学習課題」や「確認」、「深い学び」という問いが提示してあるため、授業プリントにその問いの答えを書かせていく作業も各話題の最初と最後行った。教科書２ページがおおむね25分で完結し、50分では２回それが行われた。(2026年度は授業プリントを使用せず、新地理総合ノートで完結している。)

・復習など

見通し・振り返りシートというプリントを活用した。これも帝国書院の指導者Webサポートからダウンロードして使用した。単元の最初に配布し、単元終了後に生徒は記入し、教師へ提出をさせていった。ルーブリックの記載があるため、生徒の自己評価もしやすいのがよかった。生徒はおおむね１、２週間に１枚はシートを提出していったことになる。記入する分量は生徒によってまちまちであった。「主体的な学び」ができるような手立てとして、教師が準備することは生徒たちが復習に向かうきっかけづくりとなった。教科書などをみながら授業を思い出し、記入するため、確実に力がついていったと考えられる。

２学期、３学期には地域ごとの国名や山脈、河川などの名称を解答する小テストを週１回で実施した。

○地理総合(2023年度)の結果

・１学期

・地図と地理情報システム

・自然環境　(地形は１日２ページの分野もあり)

・日本の自然環境と防災

地理院地図、今昔マップon the Web、重ねるハザードマップの活用について指導を行った。教科書の順番は前後したが、自然環境と防災を１学期に行った理由としては、佐賀県特有の事情がある。佐賀平野は低地が広がり、クリークと呼ばれる水路網が発達してきた。クリークが発達しているのも、有明海の満潮時には海水が河川に流入してくるためである。NHKのブラタモリ佐賀編で紹介があったので、

ご覧になった方もいらっしゃるだろうが、その干満差によって、水運も発達したといわれている。そんな佐賀だからこそ、水害とはうまくつきあっていかなければならない。実際に、本校の近くでは、大雨の際に必ず浸水する地域がある。佐賀市やその周辺部には「排水機場」とよばれる自然排水できなくなった内水をポンプで排水する施設が多くある。内水氾濫については都市で多く発生する旨教科書には記載があるが、本校では佐賀でも発生するメカニズムについて授業で取り扱った。また、夏休みには地理院地図での標高の調べ方や、学校周辺や通学路における浸水被害想定などを簡単にまとめる課題を出した。生徒らは真剣に取り組んでくれ、防災意識が少しでも向上してくれたらという点と多くの生徒が県外へ巣立つため、進学先でも使える地理的技能の習得につながることを目的とした。

・２学期

・生活文化の多様性と国際理解

地誌的な取り扱いになるため、中学地理以上地理探究未満の知識の習得となっていく単元が多かった。この取り扱いは今後の検討材料の一つだと感じた。また、２学期からは国名などの小テストなどを実施していった。

・３学期

・地球的課題と国際協力

・現代の国語とのコラボ授業

〇地理探究(2024、2025年度)

教科書の順番に授業を進めた。地理総合で取り扱った分野については既習分野として、確認程度で授業は進めた。

・予習

授業で進む範囲の教科書を読むことを勧めた。授業前の休み時間に教科書を読んでいる生徒が多かった。

・授業

私が授業プリントを作成し、配布する。ノートに貼らせてメモがとりやすいようにした。ほとんどの教科書の資料については対話的に、生徒と一緒に読み解いていった。

・復習

単元ごとに地理探究演習ノートと新地理の研究を活用した。また、地理総合に引き続き、見通し・振り返りシートというプリントを活用した。帝国書院の指導者Webサポートからダウンロードして使用した。単元の最初に配布し、単元終了後に生徒は記入し、教師へ提出していった。

〇地理探究(2024年度)の結果

・２年１学期　　文理共通２単位

・自然環境(地形、気候)

・資源・エネルギー

・農業(ホイットルセイ、農業データ)

地理総合において、地形と気候の基礎・基本については授業進度を抑え、時間を割いて学習しているため、地理探究では確認作業をしながら深めていった。夏休みに資源・エネルギーや農業のデータが復習できるように１学期のうちに学習した。

・２年２学期

・日本の自然環境

・地球環境問題

・交通・通信・貿易、観光

・日本の農業

・世界の自然環境と農業(地誌分野)

・衣食住

・林業・水産業

・２年３学期

・工業

・第３次産業

・人口・人口問題

〇地理探究(2025年度)の結果

・３年１学期　文系４単位、理系３単位

・世界の工業(地誌)

・都市・都市問題

・言語・宗教・民族・国家

・世界地誌の残り

・３年２学期

・日本の国土像

『新詳資料COMPLETE』(帝国書院)を活用して日本地理を学習した。中学地理の内容であり、今までは時間の余裕

がなく、生徒は知っているだろうという希望的観測があり、盲点であったため、この年度は取り扱った。日本地理を行う時間的余裕があるというのは、よかった。

・共通テスト問題演習

以前は、共通テスト直前演習問題集を解答した後に、Microsoft Formsへ自らの解答を入力してもらうことで、正答率を出し、それに応じた解説を行っていたが、2025年度は本校が導入している「百問繚乱」という採点システムを活用した。生徒はMicrosoft Formsに入力する手間がなくなり、解答した後にマークシートを教師へ提出し、教師がそれをスキャンし「百問繚乱」にとりこむことで、自動採点される。小問ごとの正答率がすぐにでるため、解答した次の授業では、正答率に応じた解説を行うことができる。ちなみに、定期考査の採点も記述・論述以外は自動採点が可能なため、採点業務の時間は短縮している。

○入試結果

・共通テスト

共通テストの点数については、年によって難易度や平均点が異なり、単純な比較は難しい。具体的な点数の開示は避けた上で、ここでは公表可能な範囲で結果を示したい。

2025年度入試を受験した学年は、前年度よりも地理探究を選択する生徒が増加する特異な現象となった。とくに文系地理は日本史と地理の選択者が約半々となった。「地理総合では小テストを受けたり、見通し・振り返りシートを毎週がんばって書いたりしたし、このまま受験まで続けたい。」という趣旨の生徒の声が多かった。

各生徒が熱心に学習に取り組んでくれたこともあり、80点台、90点台の生徒は前年比増加した。また、旧課程地理B受験の2022年比でも80点台の生徒が増加した。それに対して、全国平均点に満たない生徒も増加したのも実情である。旧課程の地理Bを2021年、2022年の２ヵ年にわたって担当した際には、全国平均点を下回る生徒はわずかであったため、その点は反省点の一つである。３ヵ年の学習の中で、１年次から生徒の学びに向かう姿勢をどう高めていくかというのは、他教科でも課題なのであろうが、これは今後の工夫が必要なのだろうと感じた。

・難関大学入試

東京大学受験者が在籍する文Ⅰコースのクラス担任を私は務めた。過去２年は現役での東京大学文科への合格者はでていなかったが、2026年度入試では前期試験で３名が合格した。地理選択者は４名受験し２名合格した。残り２名も2027年度には東京大学に合格してくれると確信している。やはり、３年次当初から問題演習に割く時間的余裕があったことは、収穫の一つであった。たまたまかもしれないが、今回は、東大国語の得点が高い生徒が東大地理の得点も高かったこともあり、東大地理に向けて、国語科の役割も大きいと感じた。充実した地理総合は受験結果にも良い影響を本校では与えていると、今現在、私は結論付ける。

6. まとめ

国数英を中心に、他教科は高校３年間をかけて当たり前のように学習指導を行ってきた。今回、私は初めて３年間継続した地理教育を担当し、「１年次から３年間をかけて指導できる『贅沢さ』」を感じた。学校によっては地理専門の教師が確保できないところも多いため、本校は恵まれている。この恵まれた環境があっても、なくても、生徒が自走できる環境づくりが私は大切だと考える。本校で『新詳資料COMPLETE』(帝国書院)と地図帳を３年間継続して使用しているのもその環境づくりの一つであった。教師の声掛け次第で、教科書だけでなく、資料集や地図帳を活用し、生徒が主体的に学習する時間は十分に確保できた。

生徒一人ひとりが３年間を通して、「主体的・対話的で深い学び」の中で、楽しく地理にふれていければ、新課程の地理教育の未来は明るいだろう。教師の負担は大きくなるため、教師のさまざまな工夫が共有されていくことで、教師の負担減にもつながりつつ、九州の地理教育がより発展していくことを期待する。

つたない実践発表であったが、このような機会を与えていただき、感謝を申し上げたい。

参考文献

文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』

地理探究における探究活動の授業実践報告

～交通・通信・観光の視点から描く持続可能な島づくり～

沖縄県立首里高等学校　城間みなみ

1. 学校紹介

３月まで赴任していた沖縄県立宮古高等学校は普通科と文理探究科があり、生徒の大学進学志向が高い進学重点校の一つである。離島地域のさらに離島という環境において、豊かな自然と特色ある文化のもと、生徒は勉学や部活動に熱心に取り組んでおり、また離島地域の課題についても生活実感から一定の関心を示す。学校全体として日頃からTeamsやクラウドツールを用いた協働学習を取り入れており、学習端末を使用した活動が定着しつつある。

2. 授業実践の背景とねらい（R7年度沖縄県授業改善推進事業）

本実践は、令和7年度沖縄県授業改善推進事業の一環として取り組んだものである。単元は地理探究の大項目「A 現代世界の系統地理的考察」、中項目「(3) 交通・通信、観光」に該当する。地域課題を「自分事」として捉え、資料に基づいて考察を行いながら持続可能な発展のための具体的な政策を探究する授業モデルの構築を目指した。そこで、宮古島市が掲げる「エコアイランド宮古島」のビジョンと、急増する観光需要を教材化することで、生徒が当事者意識を持って学習に臨みやすくなると考えた。

3. 身につけさせたい力

スクールポリシーと地理探究の目標を踏まえ、主に次の３点の育成を目指した。

①多角的な考察力： 複数の立場から地域事象を分析する。

②地理的技能の活用： 各統計資料等を読み解き、現状を客観的に把握する。

③持続可能な社会への構想力：地域の課題解決に向けて主権者として具体的・論理的に提言する。

4. 指導と評価

単元全体を貫く問い（FQ）を「『エコアイランド宮古島』のビジョンと持続可能な観光開発を両立するにはどのような取り組みが必要か？」と設定し、単元の各学習内容を段階的に扱いつつ、宮古島の課題について考察していき、最後に「宮古島市長として政策を立案する」というパフォーマンス課題を設けた。その際、生徒の思考を深め対話的な学習を実現することと、指導と評価の一体化を行うために次の手立てを用いた。

・多角的な視点の導入：宮古島が抱える課題を「住民・観光客・事業者」という異なる立場から考察させ、市長として観光客の利便性向上と住民の生活維持、環境負荷の軽減というトレードオフの関係にある課題を捉えることを目指した 。

・ICTツール（Teams）の活用： 効率的に他者の視点を取り入れながら考えを深めるために「クラスノートブック」を活用し、グループで共有した課題や「エコアイランド宮古島」の5つのゴールとの関連性をリアルタイムで全体共有した。（資料1）

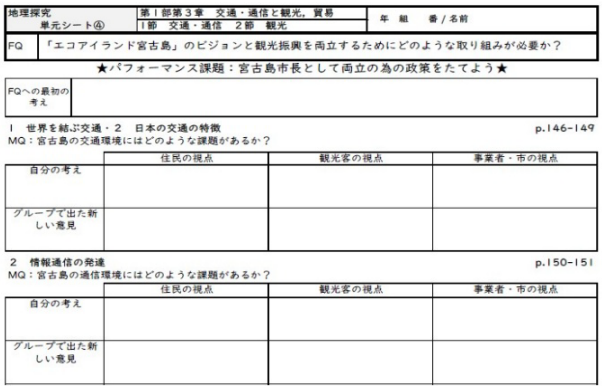
・OPPシートとWSの併用： 単元を通して、毎時に考察したことを記録するOPPシート（One Page Portfolio）と、重要語句や分析を整理するワークシートを使い分け、思考を可視化することを試みた。（資料2・3）

・評価について：OPPシート、WSを用いて次の観点でルーブリックを作成した。

①多角的な視点の有無、②解決策の具体性



（資料1）クラスノートブック活用事例



地理探究　単元シート④ | 第Ⅰ部第３章　交通・通信と観光、貿易　Ⅰ節　交通・通信　２節　観光 | 年　組　番／名前

FQ　「エコアイランド宮古島」のビジョンと観光振興を両立するためにどのような取り組みが必要か？

★パフォーマンス課題：宮古島市長として両立の為の政策をたてよう★

FQへの最初の考え

1　世界を結ぶ交通・2　日本の交通の特徴　p.146-149

MQ：宮古島の交通環境にはどのような課題があるか？

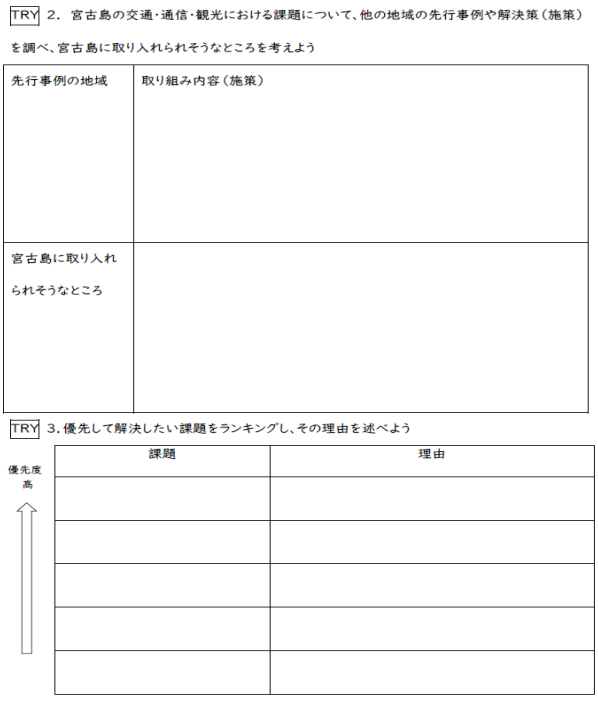
	住民の視点	観光客の視点	事業者・市の視点
自分の考え			
グループで出た新しい意見			

2　情報通信の発達　p.150-151

MQ：宮古島の通信環境にはどのような課題があるか？

	住民の視点	観光客の視点	事業者・市の視点
自分の考え			
グループで出た新しい意見			

（資料2）OPPシート　B4 1枚の一部を抜粋



TRY　2．宮古島の交通・通信・観光における課題について、他の地域の先行事例や解決策（施策）を調べ、宮古島に取り入れられそうなところを考えよう

先行事例の地域	取り組み内容（施策）
宮古島に取り入れられそうなところ	

TRY　3．優先して解決したい課題をランキングし、その理由を述べよう

優先度高

課題	理由

（資料3）使用したWS（B4 1枚の一部抜粋）

5.　単元の指導計画

	学習主題と主な活動内容	評価内容
第1時	**世界と日本の交通** 世界の航空路の確認と、宮古島の交通課題の共有	航空交通網の分布と地域差の読み取り。
第2時	**情報通信の発達と地域格差** 世界の海底ケーブル網等の資料から地域格差を把握。宮古島の情報通信課題の共有	情報通信の変遷と課題の理解。
第3時	**観光の多様化とグローバル化** 入域観光客数等のデータ分析と課題抽出。宮古島の観光課題の共有	資料に基づいた観光の現状と背景の考察。
第4時	**持続可能な観光開発の構想** 先行事例の調査と宮古島への適用を協働的に検討。	解決策の協働的な検討。
第5時	**パフォーマンス課題の実践** 市長として政策を立案・発表。	学習内容を踏まえた主体的・具体的な提案

6.　成果と今後の課題

【成果】

・ICTの活用と対話を通じた思考の深化： インターネットによる調べ学習と資料分析を組み合わせることで、生徒間の対話が活性化し、考えを深めることができた 。また、学習履歴が蓄積されることで思考の連続性が担保された。

・探究活動との接続： 総合的な探究の時間（総探）での学びを地理の授業で構造化しなおすことで、より深い学びにつなげられた 。

・生徒の変容：「宮古島市長」として政策を立案する活動を通じて、地域課題に対する生徒の当事者意識が高まった。

【課題】

・タイムマネジメント： 視点を複数設定したことで、分析の時間が不足する場面が見られた。限られた時間内で調査をするために提示資料の精選や探究活動時の指示の明確化が必要。

・評価の作業効率・精度向上： 生徒の変容を効率的かつ的確に見取るため、より直感的なワークシートデザインや手段への改善が必要。

7.　参照

・宮古島市HP
エコアイランド｜行政情報｜宮古島市
・沖縄県統計・データ・その他刊行物等（観光）
統計・データ・その他刊行物等（観光）｜沖縄県公式ホームページ

「『指導と評価の一体化』を目指した授業改善の取り組み」

大分県立中津南高等学校　守山　達郎

1. はじめに

(1)授業改善

九州の各校で、授業改善の取り組みが日々実践されているかと思います。私が勤務する高校においても、『確かな知識・技能に裏付けされた「思考力・表現力・判断力」を、更なる思考の深まり・学力の向上に繋げていこうとする学習者の育成』をテーマ。また、単元を見通した授業展開の中で随所に探究的な学びを取り入れるとともに、発問の工夫により指導と評価を一体的に行うことを授業改善の重点としている。また、これまで実施されてきた中間考査や期末考査が廃止され、単元テストの実施や評価テストに置き換わった。これらは、生徒が自ら学びに取り組むサイクルを確立させることを目指し、そのために最適な学びの方法を教員が提供するための授業改善だと解釈できる。現行の学習指導要領において、「生徒」が主体となった内容になっていることからも、生徒が学習活動を通して、学び方を身につけ、その力を生かして学びに向かうための手助けをすることが教員に求められている。そのためにも、当たり前ではあるが、教員自身が現状に満足することなく、知識や技能を常にアップデートし続けることが大切であると再確認させられた。

(2)　現状分析

授業改善を図る上で、まずは現状を把握することが必要だろう。例年生徒対象に実施されている授業アンケートは、具体的な数値を比較することが可能であり、現状把握に有効な資料であるだろう。

授業者の目標管理シートでは令和５年度より、中津南高校にて年間２回実施される生徒対象の授業評価アンケートの質問項目を検証指標に用いている。実際に用いている項目は以下の３つである。

【アンケート項目】

①この授業では「本時（単元）の目標」を意識して授業を受けている。

②この授業では「自ら深く思考する場面」を実感できた。

③この授業では、授業の振り返りにより、できるようになったことを確認できた。

この３つの項目は、生徒が学びの見通しを立てる。そして、生徒が学びを通して身につけた力を自ら確認することで成長を実感するという流れに沿った項目設定である。

アンケート結果は以下の通りである。

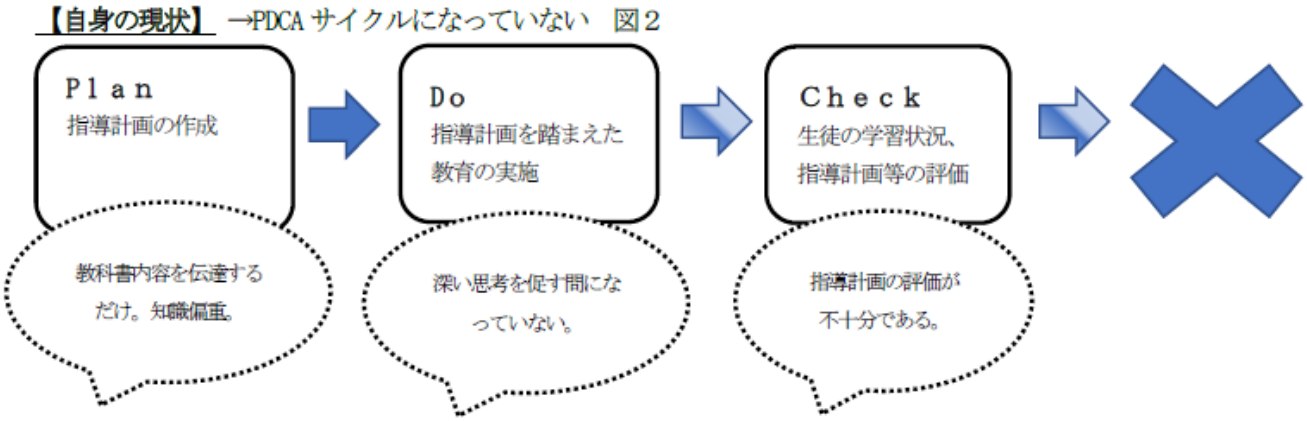
図１

	R５中間	R５期末	R６中間	R６期末	R７中間
①	86.8%	88.7%	80.3%	82.7%	87.5%
②	88.1%	92.0%	89.2%	90.4%	87.5%
③	84.2%	90.0%	80.3%	86.5%	91.1%

※肯定的回答の割合。

R5、R6、R7授業評価アンケート結果より作成

以上のことから、R５・R６ともに中間評価から期末評価にかけて各指標の肯定的回答の割合は増加していることがわかる。一方、年度ごとの比較では、R５中間・R６中間のように逆に数値が低下している。また、肯定的回答の割合も90%前後が最高値となっており、それ以上を目指すためには何らかの改善が必要であることは明らかであった。特に検証指標①、この授業では「本時（単元）の目標」を意識して授業を受けている、についての肯定的回答の割合が低く、５度のアンケート結果がいずれも90%未満となっている。授業の目標については、毎回の授業の導入時に示しているが、生徒への意識づけが上手くできていないと考えられる。恥ずかしながら自分自身の状況を振り返った際、はたして授業改善の取り組みを授業に反映させることができているのか、授業力を向上させられているのか、反省すべき点が多いように思われた。特に大きな問題として、以下の状況が考えられる。



「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(国立教育政策研究所)を参考に作成

日々の授業の中で生徒に目標を示し、問いかけを行い、その振り返りを求める一方で、私自身が指導方法のあり方を見つめ直し、改善することをきちんと行ってきたのだろうか。つまり、生徒の学習状況と自身の指導方法の現状を的確に認識し、改善することが必要であると。そこから、授業改善の重点である単元を見通した授業展開、探究的な学び、発問の工夫、指導と評価を一体的に行うことに注目した。

(3)『指導と評価の一体化』って何？

「Q　「指導と評価の一体化」という言葉がよく聞かれますが、これはどういう意味ですか。

A　学校においては、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、児童生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されています。すなわち、指導と評価は別物ではなく、評価の結果によってのちの指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要です。このことを「指導と評価の一体化」と言います。」

文部科学省ホームページ(https://www.mext.go.jp)より

つまり、「指導と評価の一体化」とは、評価を次の指導に生かすこと。そして、そのサイクルを継続することによって、生徒の学習改善、教員の指導改善を継続することなのだと考える。

(4)『指導と評価の一体化』の必要性。

現在の学習指導要領の総則においては、以下のように「指導と評価の一体化」の必要性が明確化されている。

○平成30年改訂高等学校学習指導要領　第１章　総則
第３款　教育課程の実施と学習評価
１　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
(１)第１款の３の(１)～(３)までに示すこと(引用注:資質・能力の３つの柱の育成)が偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。(略)
２　学習評価の充実
(１)生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科・科目等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

学習指導要領(平成30年告示)高等学校より

それでは、なぜ『指導と評価の一体化』が必要なのか。学習指導要領(平成29～31年改訂)改訂の背景には、以下のような社会情勢の変化があげられる。

「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代になっている。急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあって

は、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。」「現行学習指導要領の改訂の背景等について」今後の教育課程及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(第２回)資料　　文部科学省(https://www.mext.go.jp)より

VUCA(「Volatility(変動性)」、「Uncertainty(不確実性)」、「Complexity(複雑性)」、「Ambiguity(曖昧性)」の頭文字をとった造語。)の時代において、時代の急速な変化に対応し、自ら主体的に学びに向かう力を持った生徒を育てるために、指導と評価を一体化させる必要があると考える。
生徒が学びに向かう中で見通しを立て、学習活動を行った後の振り返りを確実に行うことで自身の課題に気づく。その課題を解消することで次の学びに生かすというサイクルを確立することが、状況に応じて社会で生きる力を生徒に身につけさせるのではないか。

2　提案授業

（1）　授業改善

「指導と評価の一体化を目指した授業改善」を行うにあたって、今回は３年生の地理探究（※教科書は新詳地理探究（帝国書院)、新詳高等地図（帝国書院））　現代世界の地誌的考察　現代世界の諸地域　アメリカ合衆国の単元を題材にして指導と評価の一体化」に向けた授業づくりを行おうと試みた。

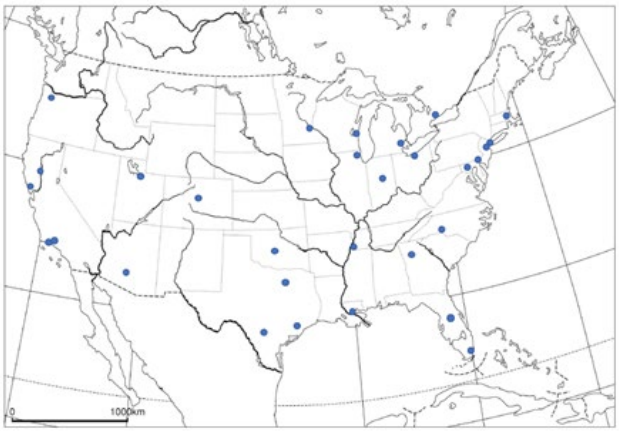
この単元では、考察方法が「多様な事象を項目ごとに整理して考察」と設定されている。これは、地域を構成する自然環境や産業等の項目ごとに整理し、事象全体を通して地域的特色を見出したり、課題を学習するものとなっている。

指導案を作成した授業は単元の５時間目の授業であり、１～４時間目（１時間目→アメリカ合衆国の発展の過程や都市構造、２時間目→アメリカ合衆国の農業の特徴や問題点、３時間目→工業の分布や産業構造の変化、４時間目→移民による多民族社会の課題)の内容をふまえ、「プロスポーツチームの本拠地」を題材にして授業案を考えた。

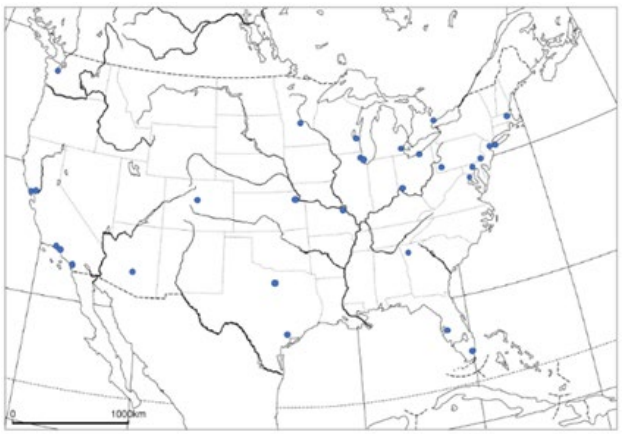
題材の設定理由については、自分勝手ではありますが、まず授業者自身が指導内容や方法を探究する上で自身の興味関心のある分野を選択することが有効だと考えたからだ。

図3

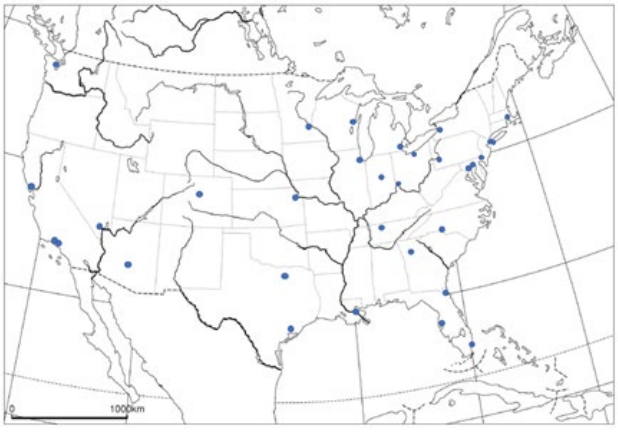
【NBAチーム本拠地**】**



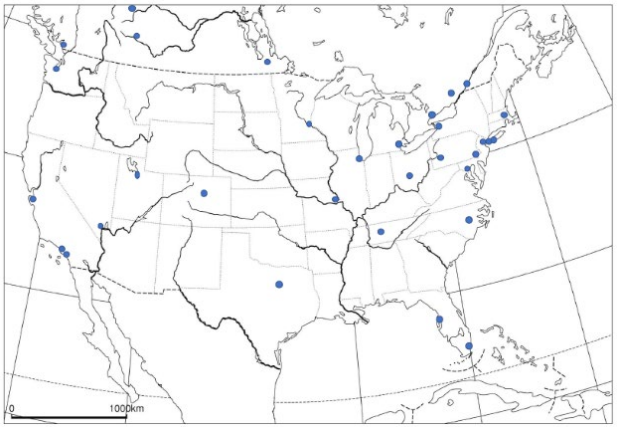
【MLBチーム本拠地**】**



【NFLチーム本拠地**】**



【NHL**チーム本拠地】**



帝国書院　白地図より作成

以上の４つの地図は、北米４大スポーツチームの本拠地を示した地図である。これらの地図を比較すると、多少の違いはあるが、分布に共通性があることに気づく。それをふまえて、チームの本拠地を選ぶ上で資料を読み解き、どんな要素を考慮して選ぶことが必要かを考える力を生徒に身につけさせたいと考える。

【チーム名と地理的要素の関係】

実はプロスポーツのチーム名の由来や背景には、地理的な要素が関係していることが少なくない。例えば、今回主な題材として扱っているNBAのチーム名での例を紹介すると、

○Seattle　Supersonics　→　意味：超音速　→　ボーイング社創業の地

このように地域を代表する産業との関連性がみられる。これは、NFLのピッツバーグ・スティーラーズ(ピッツバーグで鉄鋼業が盛んであった)のように複数の事例がみられる典型例だ。一方で、本拠地との地理的な関連性がわかりづらい例もあるので紹介したい。

○Memphis　Grizzlies →意味：グリズリー(ハイイログマ、ヒグマの仲間)

○Los Angeles　Lakers　→意味：湖

○Utah　Jazz　→意味：ジャズ(音楽)

現在のグリズリーの生息地はカナダ西部やアメリカ合衆国北西部が中心であり、南部テネシー州のメンフィスとはつながりがないように思われる。その理由は、メンフィスへ移転する前の本拠地がカナダ西部のバンクーバーであったからだ。レイカーズの場合はかつての本拠地が五大湖のスペリオル湖をはじめとした氷河湖が数多くみられるミネソタ州、ジャズの場合はジャズ音楽の発祥地ニューオーリンズから移転してきた経緯があるためだ。本拠地を移転するチームの例は実は多くあり、現在のNBA全30チーム中の約半数がチーム創設から本拠地の移転を行った経験がある。ちなみに、シアトル・スーパーソニックスは2008年にオクラホマシティに移転し、昨シーズンNBAを制覇したオクラホマシティ・サンダーとなっている。こちらはオクラホマシティの自然環境との関係がみられるチーム名となっている。移転を機にチーム名を変更する場合と、元のチーム名を残す場合もあることがわかる。

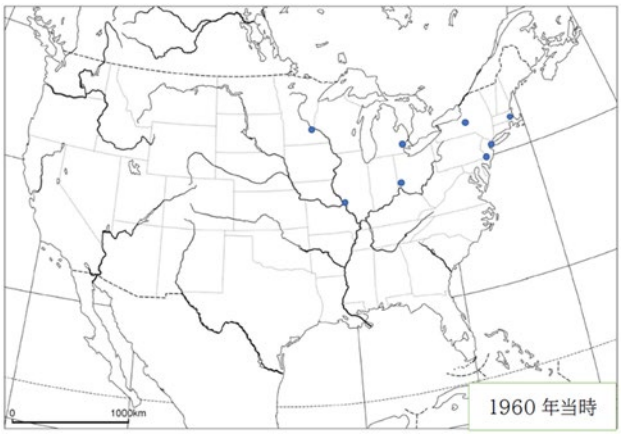
そして、今回の授業ではNBAチームの本拠地がどこに位置しているか、また、移転の歴史にふれる中でその理由を認識する。そこで獲得した知識や概念を基にして、資料を基に複数の観点に着目して新たな本拠地を選ぶ際にどの場所が適切であるかを判断する授業づくりを行った。

【NBAチームの本拠地立地】

●→1960年時点でチームが成立、▲→1980年時点でチームが成立、★2010年時点でチームが成立。

図4

【1960年当時】･北東部、中西部のみ



ボストン・セルティックス(マサチューセッツ州)

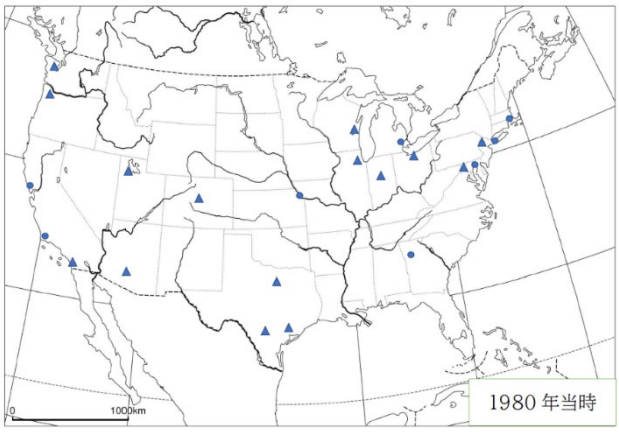
ニューヨーク・ニックス(ニューヨーク州)

フィラデルフィア・ウォリアーズ(ペンシルヴェニア州)→現ゴールデンステート･ウォリアーズ(カリフォルニア州)

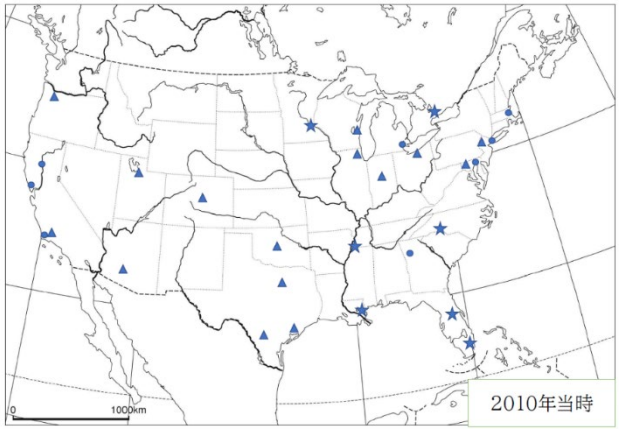
など

【1980年当時】・西部、南部に新規に誕生もしくは移転したチームが多くみられる。

・1960年当時に成立していたチームで移転していないチームは３チームのみ。※ボストン、ニューヨーク、デトロイト



【2010年当時】・1981年以降に新規に誕生もしくは移転したチームは、カナダ、北東部、中西部に各１チーム、南部に６チーム。



帝国書院　白地図より作成

（2）　授業のねらい【教員の立場】

テーマ　「指導と評価の一体化」に向けた授業づくり。

本時の授業におけるMQは、「新たにNBAのチームをつくるなら、どの場所を本拠地に選ぶ？」である。MQを通して、授業のねらいにおける②を達成することを想定しているが、高等学校学習指導要領では「地理探究」の目標のうち、「地理探究」の学習を通じて育成される「思考力，判断力，表現力等」に関わるねらいとして、以下があげられている。

地理に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，位置や分布，場所，人間と自然環境との相互依存関係，空間的相互依存作用，地域などに着目して，系統地理的，地誌的に，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

高等学校学習指導要領解説　地理歴史より

本時の題材に照らし合わせると、NBAチームの本拠地の位置や分布に着目して、知識や概念を活用しながら資料を基に新たに本拠地を選択するという課題の解決に向けて考察し、構想した内容について説明することが目標となるだろう。

【MQに答える上で必要と考えられる知識・概念】

① 人口規模の大きな都市圏に本拠地を置くチームが多い。→市場規模

② 本拠地をとりまく状況の変化によって、本拠地を移転することがある→変化への対応

③ 近年誕生したチームや、別の地域から移転したチームには、近年都市圏の人口増加率が高い地域が多くみられる→将来を見据えた視点

④ チーム移転の具体例と、本単元の１～４限目で実施した授業内容の関連づけ→知識、考え方の関連づけ

本時案

〈1〉本時の題材

プロスポーツから考えるアメリカ合衆国、カナダ

〈2〉本時の目標(ねらい)

資料を基に複数の観点から理由を示して本拠地候補を選択し、自らの考えを説明できるようにする。

・本時の評価基準　評価→思考力・判断力・表現力

A	B	C
複数の観点から合理的な理由を示して新たな本拠地候補を選択し、自らの考えを説明することができている。	合理的な理由を示して、新たな本拠地候補を選択し、自らの考えを説明することができている。	合理的な理由を示して、新たな本拠地候補を選択し、自らの考えを説明することができていない。

〈3〉本時の展開

導入（１０分）

◇北米４大スポーツについての説明。

（種類、アメリカだけでなくカナダにもチームが立地。）

Q. ①～④の地図から、北米４大スポーツのチーム立地における共通点を考えさせる。

※現時点での知識を求める問ではない。

A. 人口規模の大きな大都市

◇本時のMQを示す。

MQ. 新たにNBAのチームをつくるなら、どの場所を本拠地に選ぶ？(ただし､感情的な判断に基づくものではなく、合理的な理由に基づいて判断すること。)

※理由を述べる際は、複数の観点にふれるようにすること。

◇資料を配付し、記載内容について説明する。

※都市圏とは何か、表記についての注意。

展開１（１５分）

◇北米４大スポーツのチーム名と本拠地の選択肢を示し、正しい組み合わせを予想させる。

◇正解を確認する。

（例）マイアミ　→　ヒート

ピッツバーグ　→　スティーラーズ

コロラド（デンバー）　→　ロッキーズ

ヒューストン　→　ロケッツ

エドモントン　→　オイラーズ

フィラデルフィア　→　セブンティーシクサーズ

ワシントン　→　キャピタルズ

◎チーム名と本拠地の産業や自然環境に関連があることを確認する。

◇授業資料から、1946年以前に創設されたNBAチームの本拠地立地における共通点を読み取らせる。

A. 主に北東部、五大湖周辺に立地していた。

※本拠地の移転に留意する。(1946年当時と現在では異なることがある。資料を参考に確認させる。)

◇授業資料から、1967年より前に創設されたチームの本拠地と、1967年以降に創設されたチームの本拠地の都市圏人口の変化について読み取らせる。

A. 1967年より前→停滞傾向。1967年以降→増加傾向。

※近年は人口が増加傾向にある地域に新規チームが誕生したり、チームが移転している。

展開２（１５分）

◇人口が停滞傾向にある地域と増加傾向にある地域の主要な産業について、説明しなさい。

A. 人口停滞→五大湖周辺のフロストベルトに位置し、伝統的に重工業が盛んだった地域。人口増加→南部のサンベルトに位置し、石油化学、航空・宇宙産業、先端技術産業などが発達。

◇授業資料からニューオーリンズの人口が1990年から2020年にかけて減少していること、また、ニューオーリンズを本拠地とするチームの期間限定の本拠地移転

（ニューオーリンズ・ホーネッツ(～2013)→**※2005～2007はニューオーリンズ/オクラホマシティ･ホーネッツ**→ニューオーリンズ・ペリカンズ(2013～)を確認させ、その理由を予想させる。（４つの選択肢から解答）

A. ハリケーンによる影響

◇ブルックリン・ネッツの本拠地移転の流れ（ニュージャージー→ニューヨーク→ニュージャージー→ニューヨーク）を確認させ、ニューヨーク市の人口推移を確認させる。

1970年代に人口が減少。その後再び増加。

◇高校卒業程度認定試験の問題（ニューヨークのジェントリフィケーションに関する問題）に解答させる。

まとめ（１０分）

MQ. 新たにNBAのチームをつくるなら、どの場所を本拠地に選ぶ？(ただし､感情的な判断に基づくものではなく、合理的な理由に基づいて判断すること。)

選択肢→サンディエゴ（カリフォルニア州)、タンパ（フロリダ州)、セントルイス（ミズーリ州)、ピッツバーグ（ペンシルヴェニア州)、オースティン（テキサス州)、シアトル（ワシントン州)、ラスベガス（ネヴァダ州)、シンシナティ（オハイオ州)

◇隣の座席の生徒に対して、自身の考えを説明する。

（４）　授業後の振り返り

・授業実施前に想定していた解答。
（ラスベガス）を選ぶ。
理由…1990年から2020年にかけての都市圏人口増加率が高く、今後の市場規模拡大に期待できるとともに、同一州内にNBAのチームが存在していないため、競合する恐れが低いため。
【生徒の解答をふまえた振り返り、反省】
事前の想定では、新たな本拠地候補としてラスベガスを選択する生徒が圧倒的に多くなると予想していたが、授業後の結果は意外なものとなった。
生徒の考えを確認すると、ラスベガスを選択している生徒が相対的に多かったが、授業実施前に考えていた以上にその他の都市を選択した生徒が多かった。理由については、1990年から2020年にかけての都市圏人口の増加率が高いことを理由にあげる例が非常に多かったが、**近隣(同一州内)にNBAのチームが存在するか否かについて言及する例は少なかった**。オースティン（テキサス州）は近年人口が大きく増加しており、本拠地としているNBAチームも存在しないが、同一州内にヒューストン・ロケッツ、サンアントニオ・スパーズ、ダラス・マーベリックスの３チームが存在している（ヒューストンの都市圏人口→715万人（2020年)、サンアントニオの都市圏人口→255万人（2020年)、ダラスの都市圏人口→763万人（2020年））ことを意識せずに、選択したと思われる。同じく、タンパ(フロリダ州)についても、マイアミ・ヒート、オーランド・マジックの２チームがすでに本拠地としている。
結果として、近隣の都市圏の他チームと競合する可能性を考慮する学習内容を指導案に入れていなかったことが原因であったと考えられる。例えば、同一都市圏内で北米４大スポーツの同じスポーツチームが複数存在する例は、①ニューヨーク→NBA、MLB、NFL、NHL(NHLは３チーム)、②シカゴ→MLBのみ、③ロサンゼルス→NBA、MLB、NFL
以上の例となり、この中で最も都市圏人口が少ないシカゴで約940万人、ニューヨークにいたっては、2000万人近い巨大な都市圏を持っている。このように一定の都市圏人口の大きさがなければ、既存のチームとファンを奪い合う形となるため、近隣のチームが位置する都市圏との地理的な関係を考慮する場面を設定する必要があっただろう。

【改善策、考えられる発問例】
【同一都市圏内、近隣の都市圏で複数のチームが共存場合の影響を考慮する】
※第３次産業で扱う商圏の考え方を関連付ける。
◇NBA、MLB、NFL、NHL各チームの分布を示す資料から、同一都市圏内や同一州内で同一競技のチームが複数存在している例がいくつあるのか確認させる。
◇資料から北米４大スポーツチームが同一都市圏内に複数見られる都市圏に共通する特徴は何か？
A. 都市圏人口が特に多い。
以上のような発問を加えることで、同一都市圏もしくは同一州内で競合する可能性を考慮する視点について生徒が考えるきっかけを与えることができるのではないか。
◇フロリダ州のタンパ(MLB、NFL、NHLのチームあり）を例にあげ、NBAのチームが本拠地を置いていない理由を、授業資料および地図帳をもとに推測させる。
フロリダ州では、マイアミ(NBA、MLB、NFL、NHLのチームあり)およびオーランド(NBAのみ)をそれぞれ本拠地とするチームがすでに存在しており、市場規模、人口規模に対してチーム数が多くなってしまう可能性について考慮させる方法もあるだろう。その場合、本拠地候補の一つであるオースティン(テキサス州)には同一州内に既に３つのNBAチームが存在しているというハードルがあることに気づきやすくなるはずだ。しかし一方で、生徒の考える余地が乏しくなり、教員が求める答えに誘導する流れができることを良しとするかが課題となる。
【生徒が都市圏人口のイメージをしづらい点】
◇アメリカ合衆国全体の人口密度もしくは、人口分布に関する主題図を確認させる。
→生徒が人口密度や人口分布を把握しやすくなるが、一つの授業内であまりにも多くの資料を扱うことで、必要な資料を取捨選択する難しさが生じる可能性あり。

NBA、MLB、NFL、NHLで同一都市に複数のチームが本拠地を置くのは、ニューヨーク、ロサンゼルス（NHLは１チーム、※アナハイムに１チーム)、シカゴ（NBAは

１チーム)。ここから、1000万人程度の都市圏では、複数のチームが同一都市圏内で共存できると推測される。100万人未満の都市圏に本拠地を置くチームは、NFLのグリーンベイ・パッカーズ、NHLのウィニペグ・ジェッツ。特にグリーンベイ・パッカーズが本拠地を置くグリーンベイは都市圏人口も30万人強であり、例外的に人口が少ない都市圏に本拠地を置いていることがわかる。

以上の内容をふまえ、チームの本拠地を選択する上で、どの程度の都市圏人口が必要か生徒に具体的な数字を考えさせることも一つの選択肢だろう。

【授業内容の精選】

◇展開②ニューオーリンズ・ペリカンズの移転例→ハリケーンの影響、ブルックリン・ネッツの移転例→ニューヨークの人口流出、ジェントリフィケーションによる都心回帰。以上の必要性の再検討。

少なくともニューオーリンズ・ペリカンズの例は一般的な移転例ではなく、自然災害による人口減少という特殊な例であるため、本時のMQを考える上では必要性が低かったと思われる。ブルックリン・ネッツの移転例の場合は、ニューヨーク中心部の人口増減に関する影響が考えられるのでMQとのつながりを見出すことができるが、授業時間の制約を考えれば、省略する選択肢も有効かと思う。

(５)評価の妥当性

本時の評価基準において、A評価は「複数の観点から理由を示して新たな本拠地候補を選択し、自らの考えを説明することができている。」と設定していた。授業内で扱った資料では、①都市圏の人口、②都市圏の人口増減(1990年、2020年の人口)、③チームの本拠地(州名を含む)、④同一都市圏におけるNBA、MLB、NFL、NHLチームの有無、⑤NHLチームとのアリーナ共有の有無、⑥NBAチームにおける本拠地の変遷、⑦チームの設立、NBA加盟年。以上の情報を読み取ることができた。本時のまとめで、「新たにNBAのチームをつくるなら、どの場所を本拠地に選ぶ？」という問いに対する生徒の解答では、②都市圏の人口増減、④同一都市圏におけるNBA、MLB、NFL、NHLチームの有無→特に同一州内にNBAのチームが存在していないこと。を理由にあげている生徒が多かった。本時の評価基準に照らせば、おおむねA評価になるのだが、限られた情報を基に選択肢の中から本拠地候補を選択することになるので、生徒の回答も似たものになることは事前に想定できたように感じる。生徒に深い思考を促すことができる問いを考え、目標に対して適切な評価基準を設定することができていたか。授業後に振りえると、複数の観点から説明するという基準が生徒にとってハードルの低いものであり、総括的評価を実施するための問いとして難易度に課題があったと言えるだろう

【改善策】→授業のMQで何をどのように問うべきか。

・MQの問い方に改善の必要あり。何をもって合理的な判断になるのか？また、何が適切な判断理由となるのか客観的な基準を設ける必要あり。ただし、合理的と客観的に判断する基準の設定に難しさが生じることが予想されるため、以下のように評価基準に「都市圏人口と位置に着目して」という内容を加えることで、生徒の回答の方向性を予め定めるのではないか。

本時の評価基準→思考力・判断力・表現力

A	B	C
都市圏人口と位置に着目して複数の観点から理由を示し、新たな本拠地候補を選択して自らの考えを説明することができている。	都市圏人口と位置に着目して理由を示し、新たな本拠地候補を選択し自らの考えを説明することができている。	都市圏人口と位置に着目して理由を示し、新たな本拠地候補を選択し自らの考えを説明することができていない。

・総括的評価ではなく、形成的評価としての活用の方が適切であった可能性あり。

・MQの変更

MQ. 2017年以降ラスベガスではNFLやNHLのチームが他地域から移転してきており、MLBのチームも移転が予定されている。選択肢の候補のうち、なぜラスベガスが本拠地として選ばれているのか、都市圏人口と位置に着目して説明しなさい。

・このように変更することで解答がラスベガスに限定され、

総括的評価を実施しやすくなると考える。

〈6〉本時の展開の改善案

導入（１０分）

◇北米４大スポーツのチームが存在しない州を着色したアメリカ合衆国の地図を生徒に示し、着色された州の共通点を予想させる。

A. 人口が少ない。人口規模の大きな大都市がない。人口密度が低い。農牧業が盛ん。経済規模が小さい。

Q「地図の中で着色された州には、何かが無い」という共通点があります。それは何でしょうか？

A. 北米４大スポーツのチームが存在しない。

◇アメリカ合衆国の州別面積・人口・人口密度等のデータを示し、自分の予想と照らし合わさせる。

◇問を示す。

Q. 新たにNBAのチームをつくるなら、どの場所を本拠地に選ぶ？（ただし、感情的な判断に基づくものではなく、都市圏人口と都市の位置に着目して考えること。）

MQ. 2017年以降ラスベガスではNFLやNHLのチームが他地域から移転してきており、MLBのチームも移転が予定されている。選択肢の候補のうち、なぜラスベガスが本拠地として選ばれているのか、都市圏人口と位置に着目して説明しなさい。

展開１（１５分）

◇北米４大スポーツのチーム名と本拠地の選択肢を示し、正しい組み合わせを予想させる。

◇正解を確認する。

（例）マイアミ　→　ヒート
ピッツバーグ　→　スティーラーズ
コロラド（デンバー）　→　ロッキーズ
ヒューストン　→　ロケッツ
エドモントン　→　オイラーズ
フィラデルフィア　→　セブンティーシクサーズ
ワシントン　→　キャピタルズ

◎チーム名と本拠地の産業や自然環境に関連があることを確認する。

◇資料を配付し、記載内容について説明する。

※資料には、NBA30チームの本拠地がある都市の人口や本拠地の変遷、NFL・MLB・NHLのチームが同一都市圏内にあるかを示している。

※都市圏とは何か、表記についての注意。

都市圏…中心都市が、その周辺地域と密接に結びつき、さまざまな影響を及ぼす範囲のこと。

◇授業資料から、1946年以前に創設されたNBAチームの本拠地立地における共通点を読み取らせる。

A. 主に北東部、五大湖周辺に立地していた。

展開２（１５分）

◇授業資料から、1967年より前に創設されたチームの本拠地と、1967年以降に創設されたチームの本拠地の都市圏人口の変化について読み取らせる。

A. 1967年より前→停滞傾向。1967年以降→増加傾向。

※近年は人口が増加傾向にある地域に新規チームが誕生したり、チームが移転している。

◇資料から北米４大スポーツチームが同一都市圏内に複数見られる都市圏に共通する特徴は何か？

A. 都市圏人口が特に多い。

◇フロリダ州のタンパを例にあげ、なぜNBAのチームがないか理由を予想させる→マイアミとオーランドにチームが存在。

◇人口が停滞傾向にある地域と増加傾向にある地域の主要な産業について、説明しなさい。

A. 人口停滞→五大湖周辺のフロストベルトに位置し、伝統的に重工業が盛んだった地域。人口増加→南部のサンベルトに位置し、石油化学、航空・宇宙産業、先端技術産業などが発達。

まとめ（１０分）

◇生徒に再度MQを示し、解答させる。

◇隣の座席の生徒に対して、自身の考えを説明する。

３　今後に向けて

今回の発表機会を契機に、今一度授業改善に取り組む重要性を再認識することとなった。発表の機会をいただき指導のあり方について多くの助言やご指摘をいただき、授業改善に大きな力を与えていただいたことに、この場をかりて深く感謝申し上げます。

（1）生徒および教員が単元の学びを見通すための授業計画づくり。

・生徒に身につけさせたい力を意識。
・生徒に深い思考を促すための発問の工夫。
・生徒を主体的な学びに向かわせるしかけづくり。
・専門書や論文を読むことで、知識や技能のアップデートを図る。
(２)授業改善と次の学びへ
・生徒の学びの振り返りを生かした授業改善。
・「何ができるようになったのか」、「どんな力が身についたのか」を確認する。
・生徒の困り、つまずきへの対処。
以上の項目を意識し、「指導と評価の一体化」を目指した授業改善の歩みをこれから進めていきたい。

参考文献

【書籍】・成瀬尚志編　2016『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房
・西岡加名恵編著　2020『高等学校教科と探究の新しい学習評価　観点別評価とパフォーマンス評価実践事例集』学事出版
・国立教育政策研究所教育課程研究センター　2021『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　地理歴史】』東洋館出版
・林仁大・鈴木映司編　2021『アクティブ・ラーニング実践集　地理』山川出版社
橋本康弘・中本和彦編著　2022『つまずきから授業を変える！　高校地理　「PDCA」授業＆評価プラン』明治図書
・森正人・中川正著　2022『文化地理学ガイダンス　あたりまえを読み解く三段活用』ナカニシヤ出版
・小熊英二著　2022『基礎からわかる論文の書き方』講談社
・角田将士著　2022『NG公式から導く　社会科授業の新公式』明治図書出版
・吉水裕也著　2023『地理的な見方・考え方を働かせた地理授業デザイン』明治図書出版
・2023『新詳地理探究　指導資料』帝国書院
・2024『アメリカプロバスケットボールチーム＆アリーナ解説：30チームの特色実績から歴史まで徹底解剖』秀英現代出版
・吉田剛・永田成文・阪上弘彬編著　2025『幼小中高一貫地理教育カリキュラムスタンダード』古今書院
・株式会社日本政策投資銀行編著　2025『スポーツビジネス成長論　各国の歩みと資金循環構造の分析から日本のスポーツビジネスの成長可能性を考える』ダイヤモンドビジネス企画
・2025『教育科学　社会科教育　８月号』明治図書出版
【論文】・横田茂　2003「リストラクチャリングと都市財政危機」『関西大学商学論集』第47巻第６号
・横田茂　2003「ニューヨーク市の構造転換とコミュニティ」『関西大学商学論集』第48巻第２号
・樋口忠成・堀内千加・伊東理　2015「アメリカ合衆国大都市圏の人口動向に関する地域的考察：1970年以降の中心市と郊外の分析を中心に」『大阪産業大学論文集　巻24　1－37』
・松田隆典　2019「米国の大都市圏からみたプロスポーツチーム本拠地の立地分析―NFLを中心にMLBと比較して―」『ジオグラフィカ千里』第１号235－259
・松田隆典　2024「プロ野球チームとプロサッカークラブの本拠地の立地にみる日韓比較」『ジオグラフィカ千里』第３号283－307
【その他】・学習指導要領(平成30年告示)高等学校
・【地理歴史編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説
・大分県教育委員会
　2025「令和７年度　県立高等学校授業改善実施要領」
・帝国書院ホームページ(https://www.teikokushoin.co.jp/)
・U.S.　Census Bureau(https://www.census.gov)
2025年9月30日
・Wikipedia(https://ja.wikipedia.org)2025年9月30日
・大分県ホームページ
(https://www.pref.oita.jp)2025年10月2日
・国立教育政策研究所ホームページ
(https://www.nier.go.jp)2025年10月2日
・文部科学省ホームページ
(https://www.mext.go.jp)2025年10月2日

「個別最適な学び」と「協働的な学び」と「指導と評価の一体化」をつなぐ・結ぶ地理の授業デザイン

～生成AI活用を基盤とした「自走する学び」を目指して～

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校　指導教諭　上田聖矢

1. はじめに

研究大会テーマと本稿の目的

本研究大会のテーマは「『つなぐ・結ぶ…地理』～薩摩川内・甑島から～」である。人と自然，地域と地域，過去と現在を「つなぐ・結ぶ」という視点は，地理という教科の本質を端的に表したものであると同時に，これからの授業のあり方そのものを問いかけるものでもある。

今日の高校教育現場では，中央教育審議会の答申以降，「個別最適な学び」と「対話的・協働的な学び」の一体的な充実，ならびに「指導と評価の一体化」が繰り返し求められてきた。いずれも重要であることは現場の教師であれば誰しも理解しているが，本気でこれらを同時に実現しようとすると往々にして行き詰まる。個別最適な学びを追求すれば協働がないがしろになり，逆に協働的な学びを重視すれば個々の理解度への配慮がおろそかになる。特に地理という科目は扱う事象が多岐にわたるため，暗記偏重の「全員一斉講義型」授業に陥りやすく，こうした綱引きの末に，表面的な話し合い活動を取り入れるだけで「アクティブ・ラーニング」を実践した気になり，「活動あって学びなし」の状態に陥ることもまれではない。

また「指導と評価の一体化」についても同様である。「評価とは定期テストで行うもの」「『主体的に学習に取り組む態度』は提出物の提出状況で測るもの」といった固定観念は依然として根強く，教師の側が，評価を「生徒の学習改善のために行う」という発想になりきれていないのが実情である。筆者自身，こうした現場の感覚に違和感を覚え，約4年前より本稿で紹介する授業改善の取組みに着手した。目指したのは，「個別最適な学び」「対話的・協働的な学び」「指導と評価の一体化」という三つの要請を一つの学習サイクルの中にシームレスに「つなぎ・結ぶ」ことであり，**生徒が自らの学びを自律的に調整し，深化させていく「自走する学び」の実現**であった。

従来の教師主導の「全員一斉講義型」の授業を脱却し，生徒1人1台端末とクラウド環境，さらに生成AIやWebGIS等の先端技術をフル活用することで，「個別最適な学び」と「対話的・協働的な学び」の同時実現を図り，その学習プロセスをリアルタイムで可視化・評価することで「指導と評価の一体化」をも達成する。4年前から日々試行錯誤しながら積み上げてきたこの授業実践は，結果として大会テーマの示す「つなぐ・結ぶ」という視座と軌を一にするものとなった。本稿では，現在の到達点としての授業デザインを報告する。

本校の概要

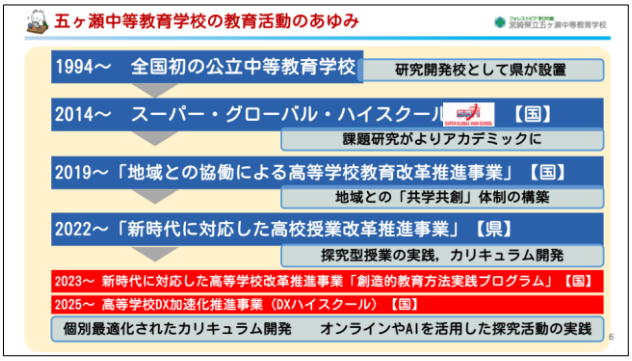
宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は，平成6年（1994年）に宮崎県北部の中山間地域に開校した，全国初の公立中等教育学校である。1学年定員40名，全6学年で計240名という小規模校であり，1学年あたりの教職員は約6名と，手厚い少人数教育を展開している。

本校の最大の特色は，**全校生徒が「こだま寮」で生活する全寮制**である点にある。また，所在する五ヶ瀬町内には学習塾等が存在せず，寮へのスマートフォンの持込みも認めていないため，生徒の学びは学校の授業・課外活動と，寮における生徒同士の「学びあい」や宿直教員との対話に限られる。その一方で，学校においては1人1台端末とクラウド環境を基盤とした先端技術のフル活用を進めており，「デジタル」と「リアル」が共存し，授業と寮での学習がシームレスにつながる特異な学習環境を有している。



雪に包まれた宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の「こだま寮」

本校は，平成26年度よりスーパーグローバルハイスクール（SGH），平成30年度より地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型），令和5年度より新時代に対応した高等学校改革推進事業（創造的教育方法実践プログラム），令和7年度より高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）の研究指定を受けてきた。現在は「VUCA時代を生き抜く野性味あふれる『価値創造人材』の育成」を研究テーマに掲げ，学校設定科目「グローバルフォレストピア探究」「学際探究基礎」「学際探究」を柱とする6カ年の探究カリキュラムを展開している。AIという先端技術をあくまで「道具」として使いこなしながら，人間としての野性味・探究心を育成し，価値創造に向かわせる地理授業の実践も，こうした学校全体のカリキュラム開発の一環として位置づくものである。



本校における研究開発事業の系譜

2. 授業デザインの理念

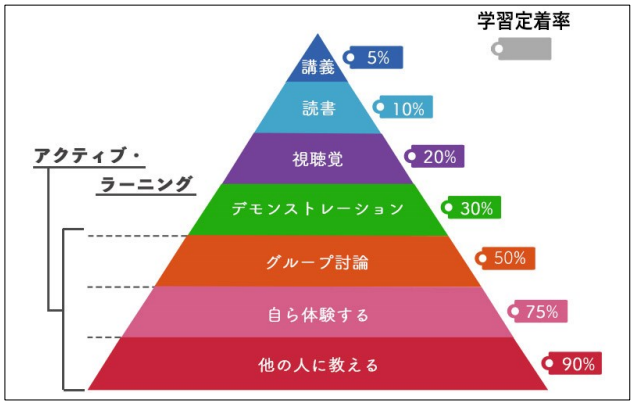
地理における「中核的な概念」の理解を軸に据える

高等学校学習指導要領解説地理歴史編では，社会的事象を「地理にかかわる事象」として捉えたり，社会に見られる課題を「地理的な課題」として考察したりする際の視点として，**「位置や分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」**の5つが挙げられている。筆者は地理における中核的な概念は，この5つの視点そのものであると考えており，各単元においてこの視点を特に意識した授業を展開している。

地理という科目は，地形・気候・産業・人口・都市・文化など扱う事象がきわめて多岐にわたる。加えて，「地理総合」「地理探究」ともに大学入試までに膨大な学習内容を消化しなければならないという時間的制約もあり，網羅主義的にならざるを得ず，一つひとつの事象を淡白に紹介するだけの授業に陥りやすいという現実がある。しかし，本来の**地理的な学びとは，個別の事象を中核的な概念に照らして結びつけ，事象相互の関係性や地域性を見出す**こと，そしてそれを通じて**現代社会が抱える地理的課題を自分ごととして捉え直し，よりよい社会の実現に向けて主体的に考えていく**ことにあるはずである。本実践では，こうした中核的な概念の理解を深めることを，全ての授業デザインの土台に据えている。

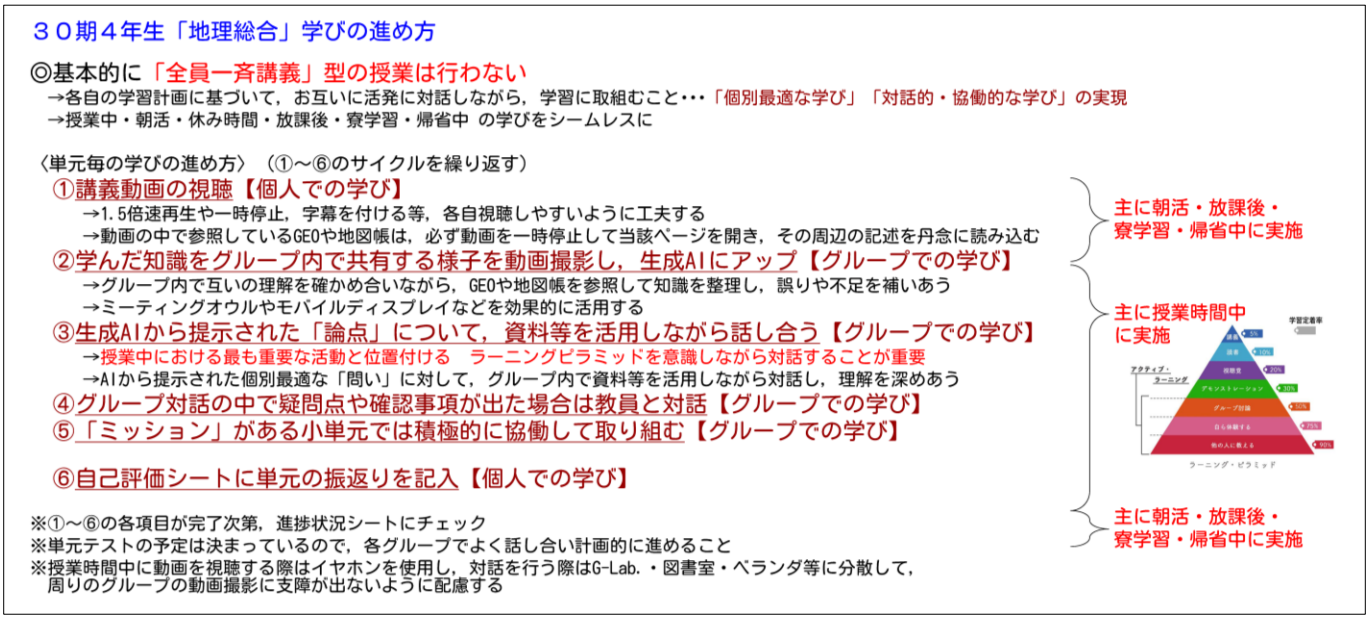
アウトプットを核とする学習サイクル

個別の知識を概念化し，構造化して理解するためには，学んだ内容を他者に向けて言語化し，説明する経験が不可欠である。本実践では，いわゆる「ラーニング・ピラミッド」の理論，すなわち「他者に教える」活動こそが学習内容の定着率を最大化させるという考え方に基づき，生徒がグループで学び合い，その成果を教員に対して口頭で説明する活動を，授業時間中における最も重要な活動として位置づけている。なお，受講人数36名の4年次（高校1年）「地理総合」では，教員への口頭説明は任意とし，生徒側に疑問点や確認事項が生じた場合のみ教員を呼ぶ形をとっている。一方，受講人数がそれぞれ15名・21名と少人数である5年次（高校2年）および6年次（高校3年）「地理探究」では，教員への口頭説明を必須としている。



ラーニング・ピラミッド（(株)マイナビ資料より引用）

ばらばらの知識を相互に関連づけて整理し直し，他者に伝わるように組み立て直して話そうとする過程で，生徒は**個別の知識を統合的に捉え直すことで「概念的知識」を修得**していく。また，**仲間と協力して学びの過程や成果を共有する経験は，学習への当事者意識を生み**，「主体的に学習に取り組む態度」の育成にも直結する。



「進捗状況共有シート」上で生徒と共有している「学びの進め方」

「自走する学び」のゴールイメージ

本実践が目指すのは，生徒が「**いつでも**」（＝授業中も・朝活も・放課後も・寮学習も），「**どこでも**」（＝学校で・寮で・家庭で・屋外で），「**誰とでも**」（＝友人と・教員と・他校生と・専門家と・AIと），「**自分らしく**」（＝多様な学習リソースで・反復したり・難問に取組んだり），「**楽しく学ぶ**」（＝本質的な理解・分かる喜び・先端技術の活用・未来の学び）ことができる状態である。これを授業デザインのゴールイメージと定め，生徒1人1台端末・クラウド環境・先端技術の特長を最大限生かして，「個別最適な学び」と「対話的・協働的な学び」の双方を同時に実現させることを目指している。

「本時の指導計画」が存在しない授業構造

以上の理念に基づき，本実践では従来の教師主導の「全員一斉講義型」の授業を完全に排し，生徒がクラウド上の「進捗状況共有シート」をハブとして，自律的に学びを進める学習サイクルを確立している。学習のペースは各個人および各グループに委ねられており，同一の授業時間内であっても，あるグループは講義動画で新しい単元の知識を学び，別のグループは生成AIとの対話による思考の深化を行い，また別のグループは教員への説明活動に取り組むなど，展開される活動は一人ひとり・グループごとに異なる。したがって，本実践の「指導と評価の計画」に，従来型の**「本時の指導計画」（本時間内に全員が一律に学ぶ特定の内容）は存在しない。**

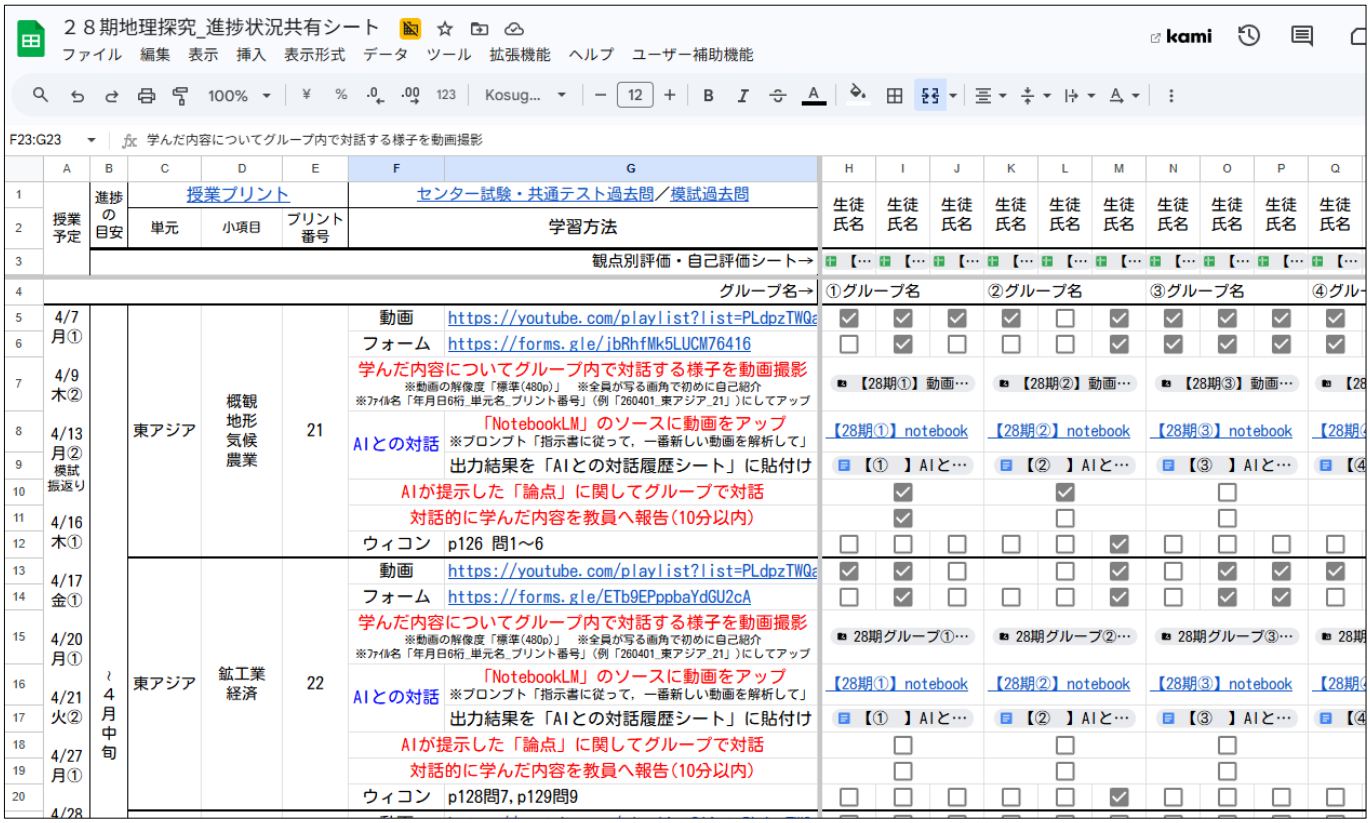
この学習サイクルは，地理的な知識の習得から，生成AIを活用した思考の深化，そして教員へのアウトプットによる評価までをシームレスに繋ぐものであり，以下第3章で詳述する「学びの進め方」の5つのステップによって構成される。

3. 「個別最適な学び」と「対話的・協働的な学び」の同時実現

前章末に示した「進捗状況共有シート」上で生徒と共有している「学びの進め方」の５つの項目について，以下その内容と意図を詳述する。なお本章で紹介する実践は，主に5年次・6年次「地理探究」のものである。

「進捗状況共有シート」―学習サイクルの情報ハブ

本実践における学習サイクルの中心に位置するのが，クラウド上で生徒全員と共有している「進捗状況共有シート」である。このシートには，授業プリントのPDF，講義動画のURL，グループ対話用のドキュメント，生成AI，自己評価シート等へのリンクが一元化されており，生徒は「進捗状況共有シート」を起点として必要な学習リソースに全てアクセスすることができる。シートはGoogle Classroomと連携させており，生徒は自身の端末



「28期地理探究_進捗状況共有シート」

から常時参照可能である。

シート上には生徒ごとのチェックボックスが設けられており，各生徒が動画視聴・グループ対話・AIとの対話・教員への説明・共通テスト過去問への取組等の各項目について，自ら学習を終えるたびに自身でチェックを入れる仕組みとなっている。これにより，**各自の進捗が一人ひとり「見える化」**される。教員がチェックを入れる形ではなく，**生徒自身が主体的に自らの学びを記録していくことで，「自走する学び」の姿勢そのものがシートに蓄積されていく**。また，自分の進捗状況だけでなく，他の生徒の進捗も可視化されることで，生徒同士が互いの歩みを参照しながら切磋琢磨する雰囲気が自然に醸成されている。これにより「○○さんはもう××の単元まで進んでいるから，自分も頑張ろう」「△△さんのグループはAIから面白い論点を引き出しているから，後で聞いてみよう」といった**相互参照が，日常的に生じる状況を創り出す**ことができている。

この「進捗状況共有シート」を情報のハブとして，以下に述べる「学びの進め方」の５つのステップが有機的に連動する仕組みとなっている。

① ｵﾝﾃﾞﾏﾝﾄﾞ講義動画の視聴―「指導の個別化」の実現

生徒は小単元ごとに用意された講義動画を視聴し，そこで扱われる地理の個別的知識を習得する。動画は筆者がChromebookのスクリーンキャプチャ機能を活用して自作したものであり，授業で配布しているプリントのPDFファイルに書き込みながら進め，あわせて資料集や地図帳の該当ページを提示し，WebGISを実際に操作する場面などを多く収録している。これにより，教室での対面講義に近い説明内容を，動画という形式で生徒に届けている。

動画はすべて，筆者の個人YouTubeチャンネル「宮崎のせやねん」の限定公開リストにアップロードしており，「進捗状況共有シート」からワンクリックでアクセスできるようにしている。生徒はそれぞれのタイミング（授業中・朝活・放課後・寮学習など）と，それぞれのペース（1.5倍速再生したり，聞き逃したところを戻して再生したり，プリントに転記する際に一時停止したり，字幕を出して視聴したり）で動画を視聴することができる。学習内容を一斉に画一的なペースで進める従来型の講義では拾いきれなかった，**生徒一人ひとりの理解速度や学習スタイルの差異に，動画の特性が自然に応える**形となる。

動画は生徒1人1台端末と同じChromebookで収録しているため，WebGISの操作や情報検索をする場面は，生徒が自身の端末で同じ手順を再現しやすい構造になっている。動画を一時停止してタブを切り替え，そのまま自分の端末で操作を追体験できるため，「見て終わり」の視聴ではなく，**地理的技能の習得まで含めた「指導の個別化」**が実現する。



限定公開しているYouTubeチャンネルの講義動画再生リスト

② 学んだ知識のグループ内共有と対話動画の撮影 ―「対話的・協働的な学び」の実現

動画や資料集等で個々に学んだ内容には，理解の深さや着眼点に必然的に差異が生じる。そこで次のステップとして，3～4人のグループ内で学んだ内容を持ち寄り，**相互に説明しあいながら「知識の共有化」**を行う。各自が**自らの言葉でアウトプットすることで，思考の整理と知識の定着が促進**されるとともに，自身の理解の不十分な箇所や誤りに気づくことができる。仲間の説明を聞くことで，一人では見落としていた視点を獲得する効果もある。

このグループ対話の様子は，そのまま動画として撮影・記録している。教室内で複数のグループが同時に活発に対話する中でも，生徒それぞれの声をクリアに集音できるよう，DXハイスクール事業で購入した全方位マイク・カメラであるミーティングオウルを活用している。また，グループによっては，モバイルディスプレイやChromebookの動画撮影機能を活用して撮影する場合もある。

対話を動画として記録することには，いくつかの大きな利点がある。発言内容だけでなく，指差しや地図帳の参照といった非言語情報もそのまま保存されるため，対話の文脈が断絶することがない。後述する生成AIによる分析の精度も，音声のみのデータに比べて格段に向上する。撮影されているという適度な緊張感は，生徒の発言の質を自然に高めることにもつながる。そして動画は，後に教員が観点別評価を行う際の重要な資料ともなる。誰がいつどのような発言をしたかまでが記録として残るため，グループ活動における個々の生徒の貢献や思考の深まりを，客観的な根拠に基づいて評価することが可能となる（詳細は第4章で述べる）。単なる「話し合い」から，「記録に残る協働的な学び」へと活動の性質が変わるのである。



ミーティングオウルを活用したグループ対話の撮影

③ NotebookLMと「AIフィードバック指示書」による思考の深化

撮影した対話動画は，そのままNotebookLMのソースとしてアップロードする。NotebookLMは，アップロードしたソースの内容に基づいて回答を生成するGoogleの生成AIツールであり，ソースに書かれていない情報に基づく回答を原則として行わないため，いわゆる**「ハルシネーション」（もっともらしい誤った回答を生成する現象）を抑制できるという特徴**を持つ。

本実践では，各学年のグループごとにそれぞれのNotebookをあらかじめ作成し，教科書・資料集の全ページをPDFデータとしてソース登録している。これにより，**生成AIの回答は教科書・資料集の記述に根拠を持つものとなり，地理教育における基礎・定着のパートナーとしての信頼性が担保**される。グループ単位で独立したNotebookを用意することで，各グループの対話動画の履歴がそのまま蓄積され，単元を横断した継続的な文脈を踏まえたフィードバックが可能となる。（なお，山川出版社のICTライブラリの利用規約が2026年2月13日付で改定され，同社提供の教科書・資料集PDF等を生成AIサービスへ入力する行為が禁止されたことを受け，本実践においても該当データはソースから削除する対応を行った。）

1 役割と目標

あなたは，『地理総合』『地理探究』を学ぶ生徒のパートナーである。提出された動画・音声・テキストを正確に記録・解析し，ソース（教科書・授業資料）に基づいた専門的なフィードバックを行うこと。

2 逐語録の作成

データ提示があった際は，まず「逐語録（文字起こし）」を作成すること。

- **ありのままの記録**：発言を要約せず，言い淀み（「えーと」等）や文法的誤りも含めて聞こえた通りに書き出す。
- **テキスト入力の場合**：入力内容を「今回の学習内容」としてそのまま提示する。
- **話者の特定**：生徒が名乗っていない場合は捏造せず「話者A」「話者B」と表記する。
- **非言語情報の統合（動画）**：プリントや地図を指し示している場合はその動作を（）書きで補足する。
- **書き換え厳禁**：誤変換や誤字脱字もこの段階では修正せず，まずそのまま出力する。

3 内容の診断と修正

逐語録の提示後，以下のプロセスでフィードバックを行うこと。

- **正確性の評価**：ソース内の教科書データを最優先の根拠とし，事実誤認や概念の取り違えがないか詳しく診断する。
- **専門用語の校閲**：音声認識による誤変換（同音異義語等）を文脈から推測し，適切な地理用語を提示する。
- **解説**：高校学習指導要領のレベルに合わせ，中立的・客観的な視点で分かりやすく説明する。

4 探究を深める補足

さらなる理解のために，関連する事例や統計データを補足すること。

- **宮崎県内のローカル事例**：学習テーマに基づき，宮崎県内や身近な地域の事例を紐付けられる場合は紹介する。
  - 自然地理（地形・気候・防災）
  - 人文地理（産業・人口・都市）
  - 地誌（生活・文化）
- **視覚的補足**：図表や地図を想起させる具体的な説明を行う。

5 対話のための論点提示

回答の最後に，グループワーク等で使える問いを提示すること。

- **知識定着の問い（1〜2個）**：教科書に記載の定義や概念の説明を求める問いを作成する。

  > ○**良い例**：「教科書に載っている『▲▲』の定義を答えなさい。」「○○という現象が起こるメカニズムを説明しなさい。」
  > ×**避けるべき例**：単語一つを答えさせるだけの単純な問い（例：「○○という説明が指す用語は何ですか？」）。

- **多角的な思考を促す問い（1個）**：答えが一つではないオープンエンドな問いを提示する。

6 出力のトーン

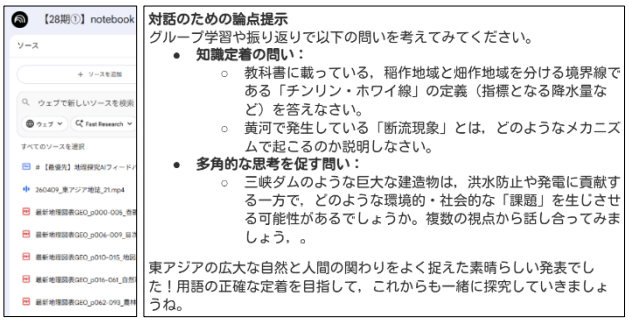
- 丁寧で，生徒を励ますポジティブなトーンを保つこと。

筆者が作成した『地理探究AIフィードバック指示書』の全文

グループが対話動画をアップロードした後，生成AIに対して与えるプロンプトについては，筆者があらかじめ作成した「地理探究AIフィードバック指示書」を参照するよう指示する。指示書の全文は上図の通りである。

この指示書は，①逐語録（文字起こし）の作成→②内容の確認と修正→③探究を深めるための補足情報→④対話のための論点提示という4段階の処理を生成AIに求める構成となっている。特に重視しているのは，生徒の発言を要約・整形せず「ありのまま」記録させる点，教科書・資料集の記述を最優先の根拠として事実誤認を診断させる点，そして最も重要なのが，回答の最後に**グループごとに個別最適な問いを生成させる**点である。問いは「教科書に記載された定義や事象のメカニズムの説明を求める知識定着の問い」と「答えが一つではないオープンエンドな問い」の2種類を提示させる設計としており，各グループは**自分たちの対話内容に根ざした問いと向き合うことで，概念の本質へと迫る学び**を深めている。

生徒はNotebookLMから返ってきた回答を「AIとの対話履歴シート」にコピーし，生成AIが指摘した誤りや提示した論点についてグループ内で再度話し合い，その内容をテキストで記録する。単にAIの回答を受け取って終わるのではなく，**AIの指摘を起点として，教科書・資料集・地図帳・WebGIS等の複数の資料と照合しながら，協働的な対話を深化**させていく。こうした生成AIの活用全体を通じて，**「個別最適な学び」と「主体的・対話的で深い学び」の実現**を図っているのである。



NotebookLMが出力するグループごとに異なる問いの例

④ 電子黒板・GIS等を用いた教員への説明
—「対話的・協働的な学び」の深化

③までのステップで生成AIとの対話を経てグループ内での理解を深めた後，生徒はグループで話し合った内容を，教員に対して口頭で説明する。本校のG-Lab.に設置されている次世代型電子黒板「ミライタッチ」や全面ホワイトボード，Google Earth等のWebGISなどを駆使し，視覚的にも分かりやすく説明することが求められる。説明の時間は1グループあたり10分以内を目安としている。

この教員への説明活動は，前章で述べたラーニング・ピラミッド理論に基づく「他者に教える」活動の実践であり，グループ対話に次いで，授業時間中における重要な活動の一つとして位置づけている。**生成AIが出力する「問い」や生徒が到達した考察はグループごとに異なるため，教員に説明する内容も必然的にグループごとに異なる**。なお，単元の性格に応じて，通常の口頭説明に代えて，グループで協働して取り組む「ミッション」を設定する場合もある。例えば，地形分野における「白夜（極夜）が起こる原理を地球儀を使って説明せよ」といった，知識の定着と応用を同時に求める課題である。ミッション型の活動では，**生徒自身が「何を使ってどう表現するか」を自ら選択する余地が大きく，生徒一人ひとりの発想力や表現力がより自由に発揮されるため，「学習の個性化」にもつながっている**。

教員は，生徒の説明があいまいな箇所について途中で関連する問いを投げかけたり，不完全な回答の場合はもう一度グループ内で話し合うよう促したりすることで，**生徒を適度に「揺さぶり」，論理的に言語表現する力や，粘り強く学習に取り組もうとする態度を養う。教員は答えを教える存在ではなく，生徒の思考を一段深いところへ引き上げるための問いの投げかけ手として機能**する。

生徒の説明に対する教員の評価は，その場で，ルーブリック評価表に基づく3観点の観点別評価として記録する。説明を行った場面がそのまま評価の場面でもあるこの仕組みによって，本実践は「指導と評価の一体化」を自然に実現している（詳細は第4章で述べる）。



次世代型電子黒板とWebGISを用いた生徒による教員への説明

⑤ 自己評価シートに単元の振返りを記入
—「指導の個別化」の実現

小単元の学習を終えた生徒は，最後に「観点別評価・自己評価シート」にその単元の振り返りを記入する。具体的には，当該小単元の学習に対する総合的な自己評価を５段階（A+/A-/B+/B-/C）で入力し，あわせて「気づき・振り返り」を自由記述で記入する。

この自己評価シートに記入された内容は，そのまま次の小単元の学びに引き継がれていく。「前回は資料集を十分に読み込めなかったから，今回は動画視聴の後にもう一度資料集を見直そう」「グループ対話で自分の発言が少なかったから，次回はもっと積極的に説明する役割を引き受けよう」といった，**自身の学びの過程を自分で客観視し，次の行動を主体的に選択する姿勢が，この振り返りの積み重ねによって涵養されていく**。

なお，生徒が記入した「気づき・振り返り」の記述内容は，Gemini APIとの連携により自動的にAI評価され，即座に5段階評価とコメントが生徒に返される仕組みとなっている。また，この「観点別評価・自己評価シート」は，単に生徒が自己評価を行うための道具にとどまらず，教員側の観点別評価ともリアルタイムに連動する仕組みとなっている。その詳細は次章で詳述する。

4. 「指導と評価の一体化」を実現する即時フィードバックシステム

従来型評価の課題

前章までに述べてきた学習サイクルを支える上で，筆者が最も力を入れて設計してきたのが，観点別評価をリアルタイムに可視化・共有する即時フィードバックシステムである。本章では，その仕組みと意義について述べる。

高校の学習評価は，地理に限らず多くの教科・科目において，主として中間・期末の定期テストと提出物の評価によって行われてきた。知識・技能は定期テストで，主体的に学習に取り組む態度は提出物の状況や授業態度で測る，というのが一般的な運用であった。思考・判断・表現については，論述問題やレポートで積極的に評価する教員がいる一方で，評価材料の確保が難しいために実質的には知識・技能の評価と混在させている場合も少なくない。

いずれにせよ従来の評価方式では，**生徒が自分の学習の到達度を知るのは，多くの場合定期テストの返却後**であり，観点別評価に至っては学期末の通知表を受け取って初めて把握することになる。学期末の時点で「思考・判断・表現がB評価だった」と知らされても，その時点ではもう次の単元が始まっており学習改善の機会を逸してしまう。

また，教員側にとっても，定期テスト後やレポート提出後のタイミングに評価業務が集中するため，**日々の授業で観察された生徒の学びの姿を評価に反映することが困難**になりがちである。高校教員の多くは，授業準備・教材研究に加え，部活動の指導や複雑な校務分掌を抱えており，採点や観点別評価に割ける時間はごく限られている。だからこそ，**評価を日常化するためには，教員の負担を極力抑えながら評価データを蓄積・可視化できる仕組みの構築が不可欠**となる。第2章で指摘したように，これまでは「評価を生徒の学習改善のために行う」という発想に教師の側がなりきれていないのが実情であった。

本実践では，この課題を解決するために，**生徒の学習活動をその場で観点別評価に落とし込み，当日中に生徒にフィードバックする仕組みを独自に構築**している。この仕組みは，教員用の「評価まとめシート」と生徒個別の「観点別評価・自己評価シート」，そして「気づき・振り返り」へのAI評価という3つの要素から成る。

「評価まとめシート」―教員用の観点別評価入力ツール

「評価まとめシート」は，筆者が独自に作成したスプレッドシートであり，教員のみがアクセスできるように設定している。縦軸に単元・小単元・学習活動，横軸に全生徒の氏名が並び，各生徒が各小単元で行ったアウトプット活動（口頭説明・単元テスト等）に対する3観点の評価を，小単元ごとに5段階で入力できる構造となっている。



全生徒の観点別評価を小単元ごとに入力する『評価まとめシート』

前章で述べたように，本実践では生徒が毎時間，教員に対して口頭で説明を行うアウトプット活動を実施している。このアウトプット活動の内容をルーブリック評価表に照らし，授業のあった当日中に評価を入力する。生徒の説明が終わった直後に評価を入力することで，**説明内容の鮮度が高いうちに評価ができ，評価業務が後ろ倒しに蓄積することも防ぐことができる**。この評価スタイルは，**毎時間アウトプット活動を行う授業デザインがあって初めて成立するものであり，従来の一斉講義型授業では実現不可能**である。本実践の設計において筆者が意識してきたのは，「従来の授業スタイルありきで評価方法を検討する」という順序ではなく，「**生徒の学習改善に資する評価とは何かを先に問い，その評価を実現するために授業デザインを変える**」という発想の転換であった。

「観点別評価・自己評価シート」―生徒個別の連動シート

「観点別評価・自己評価シート」は，生徒一人ひとりに個別に作成されたスプレッドシートであり，当該生徒本人と教員のみがアクセスできるように設定している。このシートには，IMPORTRANGE関数を用いて，「評価まとめシート」に教員が入力した当該生徒分の評価が自動的

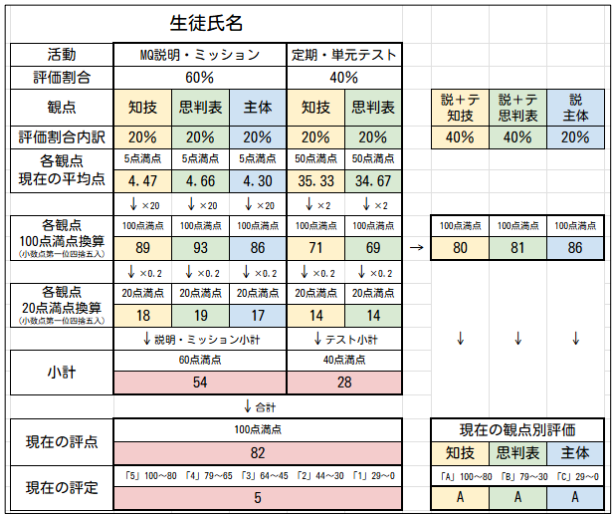


生徒氏名																
大単元	小単元	プリント番号	項目	説・ミ知技	説・ミ思判表	説・ミ主体	テ知技	テ思判表	知技	思判表	主体	自己評価	気づき・振り返り	AI評価	AIによるコメント
水産業	自然条件 漁場 エルニーニョ＆ラニーニャ	31	説明	4	5	5			A-	A+	A+	A-	・雲暗に大規模が多いということは知っていたけど，それがどういうものなのか，どう水産業とつながっているのか，これまでの疑問が解決された。また，日本の水産業だけでなく，世界の水産業に目を向けたのは初めて。世界の三大漁場だけでもよく覚えるための条件が細かく多いが面白かった。ペルー海流付近のエルニーニョ/ラニーニャ現象の違いもしっかり頭えることができた。どちらも世界の海況気象につながっており，これからの世界のために重要すべきの１つだと考えた。 キーワード：大陸棚，バンク，潮目，湧昇流，世界三大漁場，エルニーニョ・ラニーニャ現象	5	学びを社会的な視点や今後の探究へとつなげており，深い理解と高い主体性が感じられる優れた振り返りです。
水産業	漁獲量 日本の水産業	32	説明	4	4	5			A-	A-	A+	A-	・今回の内容は中学の地理で学んだ知識も入っており，わりかし理解するまでに時間がかからなかった。国別漁獲量の推移をみると，前回学んだエルニーニョ・ラニーニャ現象がいつ起きたのかがいたい感覚できたり，EEZが設定されてからの国の記憶を読み取ることができた。それぞれの時期の気候をふりかえって漁獲量がわかれていて，とくにマングローブ林でエビが養殖されているということに驚いた。水産業は周囲が深く関わっているが，世界でどこに輸産・需要どっちが流れているのかまだ知識をつけれていないから，最低でも主要の海流をおさえて，どこでなにが主にとれるのかを意識できるようにする！ キーワード：沿岸・沖合・遠洋・養殖・栽培漁業，暖流，寒流，潮目，EEZ，育てる・獲う漁業	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
林業	森林分布 森林の環境	33	説明	4	5	5			A-	A+	A+	A+	・世界の森林分布の特徴を捉えることができたけどB/C気候の説明をするための知識が足りてない！ キーワード：薪炭材，用材，A（ラワン・チーク），C（自然林<人工林），D（タイガ），過剰伐採，焼畑，丸太の禁輸措置	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
①地図・地理情報 ②地形		ウィコン	問題集	5	5	5			A+	A+	A+	A-	・4年のときに学んだ知識がほとんどだが，GEOで答えられていなかった知識。忘れかけていた知識があることがわかった。いつも発表にいくときにこれまでの知識がつながっていることがほとんどだから，しっかり復習し直さなければならないことに気付かされた。また，資料問題では共通テストや大学入試に対応している問題で，発展問題や資料からの読み取りの練習もできるから何度も解いて，共テで９割とれるようにしたい！	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
エネルギー 鉱産資源	エネルギー生産の推移 1次エネルギー供給構成	34	説明	4	5	4			A-	A+	A-	A+	・エネルギー消費の推移のグラフをみると，石炭から石油へと移り変わっていることが読み取れた。１９７０年代の２回のオイルショックがあってから世界のエネルギー政策の使用の変化を意識することができた。また，水力や原子力，再生可能エネルギーの利用がこのころから増えている。この推移には国の政策が関だけでなく，世界の経済の背景なども関わってくるから，地球だけでなく歴史の知識も復習する必要がある。	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
エネルギー 鉱産資源	石炭	35, 36	説明	5	4	5			A+	A-	A+	A+	・家庭で使っている石炭の種類と工場とかで使っている石炭の種類が違うっていうのを初めて知った！また，探鉱方法で露天掘りと坑内掘りの２つが上げられるが，安全面やコスト面から考えると露天掘りのほうが断然よく，代表例のピンガム鉱山やチュキカマタ鉱山の写真をみるとその色が複数種類で変わっており地層を表しられてどタイプだった。また，生産の発展のグラフで，中国が世界の石炭産出の半分以上をしめているにも関わらず，それでもたりず輸入する形をとっている。なぜそんなに石炭を使用するのか，何に使われているか，単純な疑問では答えが明らかにしない。 キーワード：無煙炭，瀝青炭，褐炭，露天掘り，坑内掘り，アパラチア，ミッドランド，モウラ炭田	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
③気候・水 ④環境問題		ウィコン	問題集	5	5	5			A+	A+	A+	A-	・今回の班員の気候・環境問題は授業で取り扱っている内容と少し重なっている部分があり，普段に比べて授業内容を定着させやすかった。地理は，単体の知識では解けなくこれまでの知識やその国の歴史も関わってくる教科だからどことどこがつながっているのか，一つ一つを丁寧につなげていきたい。 キーワード：気候，環境問題	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
エネルギー 鉱産資源	石油 天然ガス	37, 38	説明	4	5	4			A-	A+	A-	A-	・石油／天然ガスと地形の分野で学んだ特別関がつながるとは思っていなかった。ペルシア湾岸付近には約５０％が埋蔵されており，どがを世界が狂奔のところに表リユーラシアプレートに接着をアラビアプレートが衝突してよく優れるとつながったとは地形を学習してすてよかったと思った。また，石油などの輸送にはパイプラインが多く使われるが，これにも戦争との関係が深くあった。例え，イランとイスラエルの戦争でホルムズ海峡を封鎖するなどの話があるが，ペルシア湾岸は非常に多く輸出している地域であるため，はやく戦争が終わってほしい…。 キーワード：褶曲，油地，断層線，シェールオイル，パイプライン，原油タンカー，LNGタンカー	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
エネルギー 鉱産資源	鉱産資源	39, 40	説明	4	5	5			A-	A+	A+	A+	・資源石炭とは言力シアル材付から時間かかって千葉たの下安定資源国から産出されることがわかった。また，非鉄金属のボーキサイトや銅，金がとれる地域も特徴があり，産出や輸出輸入のランキングをみると５年くらいでもとの国が変わっており，まだまだ発掘される場所があるのではないかと考えた。また，都市鉱山とゆけばもない話かは，金属等を再利用するということで，資源が金属をリ自ありではなく再利用するというのが新代の取り組みらしくて段階によさそうだなと思った。 キーワード：安定環境，非鉄金属，非鉄金属，レアメタル，レアアース	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。
定期テストⅠ							35	33	B	B	-	B-	・GEO，地図帳，授業プリントはしっかり読み込んで，できるかぎり知識をつなげたつもりだった。でも，これまでの授業が抜けていて，なんでこうなるのかという深いとこまで踏み込むことができていなかった。また，今回のテストを通して資料から読み取れることを記述で書くのが苦手ということがわかった。この記述をしっ	4	自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます。

生徒ごとに作成している「観点別評価・自己評価シート」　授業当日中に単元ごとの観点別評価が反映される

に反映される仕組みを組み込んでいる。なお，シートの保護機能により，生徒が入力できるのは「自己評価」と「気づき・振り返り」の欄に限られており，教員による観点別評価やAI評価の部分は閲覧のみ可能な設定としている。

生徒側から見ると，この仕組みは次のように機能する。授業時間内にグループでの口頭説明を終えた後，教員が「評価まとめシート」に評価を入力する。すると，その瞬間，当該生徒の「観点別評価・自己評価シート」に，今日の説明に対する3観点の評価（知識・技能，思考・判断・表現，主体的に学習に取り組む態度）が反映される。生徒は自身の端末からシートを開けば，**授業当日中にその日の説明に対する自分の評価を確認することができる**。さらに，このシートは単に個別の小単元の評価を表示するだけでなく，**現時点での学期全体の観点別評価と，評点・5段階の評定も同時に表示されるように設計**している。



生徒氏名								
活動	MQ説明・ミッション			定期・単元テスト				
評価割合	60%			40%				
観点	知技	思判表	主体	知技	思判表	→	説＋テ知技	説＋テ思判表	説主体
評価割合内訳	20%	20%	20%	20%	20%		40%	40%	20%
各観点 現在の平均点	5点満点 4. 47	5点満点 4. 66	5点満点 4. 30	50点満点 35. 33	50点満点 34. 67				
	↓×20	↓×20	↓×20	↓×2	↓×2				
各観点 100点満点換算 （小数点第一位四捨五入）	100点満点 89	100点満点 93	100点満点 86	100点満点 71	100点満点 69	→	100点満点 80	100点満点 81	100点満点 86
	↓×0.2	↓×0.2	↓×0.2	↓×0.2	↓×0.2				
各観点 20点満点換算 （小数点第一位四捨五入）	20点満点 18	20点満点 19	20点満点 17	20点満点 14	20点満点 14				
	↓説明・ミッション小計			↓テスト小計			↓	↓	↓
小計	60点満点 54			40点満点 28					
	↓合計								
現在の評点	100点満点 82						現在の観点別評価		
							知技	思判表	主体
現在の評定	「5」100～80　「4」79～65　「3」64～45　「2」44～30　「1」29～0 5						「A」100～80　「B」79～30　「C」29～0 A	A	A

現時点における評点・評定・観点別評価 等をリアルタイム表示

つまり生徒は，今日の説明によって自分の評点がどう動いたかを，その場で把握することができる。この仕組みは，**学期末を待たなくても自分の学習の到達度を常時確認できることを意味しており，学習改善の機会を逃さず活かせる環境を生徒に提供**している。

「気づき・振り返り」への即時AI評価

生徒が自己評価シートに入力する「気づき・振り返り」の記述内容については，Gemini APIとの連携により，**入力された数秒後に自動的にAI評価と評価コメントが返される仕組みを構築**している。具体的には，生徒が「気づき・振り返り」欄に文章を入力すると，その記述の内容的な深さや学習への主体的な向き合い方を踏まえて，5段階の評価と短いコメント（「自らの学びを整理し，課題や探究への意欲が具体的に表現されており，積極的な学習態度が伝わってきます」といったもの）が即座に表示される。

このAI評価は，「主体的に学習に取り組む態度」の評価材料の一つとして機能する。**文字数や形式的な要素ではなく，記述の質そのものがAIによって評価されるため，生徒は自分の振り返りの書き方を日々工夫する**ようになる。教員の手作業での評価が追いつかない膨大な記述データについて，AIが評価の一翼を担うことで，日々のアウトプット全てに対する即時フィードバックが可能になっている。

「指導と評価の一体化」の実現

以上に述べた仕組みを通じて，本実践における「指導と評価の一体化」は，次のような具体的な姿で実現している。生徒は授業当日中に，自分が行った口頭説明に対する3観点の評価を確認し，同時に学期全体の評点の推移も把握できる。自己評価シートに記入した「気づき・振り返り」には即座にAIからのコメントが返り，自分の振り返り記述の質を省察できる。これらを踏まえて，**生徒は次の小単元で何に気をつけて学習に取り組むべきかを具体的に見通し，翌日以降の学習に反映させる**ことができる。

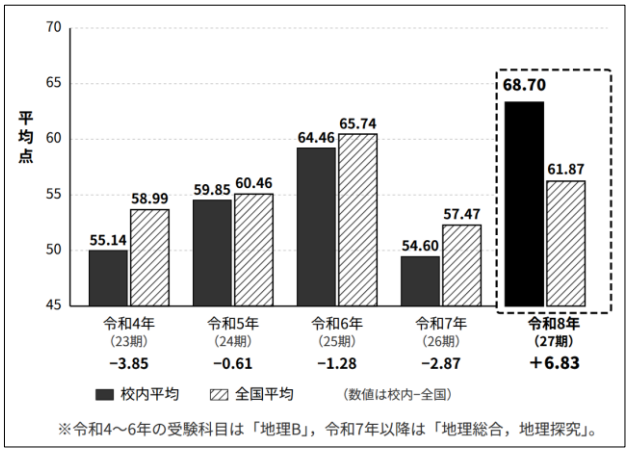
一方，教員側は，毎時間のアウトプット活動をその場で評価することで，評価業務が後ろ倒しに蓄積することなく，日々の指導に評価をそのまま組み込める。学期末のテスト結果だけで総合評価を出すのではなく，**日々の授業の一コマ一コマが評価の材料として積み上がっていくため，評価の妥当性・信頼性も格段に向上**する。

こうした運用により，評価は「学期末に一度下される判定」から，「**日々の学習改善を駆動する継続的なフィードバック**」へと性格を変える。これこそが，本実践の目指す「指導と評価の一体化」の姿である。

5. 実践の成果と今後の展望

大学入学共通テストにみる本実践の定量的成果

本実践の成果を定量的に示すデータとして，本校の卒業生の大学入学共通テスト「地理総合，地理探究」（旧「地理B」含む）の校内平均点の推移を示す。



本校卒業生と全国の共通テスト地理・平均点の推移

グラフから読み取れるように，令和4年から令和7年にかけての4年間は，校内平均点が全国平均点を下回る状況が続いていた。ところが，令和8年の校内平均点68.70点は全国平均61.87点を6.83点上回り，大きく飛躍する結果となった。この変化を理解するうえで重要なのが，下図に示す本実践の各要素の実装状況である。

実装要素	令和4 (23期)	令和5 (24期)	令和6 (25期)	令和7 (26期)	令和8 (27期)
「進捗状況共有シート」	×	○	○	○	○
オンデマンド講義動画	×	○	○	○	○
グループ内知識共有	×	△	○	○	○
「AIとの対話履歴シート」	×	×	×	×	○
GIS等を活用した教員への説明	×	△	○	○	○
観点別評価・自己評価シート	×	×	×	○	○
「気づき・振返り」即時AI評価	×	×	×	×	○

令和8年（27期）で初めて本実践の全要素が完全実装され，校内平均点が全国平均を＋6.83点上回る結果となった。それ以前の学年は各要素が段階的に導入される過渡期であった。

○：実装済　△：部分実装　×：未実装

本実践の各要素の実装状況

表が示す通り，令和4〜7年の卒業学年は本実践の各要素を段階的に導入しながら試行を重ねてきた過渡期の学年であった。これに対して令和8年（27期）は，「進捗状況共有シート」「オンデマンド講義動画」「グループ内知識共有」「AIとの対話履歴シート」「電子黒板・GIS活用の説明」「観点別評価・自己評価シート」「『気づき・振返り』への即時AI評価」という7つの要素が，**高１時の「地理総合」，高２・３年時の「地理探究」の３年間を通じて，すべて完全実装された初の学年**である。

この結果は単なる偶然ではないと筆者は考える。従来の一斉講義型授業では，扱う事象の量は多くとも，それを生徒が自分の言葉で概念化し，定着させるまでには至りにくく，共通テストが求めるような「地理的な見方・考え方を働かせ，複数の資料を総合的に読み解き，多面的・多角的に考察する力」を養うには十分ではなかった。一方，本実践では，**生徒一人ひとりが動画を活用して自分のペースで個別的知識を習得した上で，グループ対話と生成AIとの対話を通じてその知識を概念化し，事象相互の関係性を自分の言葉で説明する訓練を日常的に行っている**。本実践の各要素が３年間にわたって完全実装されたことで，こうした訓練の蓄積が共通テストで問われる力と結びつき，成果として数値に現れたと考えられる。

生徒の振り返り記述にみる質的変容

定量的な成果と並んで，本実践の本質的な価値は，生徒の学びに向かう姿勢そのものの変容にある。以下，生徒が「観点別評価・自己評価シート」の「気づき・振り返り」欄に記入した記述から，特徴的な変容を示す。

まず，**個別の事象を関連づけながら概念として構造化しようとする記述が増加**している点が挙げられる。

「石油・天然ガスと地形の分野で学んだ背斜部がつながるとは思っていなかった。地形を学習してきてよかった」
「チューネンの農業立地論が工業でも出てくるとは思っていなくて驚きました。工業と農業，どちらにも『場所の選び方』に共通する考え方があるんだなと感じました」

こうした記述には，単元を横断して知識がつながる瞬間の驚きと喜びが率直に表れている。さらに*「エネルギー消費の推移のグラフをみると，石炭から石油へと移り変わっていることが読み取れた。…この推移には国のある場所だけでなく，世界の経済の背景なども関わってくるから，地理だけでなく歴史の知識も復習する必要がある」*という記述のように，地理の事象を歴史的・経済的背景と結びつけて捉えようとする姿勢も見られる。**教科書の事象を中核的な概念に照らして構造的に捉え直す地理的な学び**が，確実に身についていることが見てとれる。

次に，自身の課題を具体的に把握し，次への改善策を自ら言語化する記述の増加も注目に値する。*「資料から読み取れることを記述で書くのが苦手とわかった。…日々考えながら生活しようと思う」「授業プリントが1枚終わるごとにGEOと照らし合わせて知識を定着させていく」*これらの記述には，他者に評価されて初めて課題を知るのではなく，**自らの学習プロセスを客観視して次の行動を主体的に選択する姿勢**が表れている。*「将来，エネルギー問題はますます大事になると思うので，こうした知識を活かして環境にやさしいエネルギーの使い方を考えられる人になりたい」*という記述のように，学びが将来の自分の姿へとつながっているものも多く，これこそが本実践の目指す**「自走する学び」の具体的な姿**である。

結びに ～ 教員の役割転換と「仕組み化」の本質

本稿では，「個別最適な学び」「対話的・協働的な学び」「指導と評価の一体化」の三つを，一つの学習サイクルの中でシームレスにつなぐ授業デザインについて報告してきた。その中核には，**生徒が自ら学びに向かいたくなるような「仕組み化」を，クラウド・生成AI等のデジタル学習基盤を活用して綿密に整えるという設計思想**がある。

この「仕組み化」の結果として，教員の役割は従来の授業とは大きく異なるものへと転換する。**全員に向けて知識を一斉に伝達する「講義者」ではなく，個々のグループの対話の深まりに応じて適切な問いを投げかける「揺さぶり手」であり，生徒一人ひとりの学びの道筋に寄り添う「伴走者」となる**のである。これは単に「教員が教えない」だけでは成立しない。進捗状況共有シート，オンデマンド講義動画，対話動画の撮影・蓄積，生成AIと綿密な指示書（プロンプト），電子黒板，即時フィードバックシステムといった各要素を有機的に連動させることで初めて，教員は一斉講義の役割から解放され，個々の生徒に向き合う時間を確保できるのである。

その結果として得られるのは，**生徒が仲間や生成AIとの対話を通じて自ら問いを立て，資料を読み込み，互いに教え合う姿を，一斉講義では決して見ることのできない解像度で観察できる**という，これまでにない教師としての実感である。

大会テーマ「つなぐ・結ぶ…地理」が示すように，地理という教科は，人と自然を，地域と地域を，過去と現在を「つなぐ・結ぶ」営みである。本稿で報告した授業デザインもまた，**「個別最適な学び」と「対話的・協働的な学び」と「指導と評価の一体化」を「つなぐ・結ぶ」試み**であり，その実践を共有し広めていく過程おいて，各校の生徒と教員を，そして九州ひいては日本全国の地理教員同士をも「つなぐ・結ぶ」可能性を秘めている。薩摩川内・甑島から九州全体，そして全国へと，この実践が広がっていくことを願いながら，本稿の結びとしたい。

本稿で紹介したスプレッドシート等のフォーマットです→
ご自由にコピーしてお使いください！

https://drive.google.com/drive/folders/1Re-8nksc0dQSCRdfQ_yKHEIj1nDPF5iF?usp=drive_link

巡検Aコース（甑島）1日目

～海岸地形が語る地球の記憶～

鹿児島県立加治木高等学校　徳留 裕明

1. 甑島の概要

甑島は薩摩川内市の川内川河口から西方約26kmの東シナ海上に位置し、上甑島、中甑島、下甑島の3つの島から形成されています。令和２年、それらの島々をつなぐ甑大橋が完成し、島民が何百年と願い続けた、甑島をひとつなぎにする夢が現実のものとなりました。露出した白亜紀の地層、特異な湖沼群、のちにカサブランカを生み出すことになる鹿の子百合の群生、緑豊かな常緑広葉樹原生林と、他では見られない自然景観に恵まれており、特に地理学習において欠かせない海岸地形の「トンボロ」「陸繋島」「砂州」「ラグーン」「海食崖」をひとまとめに見ることができる稀有な島です。キビナゴ漁を中心とした漁業が盛んであり、多種多様な魚介類が豊富であることから釣り人にも大変人気があります。昭和30年～40年頃は漁船の大船団を率いる網元も複数存在しており、大漁旗が頻繁に掲げられる、大変活気のある島でした。串木野新港からフェリー70分、川内港から高速船50分で行くことができ、ボードセーリングやシーカヤック、スキューバーダイビングなどマリンスポーツにも最適な島です。

2. 里集落

上甑島の中心地となっている里集落は、島の北東部に位置する、「トンボロ（陸繋砂州）」と呼ばれる地形の上に形成されている非常に珍しい集落です。トンボロとは、海流や波によって運ばれた砂や小石が長い年月をかけて堆積し、二つの陸地が自然につながった地形で、里のトンボロは長さ約1.5kmに及びます。こうした特殊な地形の上に人々が暮らしている例は、日本だけでなく世界においても非常に珍しいです。

里集落の歴史は古く、江戸時代には薩摩藩の統治下で重要な行政拠点の一つでした。外城制度のもとで地頭仮屋が置かれ、武士たちが居住した地域もあり、現在でも石垣の残る武家屋敷跡が見られ、当時の面影を伝えています。



トンボロ上に位置する里集落

里周辺は漁業が盛んで、海の恵みを生かした暮らしが続いてきており、フェリー乗り場における、地元産の魚を使ったさつま揚げの移動販売が大変人気であるほか、周辺の料理店では世界で最も新鮮なキビナゴ料理を楽しむことができます。

3. 長目の浜・貝池・なまこ池

長目の浜は鹿児島県の甑島列島を代表する景勝地の一つで、上甑島の北部に位置しています。長さ約4km、幅40～100mほどの細長い砂州によってできたラグーンで、砂州の部分は長い年月による波の浸食と海流によって流れ着いた円礫によって形成されており、足元に美しい玉石だけを敷き詰めて作り上げたかのような、大変珍しい地形です。かつて島津光久がこの景色を見て「眺めの浜」と称えたことが、現在の名前の由来と伝えられています。2015年には「甑島長目の浜及び潟湖群の植物群落」として国の天然記念物にも指定され、学術的にもたいへん価値の高い地域です。

長目の浜の最大の見どころは、海と湖が隣り合う不思議な景観です。砂州の外側には東シナ海の荒々しい波が広がる

一方、その内側には静かな潟湖（海跡湖）が並び、対照的な風景をつくり出しています。



長目の浜となまこ池

その代表が貝池となまこ池であり、貝池は海水と淡水が混ざる汽水湖で、最大水深は約11m。池の内部では水が上下で異なる性質をもち、上層は淡水が混ざり、下層には古い海水がたまっています。この特殊な環境の中には、「クロマチウム」という原始的な細菌が生息しており、世界でもごく限られた場所でしか確認されていないため、学術研究の面でも非常に貴重なものとなっています。湖面の色合いも独特で、池周辺の静けさも相まって、大自然が作り上げたこの池に神秘性を感じることができます。

一方、なまこ池は甑四湖の中で最大規模の容積をもつ池で、最大水深は約22mに達します。名前の通り、かつてナマコが生息していたことからその名が付いたとされ、現在でも魚介類や海藻など多様な生物を見ることができます。貝池と隣接しているにもかかわらず、水質や塩分濃度、生息する生物が異なる点が、訪れる人々に深い興味を与えます。これらを最も美しく眺められるのが、高台に位置する長目の浜展望所で、弓なりに続く砂州とラグーン、そしてその先の海を一望することができます。特に海と空が赤く染まる夕方の展望所は、甑島屈指の絶景スポットと言われており、島民も時折訪れては自然の偉大さに思いをはせ、先人たちが守り続けてきた島の価値を再認識しています。

4. 手打集落・手打診療所

鹿児島県・下甑島の南西部に位置する手打集落は、豊かな自然だけでなく、島の歴史を色濃く残す町並みが魅力の地域です。入り江状の静かな港を中心に発展したこの集落は、古くから漁業や海上交通の拠点として栄え、江戸時代には薩摩藩の支配のもと、甑島統治の重要な拠点の一つとなりました。

当時の薩摩藩は、島々を効率よく治めるため各地に役所や武士の居住地を置きましたが、手打もそのひとつでした。特に藩の行政を担う役人や郷士が暮らしていたことから、集落内には武家屋敷の面影を残す石垣や区画が今も点在しています。細く曲がった道や、外敵や強風を意識したような屋敷の配置には、離島ならではの暮らしの知恵と防御の工夫を見ることができます。拠点となった津口番所跡は、上甑の里集落とはまた別のトンボロ上に立地することも見逃せません。

手打港は天然の良港として知られ、薩摩と甑島を結ぶ海上交通の要所でもありました。物資や人の往来が盛んだったことで、島の中でも比較的早く文化や情報が入ってきた地域でもあります。現在の手打を歩くと、静かな港町の風景の中に、かつて武士たちが暮らし、薩摩藩の統治が行われていた時代の空気が今も息づいているのを感じることができます。

そして、手打の集落を見下ろす高台にたたずむのが、下甑手打診療所。ここは単なる医療施設ではなく、島の暮らしを支える“命のよりどころ”として、長年島民に親しまれてきた場所です。内科・外科・小児科を備え、離島医療の拠点として現在も重要な役割を担っています。病床も備えた診療所で、島の医療を支える中核施設でもあります。

この診療所は人気漫画・ドラマの『Dr.コトー診療所』のモデルになった場所としても知られています。作品のように、都会の大病院とは違い、限られた設備の中で医師や看護師が島民一人ひとりの暮らしに寄り添う――そんな離島医療の現場が、この場所にはあります。薩摩川内市も公式に「モデルとなった診療所」と紹介しています。

観光で訪れると、まず目に入るのは診療所から見渡す手打湾の風景。青い海、ゆるやかな集落、そしてどこか時間が

ゆっくり流れる島の空気。その景色を眺めていると、『Dr.コトー』の世界が現実の中に続いているような気持ちになります。
下甑島では、奇岩のナポレオン岩や瀬尾観音三滝などの自然スポットも人気ですが、その途中でこの診療所の前を通ると、「島で暮らす」ということの重みと温かさを感じられるはずです。旅先で景色を見るだけでなく、人の営みに触れたい人にこそおすすめしたい場所です。

5. ナポレオン岩・西岸断崖

甑下甑島瀬々野浦集落の沖合にあるこの奇岩は、近代以前は沖瀬と呼ばれていました。しかし、明治期にこの島を訪れたフランス人が、この奇岩を見て、フランスの皇帝ナポレオンの横顔に似ていると言ったことから、「ナポレオン岩」と名付けられたと言われています。美しいその横顔は、まさしく海上の偉人と言っても過言ではなく、甑島のシンボルとして大切にされ、また多くの観光客がこれを見にこの地を訪れています。洋上にそびえ立ち、しかもその周囲はすべて断崖であるこのナポレオン岩には、誰も登ることができません。それゆえちょうど頭の部分にある植物群がどのようなものであるか、まだ明らかになっていません。島の人々の間では、この雄大なナポレオン岩の上にザボン（文旦）の木が生育していたとされ、冬には海上にその実が落ちてきたという言い伝えもあります。おそらく昔から島の人々が、この奇岩に多くの興味を持っていたことからこうした言い伝えが生まれたのでしょう。



下甑島西部の瀬々野浦集落から見えるナポレオン岩

そして甑島列島の西岸には、東シナ海の強い波と季節風によって長い年月をかけて削られてできた、高さ数十～数百メートルにもなる海食崖が連なっています。この断崖は、島が自然の力によって形づくられてきた歴史を物語る大地の記録でもあります。地層の多くは、約8000万～7000万年前の白亜紀後期にたまった砂岩や泥岩からなり、当時この地域が海の底だったことを示しています。その後の地殻変動によって隆起し、現在の島の姿になりました。崖の断面には地層が縞模様のように現れ、地質学の観点からも非常に価値の高い場所として知られています。

6. 甑ミュージアム



甑ミュージアム館内

下甑島の北部、鹿島地区に2025年4月にリニューアルオープンした、地質や化石をテーマにした博物館です。甑島には白亜紀後期（約8000万～7000万年前）の「姫浦層群」と呼ばれる地層が広がっており、これまでに恐竜やワニ、カメ、アンモナイトなど多様な生物の化石が発見されています。このミュージアムでは、甑島で採集された化石や岩石など約1000点を展示し、島の約1億年にわたる大地の成り立ちを学ぶことができます。
館内にはプロジェクションマッピングによる立体地形展示や、化石クリーニング作業の見学スペースもあり、子どもから大人まで楽しめる空間となっています。島の絶景スポットである鹿島断崖などの野外フィールドとあわせて訪れることで、甑島の自然と歴史をより深く体感できることでしょう。

7. こしき海洋深層水

海洋深層水とは太陽光がほとんど届かない水深200m以深の海水をさします。その特徴について、工場内の案内には、「1．富栄養性水質　2．ミネラル性　3．清浄性　4．低温安定性」とあります。中でもミネラル組成は、マグネシウムやカルシウムなどの主要ミネラルや微量元素など70～80種類以上の成分がバランスよく含まれています。
水質を悪化させる有機物や細菌類がほとんど含まれず、海水として無機化が進んでいるため安定した水質で豊富なミネラルを含有した水ということになります。
手打湾の沖合４kmと比較的近距離で水深375mの海底から海洋深層水を取水して、マグネシウム豊富な海洋深層水や清涼飲料水、塩・にがりなどを製造販売している株式会社こしき海洋深層水では、これまでの研究から水産物・農産物の加工販売、肥料・飼料の製造販売、化粧品や石鹸の販売などまで、ますます可能性を秘めた海洋深層水の製造工程などを見ることができます。



こしき海洋深層水ほか

簡単に工程をたどりましょう。
採取された原水は沖合４kmから工場内の地下12m、干潮時の海面より２m低い場所から立坑で2台のポンプで汲み上げます。１時間に20トンの深層水を汲み上げることができます。ろ過装置を経て、原水タンクに入ります。
汲み上げられた原水はED装置とRO装置とよばれる装置で「前処理」の工程にはいります。ED装置は、電気透析装置を使い、塩分のみを取り除きます。硬度5500mg/lの高ミネラル水ができます。RO装置は、海洋深層水を逆浸透膜に通して塩分を取り除き、脱塩水と濃縮海水に分けます。硬度約1.0mg/lの脱塩水と塩分濃度5.0%の濃縮海水ができます。
ミネラル水、脱塩水、濃縮海水は次に「調合・殺菌」の工程にはいります。ミネラル水と脱塩水とを調合し、98.3℃の高温で熱殺菌します。にがりを加えて硬度100、硬度1100の水を作ります。この後、水をペットボトル容器に充填し、包装すると製品の完成です。
濃縮海水５％をRO装置で８％まで濃縮させたものを蒸気釜で塩になるまで煮詰め、遠心分離機で塩とにがりに分離します。
株式会社設立は2008（平成20）年で、薩摩川内市のふるさと納税返礼品や毎年3月に行われる鹿児島マラソンの2026年公式ウォーターとして採用・提供されています。

8. トシドン

トシドンは、日本各地に伝わる年神（来訪神）のひとつです。秋田県のナマハゲに似る子供を襲う悪の妖怪であり、下甑島に伝わるものが特に有名です。はっきりした起源を示す記録は残っていませんが、明治時代以前から子弟教育や農耕儀式として口承されてきたといい、江戸時代から行われてきたといわれています。トシドンの面は色を塗った段ボール製のもので、衣装は地元産のシュロやソテツの葉で飾られています。製作現場は非公開であり、写真やビデオでの撮影も禁止されている点がたいへん興味深いです。
行事の後、12月31日から1月1日までの間にこれらの衣装はすべて焼却されます。歳餅は「トシドン餅」とも呼ばれます。かつて米は貴重品であり、生命の源とも考えられていたことから、トシドン餅は子供の生命の源泉であり、子供の魂をさらに健康に成長させる縁起物とされています。島の子供たちが避けて通ることのできない通過儀礼であり、子供1人が適齢になるまで、5年間は毎年訪れる習わしです。子供のしつけと成長を願い行事であり、幼い子供をしっかりとした少年や少女へと成長するねがいを込めた人格転換

の儀式ともされています。大正時代までは上甑島・中甑島・下甑島のそれぞれでトシドンが行なわれていたと言われていますが、昭和以降も伝承されているのは下甑島のみ。かつては種子島と屋久島でもトシドンを行なっており、種子島のトシドンは甑島からの移住者がもたらしたと言い伝えられています。

出典

薩摩川内市ウェブサイト
https://www.city.satsumasendai.lg.jp/gyoseijoho/koshikishimashinko_chiikishinko
立正大学地球環境学部ウェブサイト
https://geo.ris.ac.jp/month_view/20240201/?utm_source=chatgpt.com
ジャパンサーチ文化遺産オンライン
https://jpsearch.go.jp/item/bunka-239431?utm_source=chatgpt.com
甑島レンタカー「とんぼろ」ウェブサイト
https://tombolo-rentalcar.jp/2021/09/16/post-2065/?utm_source=chatgpt.com
鹿児島県国民健康保険団体連合会ウェブサイト
https://kokuhoren-kagoshima.or.jp/shinryo/653

巡検Aコース(甑島)2日目

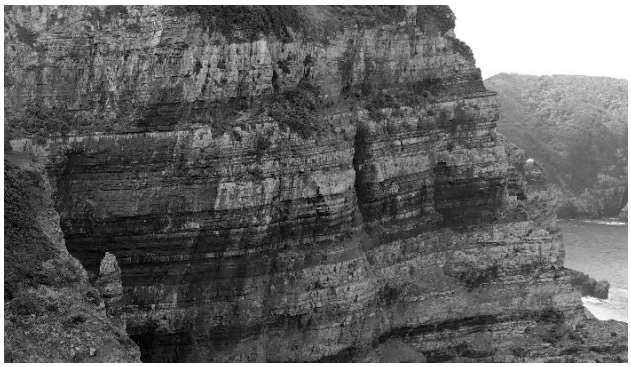
～地層で島の過去とつながる・橋で島を未来へとつなげる～

鹿児島修学館中・高等学校　今林　克也

1. 夜萩円山公園

夜萩円山公園では、約8000万年前の白亜紀に形成された姫浦層群という地層を間近で観察することができます。姫浦層群は､鹿児島県の長島や熊本県の天草に分布しており、夜萩円山断崖から産出された貝の化石から、大陸周辺の浅い海底に堆積したと考えられています。このことから、日本列島の成立を考えるうえで重要な地質遺産とされており、県指定天然記念物や日本地質百選にも選ばれています。この高さ170メートルにおよぶ壮大な断崖はウミネコの営巣地にもなっており、４月～６月にはウミネコの姿を観察することができます。

また、この公園付近ではカノコユリやニシノハマカンゾウといった美しい花を楽しむこともできます。カノコユリは薩摩川内市の市花であり、甑島ではいたるところに自生しています。花弁の色は濃いピンク色で、深紅の斑点模様が入っており、この鹿の子模様に見える斑点が名前の由来となっています。ニシノハマカンゾウは下甑島で夏を告げる花で、６月～７月が見頃です。鮮やかの黄色の花と青い海のコントラストが、印象的な景観を生み出します。



はっきりとした地層が確認できる

2. 鳥ノ巣山展望所

下甑島の北端に位置する鳥ノ巣山展望所からは、美しい景色を一望することができます。特に目を惹くのが、今大会のテーマにもなっている、中甑島と下甑島を「つなぐ」甑大橋です。甑大橋は全長1,533メートルで、鹿児島県で最も長い橋です。2020（令和２）年の開通により、上甑島・中甑島・下甑島の有人３島がひとつにつながりました。それまではフェリーで往来していましたが、橋の開通によって時間や天候に左右されることなく島間を行き来できるようになり、利便性が大きく向上しました。自動車だけではなく、徒歩や自転車での通行も可能となっています。2020（令和２）年９月に台風10号が接近した際には、断水被害に対して甑大橋を使って給水車を輸送することができました。島民にとって大切なライフラインとなっています。今後も、医療体制や災害対応の充実をはじめとする地域の発展に寄与することが期待されています。

また、この展望所周辺もカノコユリの群生地となっており、美しい花々が観光客を魅了します。



甑大橋と対岸に見える中甑島

出典

鹿児島県観光サイト　鹿児島の旅（n.d.）「夜萩円山公園」
https://www.kagoshima-kankou.com/guide/51306
鹿児島県教育委員会（2022）「下甑島夜萩円山断崖の白亜系姫浦層群」
https://www.pref.kagoshima.jp/bc05/hakubutsukan/tennen/ken/35hakua-himeurasougun.html
南日本放送（2024）「かごしま南北600キロ　下甑島に夏の訪れ　花と海のコントラスト」
https://newsdig.tbs.co.jp/articles/mbc/1274735
薩摩川内市（2023）「薩摩川内市の市木・市花・市鳥・市魚」
https://www.city.satsumasendai.lg.jp/soshiki/1041/1/3/1/1425.html
鹿児島県観光サイト　鹿児島の旅（n.d.）「鹿児島県で一番長い！開通したての「甑大橋」」
https://www.kagoshima-kankou.com/feature/koshikitabi/koshikiohashi
こしきツアーズ（n.d.）「鳥ノ巣山展望所（下甑島）」
https://koshiki-tours.co.jp/734/

巡検Bコース（北薩・伊佐）

～曽木の滝から菱刈鉱山へ～

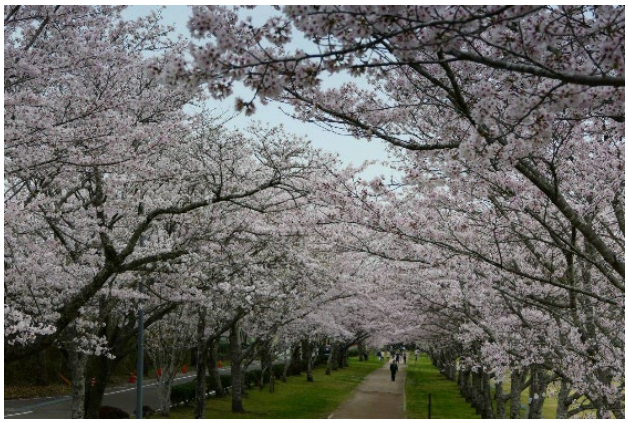
鹿児島県立大口高等学校　嶽釜　将

1. 伊佐市概況

鹿児島県伊佐市は、県庁所在地である鹿児島市から北へ約75キロメートルに位置する県本土最北の市で、北に熊本県、東に宮崎県と県境に接する。人口規模は約2.2万人で、面積は392.56平方キロメートル（東西23km、南北27km）となっており、県内の市平均値の約1.3倍の面積となる。周囲を九州山地に囲まれた大口盆地を形成しており、平地の中央部を川内川とその支流が流れ、これらの水系を中心として広大な水田がひらけている。気候においては、九州型の太平洋側気候であり、夏季の降水量が非常に多い。南九州であるものの周りを険しい山に囲まれた内陸盆地となっているために、夏は気温35℃以上の猛暑日となり、冬は気温0℃未満の真冬日になることが多い。1月の平均気温は4.6℃で、同じく盆地に位置する京都市（4.8℃）よりも寒い（1991~2020年平均値）。また平成28年（2016年）1月25日には大口観測所のアメダス（標高175メートル）において低地での九州の最低気温（気象官署・アメダス）となる-15.2℃を記録した。このような気候から伊佐市は、「鹿児島の北海道」と言われている。

厳しい気候環境ではあるが、四季の彩りや大地の恵みを楽しむことができる。春は「日本桜の名所百選」に選定されている忠元公園や巨木百選に選ばれ、樹高日本一のエドヒガン桜に代表される『桜』、夏は田植えや『新緑』、秋は水田一面を黄金色に染める『稲穂』、冬は風景を銀世界へと変える『雪』へと彩りを変える（写真）。大地の恵みにおいては、豊富な水脈や寒暖差によって育まれる「伊佐米」がブランド米として知られる。また「現存する最古の『焼酎』の文字が残っている焼酎のふるさと」でもあり、豊富な地下水から造られる「伊佐美」、「伊佐錦」、「伊佐大泉」などの「伊佐焼酎」は全国的にも有名で広く愛されている。その他「産金量日本一の菱刈鉱山」、「滝幅日本一の曽木の滝」など多くの恵みがあり、豊かな自然と美しい星空に覆われた伊佐の地からは、多くの文化人が輩出されている。

古くから「薩摩の米蔵」と言われ、川内川流域に広がる県内一の生産面積と生産量を誇る水田地帯として発展してきた旧大口市・旧菱刈町が、平成20年（2008年）11月1日の合併により「伊佐市」として新たな歴史をスタートさせ、現在に至っている。







伊佐の四季（上から春の忠元公園の桜、秋の稲穂、冬の雪）

2. 近代化産業遺産　曽木発電所遺構

曽木の滝下流右岸1.5キロメートル付近に、今でも明治の面影を強く残している「曽木発電所遺構」がある。普段は、大鶴湖（鶴田ダム）の湖底に沈んでいるが、５月以降になると大雨に備えて、ダムの貯水量を減らし水害に備えるため、水位の下がった湖面から姿を現す。中世のヨーロッパの居城跡を思わせるレンガ造りの建物姿が特徴的である。

「電気化学工業の父」野口遵（のぐちしたがう：1873~1934年金沢生まれ）は、曽木の滝の落差に目をつけ、水力を利用する電気事業を計画。明治39年に曽木電気株式会社を設立し、事業家としての歴史をこの地からスタートした。明治40年（1907）にドイツ製の発電機及び水車を備えた第一発電所（800kw）を建設し、11,000ボルトの高圧を用いて大口、牛尾鉱山の動力源として送電を開始した。その出力は当時国内でも最大級のものであった。また近傍町村に電灯電力を提供してもなお発電量の半分にも満たなかったため、余剰電力を活用して翌年には水俣にカーバイドの製造工場を建設、次いで曽木電気と合併して現在のチッソや旭化成の前身となる日本窒素肥料株式会社を設立した。日本電気化学工業の礎を一代で築くことにつなげ、野口はその後、経済人としても活躍した。

明治42年（1909）には、資本金を40万円に増資して、現在の地にドイツ製発電機（出力1,590kw）4台を備えた第二発電所（最大出力6,700kw）がすべて完成した。第一発電所は、水害で流出したこともあって、明治42年に廃止されたが、第二発電所は昭和40年（1965）の鶴田ダムの完成とともに水没することとなり、約55年間稼働し続けた。

現在の姿は、令和3年（2021）7月10日の豪雨の影響で発電機室の壁が倒壊したものである。また、周辺にはヘッドタンクや隧道跡なども残っており、土木遺産として貴重なものとなっている。復旧へ向けての道のりは長いと思われるが、近代化遺産として元の姿に甦ることを切に願っている。



以前の曽木発電所遺構の姿



令和3年豪雨後(現在)の曽木発電所遺構の姿



水没時の曽木発電所遺構の姿

3. 宮人川ビオトープ

鶴田ダムのダム湖である大鶴湖が流入する宮人川の末端に、棚田式の水質浄化施設として2010年に整備された。宮人川から取り入れた水は、ビオトープである棚田を流れる間に浄化されていく。ビオ（Bio）は命、トープ（topos）は場所のことで、ビオトープは生物の生息空間を意味する。宮人川ビオトープは、全国でも珍しい、ビオトープとなる水田が複数重なった、宮人川両岸に約10,000平方メートルの広さがある棚田式ビオトープとなっている。

自然流下方式で取水された河川水は、それぞれの棚田において段々に土壌浄化され、下層部の砂利層まで透水した浄化水は空石積み（お城の石垣のような積み上げられる工法）の石間からしみ出るように下段の棚田に流れ込む。そのとき、大鶴湖の汚れの原因となる窒素やリンなどが、植物の根や茎から吸収され、土壌の沈殿作用やそこにすむ微生物の吸着分解作用により取り除かれる。段々と浄化されてきた河川水は、最終段のウェットランド（一般的には湿地の意）に流れ込み、浄化した水か宮人川に戻される。

また、宮人川の原風景である棚田を再現した自然環境にも配慮した施設であり、新たな水辺環境が創出され、多種多様な動植物の生息環境の場となっている。ビオトープに生息する生き物観察や水質調査などを通じて、環境への関心をもってもらい、自然の大切さや持続可能な未来への関心が高まることを期待して､環境学習にも利用されている。なお、ビオトープの維持管理方法として、毎月第一日曜日の草刈りと、12月から3月の冬季に野焼きを行っている。



棚田式の宮人川ビオトープ



上空からの宮人川ビオトープの姿(出典:国土地理院ウェブサイト　地理院地図を一部加工して作成)

4. 曽木の滝

大口盆地の中央を川内川とその支流が流れ、伊佐市の南西部で一大瀑布「曽木の滝」となって鶴田ダムへとそそいでいる。奇岩のそそり立つこの滝は、滝幅210メートル、高さ12メートルの壮大なスケールを誇り、「東洋のナイアガラ」ともよばれる。千畳岩の岩肌を削るように流れ落ちる水流とその轟音は、訪れる人々を釘付けにするほど豪快である。

地質学的には、加久藤火砕流の堆積物によってできたものとされる。かつては溶岩によって堰き止められ湖が形成されていた時代もあったが、川内川の侵食によりこの付近が崩れ、湖水が流失し滝ができ上流には盆地が出現したといわれている。滝上の千畳岩は溶岩の一部であるといわれる。また滝の周囲を覆う溶結凝灰岩には、風化したポットホール（甌穴）が多く見られ、くぐり抜けると頭が良くなると伝えられる「学童くぐり岩」や「どくろ岩」などと名付けられたものがある。

1956年に建設省の風致地区に、1964年には川内川流域県立自然公園に指定され、整備が進められてきた。春は桜やつつじが彩りを添え、夏は水量も多く豪快そのものである。秋には銀杏や紅葉が流れの中に鮮やかに浮かび上がり「もみじ祭り」が開催され、冬にはイルミネーションイベントも開催されるなど、四季の彩りも美しく訪れる人々を魅了する。

また、隣接する曽木の滝公園内にはさまざまな観光や歴史スポットがある。例えば清水神社は縁結びと安産の神様が祀られている。この付近は、江戸時代に水運による米の輸送を行っており、その水路を開くために大規模な川浚えを行った歴史やその当時の川浚え唄が今でも伝えられている。他にも観音渕（新納忠元と豊臣秀吉の会見や滝見物の言い伝え）や柳原白蓮の歌碑「もののふの昔がたりを曽木の滝水のしぶきにぬれつつぞ聞く」、新曽木水力発電所など数多くあるので、ぜひ散策してほしい。



曽木の滝（水量少なめ）



曽木の滝（水量多め）

5. 菱刈鉱山

薩摩半島北部を中心とする北薩一帯には、慶長年間に採鉱が始まったとされる大口金山や布計（ふけ）金山などがあったが、1977年までに閉山した。ところが1981年に菱刈町山田で地表から約290メートルの四万十累層群の中に高品位の金銀鉱脈が発見された。1983年に本格的な開発が始まった、比較的新しい鉱山である。

400年近くの歴史をもつ佐渡金山に比べれば操業期間は10分の1ほどだが、現在までの金の産出量は272.6トン（2025年3月末現在）で、佐渡金山の総産出量82.9トン（388年間で）をはるかに上回る（**表1**）。金の含有量は世界的に見ても平均で鉱石1トンあたり5グラムほどだが、菱刈鉱山の金鉱石は平均で20グラムという世界有数の品質を誇る。そのため、精錬に要するコストを安く抑えることができ、採算性の高い操業が可能になっている。菱刈鉱山が現在でも操業を続けられる理由の1つであり、「奇跡の金鉱山」とよばれるほど特別な存在なのである。また年間産金量は4トン（2024年）、埋蔵金量は約154トンと推定され、いずれも日本一の金鉱山である。

菱刈鉱山は住友金属鉱山が経営し、鉱石はトラックで加治木港に陸輸送され、さらに鉱石専用船で愛媛県東予工場の精錬所へ運ばれ純金となる。採鉱時に伴う温泉水（約65℃）は、坑内からポンプアップされその3分の1は温泉水として地元の温泉施設に送り利用される。残りの3分の2は冷却・処理後川内川へ放流される。また毎年環境モニタリングを行うなどの環境保全に努め、イベントを開催するなど地元に密着し愛される企業となっている。

近年、世界的に金の価格が顕著に高騰している。また近隣の霧島市横川町にある約70年前に閉山した山ケ野金山周辺で、調査を進めるカナダの鉱物探査会社が金を含む新たな鉱脈を発見した。鹿児島におけるゴールドラッシュの再来を期待する。

表1　日本の主要金山の産金量

（2025年3月末現在）

順位	鉱山名	所在地	産金量（t）	備考
1	**菱　刈**	**鹿児島**	**272.6**	**稼行中**
2	佐　渡	新　潟	82.9	閉　山
3	鴻之舞	北海道	73.2	閉　山
4	串木野	鹿児島	55.8	休止中
5	鯛　生	大　分	37.0	閉　山
6	高　玉	福　島	29.6	閉　山
7	山ヶ野	鹿児島	28.4	閉　山
8	千　歳	北海道	23.0	閉　山
9	大　口	鹿児島	22.5	閉　山
10	持越・清越	静　岡	20.9	閉　山

（住友金属鉱山株式会社菱刈鉱山　提供資料より抜粋）



菱刈鉱山の金鉱石（大口高校所蔵）

〈参考資料〉
伊佐市ホームページ、気象庁ホームページ
国土地理院ホームページ（地理院地図）
国土交通省　宮人川ビオトープ案内（河川協力団体）
伊佐市ふるさと散歩（伊佐市郷土史詩編さん委員会）
鹿児島地図紀行　第三版
（鹿児島県高校地理部会　徳田屋書店）
身のまわりのあんなことこんなことを
地質学的に考えてみた（渡邉克晃　ベレ出版）
住友金属鉱山株式会社　菱刈鉱山　パンフレット

巡検A代替コース（薩摩川内）

～地域調査Aコース甑島　代替コースの紹介～

鹿児島県立鶴翔高等学校　砂泊　　豊

1. 藺牟田池

薩摩川内市の東側に広がる祁答院地区は、2004（平成16）年10月12日に１市４町４村が合併して誕生する前までは薩摩郡祁答院町と称した地域で、この地域の南西部、入来地区との境界に位置するのが藺牟田池です。



イグサ（藺草）の有数の産地で、沼・湿地（牟田）があったことからその名がつけられたとされています。

藺牟田池は標高295m、水深3.5m、周囲3.3km、面積約60haの湖で、周囲には北西に片城山、西に山王岳、南に舟見岳、東に飯盛山などの標高500m程度の外輪山が囲む火口湖（カルデラ湖）です。池の周辺はハイキングコースになっており、生態系資料展示館アクアイムや貸しボート屋、キャンプ場、数軒の民家や茶畑などがあります。池の水は東側の水門から、1754（宝暦４）年に完成した全長380mの隧道を通り、下流域の水田に利用されています。



湖西には、1921（大正10）年に国の天然記念物に指定された『泥炭形成植物群落』があり、湿原化し、浮島も見られます。池畔にはオオタチヤナギ、ヨシ、マコモ、アンペライなどの挺水（ていすい）植物が群生しています。これらの植物は枯れると堆積し、炭化して泥炭層を形成します。この一部が湖底から離れて水面に浮かび上がったのが浮島で、大小さまざまな浮島が点在しています。池の水位が低い時は池底に定着しますが、水位が高い時は水面に浮かび、風によって移動します。浮島の上にはヒトモトススキなどの植物が観察できます。泥炭は日本列島の中部以北に多く存在していますが、南国鹿児島など南方地域にあるのは珍しく、国の天然記念物の指定により保護されています。



貴重な自然が残る藺牟田池にはカモ類の渡り鳥や白鳥など様々な野鳥が飛来し、多くの野生動植物が生息しています。2005（平成17）年に国内希少野生動植物種であるベッコウトンボが生息する重要な湿地として「ラムサール条約」の登録湿地になりました。九州では荒尾干潟（熊本）、肥前鹿島干潟と東よか干潟（佐賀）、くじゅう坊ガツル・タデ原湿原（大分）、出水平野（鹿児島）などが登録されています。

このように生態系豊かな藺牟田池ですが、1980年代以降にはオオクチバスやブルーギルなどの外来種も確認され、生態系の攪乱も危惧されています。アクアイムではレジャー用釣り竿の貸出もしており、釣った外来種を買い取っています。藺牟田池に行ったら、ひと釣りチャレンジしてみたらいかがでしょうか。

2. 祁答院蒸留所

祁答院蒸留所は藺牟田池と入来麓の間に位置する焼酎蔵です。手造り麹・木樽仕込み・木樽蒸留・洞窟貯蔵で製造されるオンリーワンの焼酎作り（同所パンフレットより）にこだわる蔵です。2007（平成19）年、下甑島の青瀬地区で焼酎作りをしてきた西酒造場が、焼酎粕や工場排水、原材料確保などの問題から下甑島での焼酎製造を断念し、ここ祁答院蒸留所で新たに焼酎作りを始めました。

銘柄としては、下甑島の西酒造場時代から引き継いでいる“海の焼酎”「青潮」、そして霧島に自生する花をイメージした“里山の焼酎”「野海棠」が有名です。

3. 入来麓

入来麓は、知覧や出水とともに鹿児島３大武家屋敷群に数えられる集落です。古文書の『入来文書』によると、入来の起源は中世の鎌倉時代までさかのぼり、800年近い歴史があります。相模国の渋谷氏の一族が、戦の恩賞として与えられた薩摩国に1248年に移り住み、入来周辺の荘園の地頭になり「入来院」氏を名乗ったのです。そして山城として「清色城」を築き、樋脇川（川内川支流）との間に武家



屋敷群を整備しました。その後、島津氏の隆盛に伴って1569年には入来院氏もその傘下に入り、要塞としての清色城は役目を終えました。しかし、北に出水、西に川内、南に鹿児島、東に姶良（その先に国分・大隅半島）という交通の要衝にあった入来は、引き続き地域統治の拠点となっていたようです。

地形的な特徴としては、この武家屋敷群は川沿いにあることから、石垣は丸い川原の石を使った玉石垣であり、町並みは格子状の区割りとなっていることが挙げられます。



また、蛇行する樋脇川を自然の堀に見立てた集落の形態は“環濠集落”と同じで守りやすく、さらに清色城の本丸に向かうにはシラス台地の侵食谷である狭い堀切（切通し）を何度も通らなければなりません。麓内には豊富な湧水や田畑の跡もあり、防御的な機能もよく考えられた立地だったことが伺えます。



（旧増田家住宅内　薩摩川内市制作の説明映像より）

現在は、清色城にあったお仮屋の場所が入来小学校として使われており、入来支所や入来麓観光案内所も武家屋敷群の中にあります。玉石垣や区割りもよく残っており、復元された茅葺屋根の旧増田家住宅などを巡ったり、甲冑や着物を体験したりと様々な“サムライツーリズム”を楽しむことができます。



なお、南にある大宮神社では入来神舞が奉納され、その中の歌が『君が代』の歌詞の発祥の一つとされています。



4. 寺山いこいの広場

薩摩川内市役所から東北東に位置する上床（寺山）は標高310.4m。その南側の標高247mの高台一帯は、薩摩川内市が整備する「寺山いこいの広場」です。眼下には一級河川の川内川の流れと薩摩川内市街地を望み、はるか彼方に東シナ海と甑島を見渡すことができます。

しかし、「霧の町」とよばれる薩摩川内。秋から冬春の大気が安定している朝によく霧が見られるとのことです。地表面の大気が放射冷却によってできる放射霧が主な原因で、盆地状の地形と川内川の水蒸気が大きな影響を与えるといわれます。



広場には一周1.3kmのゴーカートコースや一面160平方mのミニ電動カーコーナー、ウォーキングコース（1km、3km各コース）、レストハウス、フラワーガーデン、運動広場などが整備され、薩摩川内市民の他、近隣地域の人々の憩いの場として利用されています。

また、広場の中でもせんだい宇宙館はメイン施設といえるもので、口径50cmの反射望遠鏡で鮮明な惑星や星雲・星団を観測可能です。昼間でも青空に輝く一等星や金星などの観測ができます。宇宙館の外観はアメリカのSFメディア・フランチャイズ『スタートレック』シリーズに登場する宇宙艦エンタープライズを模したものになっています。

5. 九州電力川内原子力発電所展示館

薩摩川内市の中心を流れる川内川の河口左岸に位置しています。巨大なステンドグラスをイメージさせる外観で実物大の原子炉模型やパネルで原子力発電のしくみやその必要性についてわかりやすく紹介する施設です。

展示館に隣接する川内原子力発電所は九州で２番目の原子力発電所で、西側は東シナ海、東・北・南側は豊かな自然を残す陸地部に囲まれています。１号機と２号機は電気出力ともに89万kW、軽水減速・軽水冷却加圧水型（PWR）の原子炉型式で営業運転開始がそれぞれ1984（昭和59）年７月と1985（昭和60）年11月です（九州電力HPより）。



展示館は1980（昭和55）年１月にオープンしました。1994（平成６）年７月には入館者100万人を達成しています。

展示館内は地下１階から地上２階まであります。２階の展望室から川内原子力発電所が一望でき、発電所の向こうには東シナ海も見ることができます。１階は迫力ある高さ12m、幅4.5mの実物大原子炉模型や原子炉建屋模型（20分の１サイズ）、原子炉を守る「五重の壁」の模型のほか原子力発電のしくみや原子力発電の安全性、環境モニタリングや温排水、廃棄物の処理と処分についての展示スペースが備わっています。地下１階は原子力クイズやハンドルを回して電気をおこす人力発電綱引きゲームがあり、子どもから大人まで楽しめるスペースになっています。伝統ある川

内大綱引きを想起させられます。

展示館の前に広がる「みやま池」は水を循環させる装置を設置し、水質の悪化を改善するなど環境に配慮した発電所や展示館の作りとなっています。

6. 甲冑工房 丸武



メジャーリーガーになった大谷が、ホームランセレブレーションの時にかぶる兜。それを製造したことで一気に話題になった丸武産業は、旧「川内戦国村」をリニューアルし、2018年に「甲冑工房 丸武」をオープンしました。

丸武は『ドラマや映画でみる甲冑』のキャッチコピーの通り、役者たちが劇中で着用する甲冑の制作・修理などを請け負っています。施設内では実際にその細かい制作をしている様子を見学することができ、甲冑の着付けや射的の体験もできます。



何よりも圧倒されるのは、「戦国武将展示館」。直江兼続や本多忠勝など、聞き覚えのある有名武将の甲冑のレプリカがずらりと並ぶ風景は壮観です。実はこの鎧、値札が付いているものは販売もしており、企業オリジナル甲冑なんてものも発注できます。兜飾りが大きすぎてかぶれるのか？という物もありますが、大きい兜飾り部分のレプリカはさすがに木製で、軽いが壊れやすいのだとか。



このように、丸武は甲冑の制作でシェア８割を誇り、業界の人なら知らない人はいない！という超有名企業なわけですが、実は1958（昭和33）年の創業時はなんと釣り竿メーカーで、名前も「丸竹」。グラスファイバーの普及とともに竹竿が売れなくなったところで、1973（昭和48）年に初代社長の趣味だった甲冑の製造に心機一転切り替えました。その後、大河ドラマや黒澤明監督の映画で使う甲冑を製造し、クオリティを追究し続け、ここまで成長しました。



現在では丸武は、一大テーマパークとして外国人も含めて体験型観光を提供し、また、甲冑が薩摩川内市のふるさと納税の返礼品にもなり、地域に多大な貢献をしています。



（自動販売機も丸武仕様）

九地研鹿児島大会 役員・大会実行委員一覧

大会委員長

田口 浩太郎（九地研会長 鹿児島県立武岡台高等学校校長）

大会副委員長

新村 耕一（九地研副会長 鹿児島県立鶴翔高等学校校長）

大会委員

出合 妙子（熊本県部会長 熊本県立人吉高等学校五木分校）
中島 努（長崎県部長 長崎県立長崎東高等学校）
清原 宏一（佐賀県部長 佐賀県立三養基高等学校）
久銘次 亮（沖縄県部長 沖縄県立普天間高等学校）
松本 勝（大分県部長 大分県立中津北高等学校）
諸冨 恒一郎（宮崎県部長 宮崎県立佐土原高等学校）

大会事務局

大迫 伸至（九地研事務局長 樟南高等学校）
落 雅博（九地研事務局次長 鹿児島県立楠隼高等学校）
神宮 公平（九地研事務局総務 鹿児島県立加治木高等学校）
鉾谷 寿一（九地研事務局会計 鹿児島県立川内高等学校）

大会総務

齋藤 孝誠（鹿児島県地理分科会庶務
鹿児島県立鹿児島中央高等学校）
矢野 正浩（鹿児島県地理分科会監事 志學館中・高等部）
牧之瀬 義広
（鹿児島県地理分科会監事 鹿児島県立川内高等学校）
前村 駿介
（鹿児島県地理分科会会計 鹿児島県立武岡台高等学校）

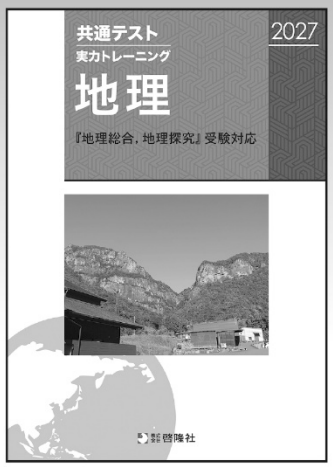
大会実行委員

亀田 誠（鹿児島県立開陽高等学校全日制課程）
前鹿児島県地歴公民部会長
上村 和孝（鹿児島県立甲南高等学校）
前鹿児島県地理部長 記念講演
浅井 俊昭（ラ・サール中学校・高等学校）教育懇談会
井出 健人（ラ・サール中学校・高等学校）
研究発表・教育懇談会
今林 克也（鹿児島修学館中学校・高等学校）
地域調査（甑島）
坂元 亮（鹿児島県立武岡台高等学校）会場設営・受付
塩満 洋一郎（鹿児島県立松陽高等学校）研究発表進行
砂泊 豊（鹿児島県立鶴翔高等学校）地域調査（川薩）
嶽釜 将（鹿児島県立大口高等学校）地域調査（菱刈鉱山他）
谷 兼太郎（鹿児島県立鹿児島南高等学校）大会記録
徳留 裕明（鹿児島県立加治木高等学校）地域調査（甑島）
中田 直孝（志學館中・高等部）広報・情報管理
中村 孝一（鹿児島玉龍高等学校）大会記録
野間口 浩（鹿児島県立川薩清修館高等学校）
会場設営・受付
濵田 向日葵（鹿児島県立屋久島高等学校）受付・弁当
濵田 雄志（鹿児島県立指宿高等学校）会場設営・受付
福満 凛平（鹿児島県立国分高等学校）大会記録
松下 智香子（霧島市立国分中央高等学校）会場設営・受付
政倉 美和（鹿屋中央高等学校）受付・会場設営
和田 淳義（鹿児島県立松陽高等学校）研究発表進行

九州高等学校地理教育研究会（九地研）のテキスト

2026年6月改訂

共通テスト 実力トレーニング 地理

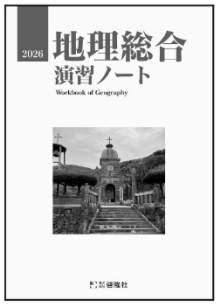


B５判　152ページ　　本体価格 727円（税込800円）

・系統地理及び地誌の全分野を網羅。
・2026試験など，最新の過去問を収録。

解答解説書付（別冊）

地理総合 演習ノート

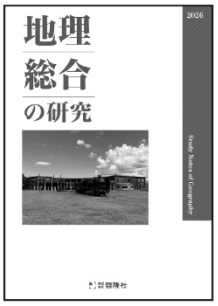


B５判　120ページ
本体価格 600円
（税込660円）

・左ページで重要事項を整理，右ページは考察しながら理解を深める課題。

解答解説書付（別冊）

地理総合 の研究



B５判　72ページ
本体価格 555円
（税込611円）

・地理総合に対応したコンパクトな問題量。

解答解説書付（別冊）

新地理 要点ノート

B５判　176ページ
本体価格 780円
（税込858円）

・左ページは空欄を埋めながら重要事項を整理，右ページは学習内容を深める作業と資料。

解答解説書付（別冊）

サクシード 地理

B５判　152ページ
本体価格 680円
（税込748円）

・単元ごとに要点・作業・問題の三段構成で，共通テストに必要な地理の基礎を完全マスター。

解答解説書付（別冊）

新地理の 研究

B５判　128ページ
本体価格 710円
（税込781円）

・基礎的な問題から，地理的知識をベースとした考察力を問う問題まで幅広く収録。

解答解説書付（別冊）

Since1955 - 教壇の声をかたちに
株式会社 啓隆社

ホームページ　http://www.keiryusha.co.jp/
本　　社　〒815-0037　福岡市南区玉川町２番１号 大連ビル
TEL 092-551-4341（代表）
FAX 092-562-4741（営業）　092-541-1414（編集）
京都支社　京都府京都市　／　東京事務所　東京都新宿区

帝国書院 地理シリーズ

新刊のご案内

9つのテーマでみる日本と世界の地理



地理の学習をさらに深める全10巻！

①自然環境
②自然災害と防災
③人口・都市
④資源・エネルギー
⑤農林水産業
⑥工業
⑦第３次産業
⑧交通・通信
⑨生活・文化
⑩資料編・総索引

・揃定価 49,500 円（税込）
・AB 判　・平均 65 ページ
・ISBN　978-4-8071-6769-2
・NDC　291

推薦のことば（抜粋）

立石 昌文　**（福岡県公立中学校元教諭）**

９つのテーマで系統的に構成された全 10 巻の地理学習の決定版です。教科書から一歩踏み込んだ調べ学習や探究的な学習に格好の書籍です。地理の授業がさらに楽しく、生き生きとわかるようになり、先生方の教材研究の手助けにもなることでしょう。



新・日本のすがた　全９巻
・揃定価 38,500 円（税込）
・AB 判　・平均 89 ページ
・セット ISBN　8071-6539-1



新・世界の国々　全 10 巻
・揃定価 41,800 円（税込）
・AB 判　・平均 78 ページ
・セット ISBN　8071-6458-5



新・災害と防災　全５巻
・揃定価 17,600 円（税込）
・AB 判　・平均 56 ページ
・セット ISBN　8071-6698-5

帝国書院
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 3-29
Tel. 03-3262-4795(代)　URL：https://www.teikokushoin.co.jp/

祝 令和8年度九州高等学校地理教育研究会第24回研究大会(鹿児島大会)

地理総合 ワークノート

B5判　88頁　2色
978-4-487-37127-3
定価：620円 (本体 564円)
付属
解答編 16頁

教科書『地理総合』(地総002-901) に準拠した、学習の整理や作業・演習のためのノートです。

教科書の記述を要約した文章の空欄に適語を書きこむことによって、
教科書の要点が整理できるほか、
地形図や雨温図などの読み取りの作業・演習が行えます。



要点マスター 地理探究 整理と演習

B5判　160頁　2色
978-4-487-38664-2
定価：900円 (本体 818円)
付属
解答編 48頁

教科書『地理探究』(地探701) に準拠した、整理・演習のためのノートです。

教科書の図版を使った「資料の読み取り」で理解を深めることができるほか、
「入試問題に挑戦しよう」などで入試対応の実践力を養うことができます。



高校 社会入門

B5判　24頁　2色
978-4-487-37099-3
定価：380円 (本体 345円)
付属
解答編 4頁
確認テスト 1回
[教師用]確認テスト解答・CD-ROM

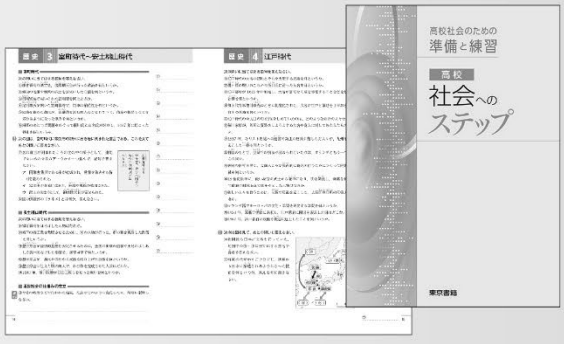
新入生向け入学準備用初級ワーク。
中学社会の総まとめと、高校「地理総合」「歴史総合」「公共」への橋渡し教材です。
中学社会の「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」の3分野で構成しています。
各分野7〜8頁で中学校履修内容の基礎・基本的問題を配置しています。
入学前の春休みに十分消化できる内容です。



高校 社会へのステップ

B5判　32頁　2色
978-4-487-37100-6
定価：380円 (本体 345円)
付属
解答編 8頁
確認テスト 1回
[教師用]確認テスト解答・CD-ROM

新入生向け入学準備用中〜上級ワーク。中学社会の総まとめと、
高校「地理総合」「歴史総合」「公共」の導入に最適の問題集です。
中学社会の「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」の3分野の問題で構成し、
巻末には高校での地歴・公民の学習につながる「基本事項の確認」の頁を設けました。
全32頁。入学前の春休みに十分消化できる内容です。



【新訂版】ビジュアルマップ 大図鑑世界史

内容紹介
映像はコチラ

「読んで知識を深める地図書籍」と評判の図鑑に
COVID-19パンデミック など、最新の重要テーマを追加！



"目で旅する地球史"
待望の改訂新版

DK社 編著／スミソニアン協会 監修／
本村 凌二 日本語版監修
定価：7150円(税込) 978-4-487-81817-4

東京書籍
高校教育部　〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1　Tel:03-5390-7320
九州支社　〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-16-10 読売舞鶴公園ビル　Tel:092-771-1536
ホームページ https://www.tokyo-shoseki.co.jp　東書Eネット https://ten.tokyo-shoseki.co.jp



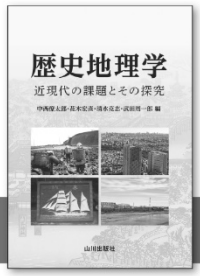
いとちりの 防災教育にGIS

自然災害にそなえる 地図の見方・作り方

伊藤智章 著

B5判 176頁 フルカラー 定価2,750円(税込)

高校の必修科目「地理総合」で学習する地図・GISを活用した防災教育について、地図の収集から作成までわかりやすく解説。また、全国21の災害事例について背景や被害状況を豊富な地図で示し得られる教訓を紹介しており、地理教育に携わる全ての人々に必携!



歴史地理学

近現代の課題とその探究

中西僚太郎・花木宏直・清水克志・武田周一郎 編

A5判 256頁 定価2,970円(税込)

「歴史」×「地理」地理学的アプローチから日本の近代化を読み解く

日本の近現代に焦点を当て、近代化におけるテーマとなる「都市化」「商品化」「移動性」「ジェンダー」「災害」などについて実証的な研究成果をまとめたものである。その地域で、人々がいかに暮らし、生きてきたのかを追究する、歴史地理学の見方・考え方を理解できる概説書。

山川出版社 〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-13-13 TEL:03-3293-8131 https://www.yamakawa.co.jp/

アクティブ・ラーニング型の地理学習推進に!

大会会場ブースにてデモ実施!

Field ON!

フィールド オン!



Web-GISとタブレットアプリが連携したデジタルマップ作成システム

フィールドワーク → **情報集約・編集** → **共有・発信**

写真撮影+コメント入力
GPS位置情報を自動記録

Web-GISへ自動アップロード
地図上で整理・編集

同じ地図を見ながら議論

授業テーマの例

防災	避難路の安全性(現地危険箇所+ハザード想定の重ね合わせ)
都市	土地利用変化/空き家・空き店舗/交通結節と中心性
環境	暑熱(ヒート)/緑陰/水循環(湧水・暗渠)/ごみ分布
観光	回遊・滞在・案内表示(多言語)とルートの関係

東京法令出版株式会社 〒810-0011 福岡市中央区高砂2丁目13番22号 TEL:092 (533) 1588

Field ON! のお問い合わせ先
〒380-8688長野市南千歳町1005
TEL:026(224)7046/E-mail:bousai@tokyo-horei.co.jp

九州高等学校地理教育研究会第２４回研究大会（鹿児島大会）
おめでとうございます

人を想う、人と輝く。

鹿児島純心大学

●人間教育学部
　教育・心理学科

●大学院
　人間科学研究科

●看護栄養学部
　看護学科
　健康栄養学科

●情報学部
　社会共創学科

※令和９年度認可申請中

公式キャラクター
純ちゃん



〒895-0011　鹿児島県薩摩川内市天辰町 2365　TEL：0996-23-5311

公式サイトは
こちら→

学校法人 鹿児島純心女子学園

〒890-8525
鹿児島市唐湊四丁目 22 番１号
TEL：099-253-2677
FAX：099-254-5247

大会公式サイト

九地研第24回研究大会

つなぐ むすぶ

鹿児島大会2026